0054649000

0054649-000

550-69-(14)

撰集抄

芳賀矢一・校

富山房

昭和2

AID

文學博士　芳賀矢一校訂

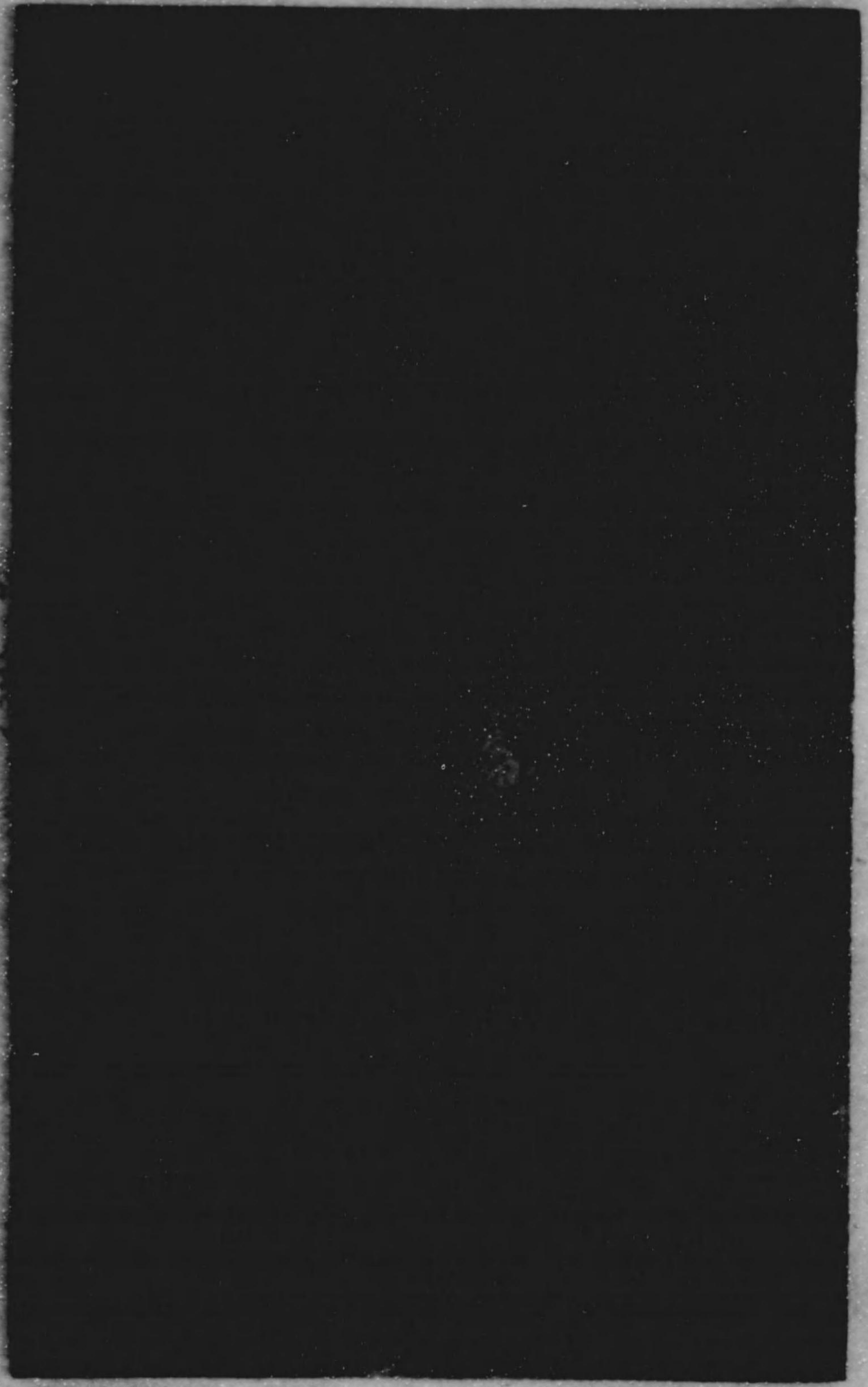
集抄

東京　冨山房發兌

2J91
帝國圖書館藏
[redacted]
昭和二.一〇

[illegible]の[illegible]「[illegible]行[illegible]」[illegible]

作者不詳 「西行物語繪」嵯峨釋迦堂の段



松村呉春筆「西行と江口遊女」

松村呉春筆「西行と江口遊女」

撰集抄はしがき

撰集抄は鎌倉時代に起つた佛教文學の白眉で、康頼入道の寶物集とともに重要視すべきものである。その古くから行はれたことは、一遍上人語録巻上消息法語の中に、本書の名目が記載せられてゐるのでも證明し得られる。寶物集の佛教臭味の濃厚なのに反して、これはそれが淡泊で、興味は津々たる點が歡迎の本となつたのである。著者は有名な天成の歌人西行法師となつてゐる。

西行俗姓は佐藤、名は義清(又憲清)、佐藤太秀郷九世の後裔である。保延の初頃鳥羽上皇に仕へて北面の武士となり、左兵衛尉となつた。名門の出である上に、歌人で弓馬の達者でもあつたところから、上皇の信任が厚かつたが、一向に榮達名聞を欲求しなかつた。然るに會々族人憲康が壯年の身を以て頓死したので、年來胸中に鬱勃してゐた厭離思想がここに至つて忽ち破裂し、遂に家を脱して墨染衣の人となり、法號を圓位と號した。時に保延六年二十三歳である。塵界の覊絆を脱れた彼は、爾來月と花とを友として雲水斗藪、日本國中足跡至らざるなく、五十有餘年の自適生活を續けて、

願はくは花のもとにてわれ死なんその如月の望づきの頃

の素望の通り建久元年二月の望月の夜に化寂した。享年七十三歳である。

さて本書に就いては古來說があつて「耳底記（烏丸光廣と細川幽齋との問答書）」に、西行の書いたものに後人の書き添へたものであらうと載せてある。現に書中を熟讀して西行ならぬ人の筆つきと認められる處や、西行が自身には書く筈で無いふしが、數多あることを知り得るので、他人增補說は爭ふべからざる事實となる。その古刊本には元和頃の木活字版三卷（嵯峨本と稱す）や、慶安三年の木版本九卷を始め廣略兩樣の本がある。廣本は九卷百十七章、略本は九卷五十八章である。その他異本としては「増補 西行撰集抄」三卷六冊百三章（文化七年京都須原書林）、九卷七冊百十七章（元祿十四年江戸版）、九卷三冊五十八章（刊行不詳）。その他古寫本を數へれば、相當數に上るであらうが、要するに序文に、「卷は九品の淨土に思ひ宛て十に一をもらし、事は八十隨好に思ひよそへて百に二十を殘せり」と明言してあるから、當然九卷八十章あるべき筈である。今異本の是非眞假、内容の顚末せる諸點を論ずるのは別として、廣本が既に鎌倉末期から存在した模樣があり、增補加筆されてはゐるものの、著者の命意を尊重して敎誡撰集の本旨を達せしめてゐる。或は本書は全然西行の作に非ずして、無名者が西上人の名に托して書いたものかといふ說もある。推していへばさうも斷ぜられぬことも無いけれど、今は姑く舊傳に從つて說く。

撰集の語は釋迦牟尼佛在世並に前世に關する事蹟百條を類聚した呉支謙譯の「撰集百緣經」や「撰集三藏」の題名などに用ひられ、事實を蒐錄するといふ意義である。著者が本書を作つた主意は序文にある如く、「人間は生死の長い眠が醒めやらないで、夢にのみほだされ、あけくれは只妄念にのみ纏まされる。同じ夢に遊ぶにしても、新習の實き道を選び覓め、昔の跡を書き集め、撰集抄と名づけて座右に置き、一筋に菩提心に願まう、」といふ處から起つたものである。人間は如何に賢明なりとても神佛の加護冥助を受けなければ、一も大事を成し得ぬ、末世に於ては殊に然りと說いて、處々に神明の利生を載せてゐる。卷頭第一章增賀上人の條に伊勢太神宮、四卷第十四章に嚴島明神、宇佐八幡、同卷第十五章に春日神社、第七卷第四章に鹿島明神の神德を稱へて、兩部說ではあるが、かにかくに日本の神國である所以を主張してゐる。その他和漢の名僧智識に關する逸話傳說を「往生傳」、「往生拾遺傳」、「發心集」等から採錄し、道眞、篁、行平、忠岑、匡衡、伊勢、公任、實方、顯基、業方などの詩歌文章に關する奇談逸話を擧げ、加ふるに西行が修行中の見聞を

叙述した一種の説話物である。その内容が後世の文學に如何に影響してゐるかといふに、謡曲の「江口」、「雨月」、「松山」、「天狗」、「實方」、「初瀬西行」の題材を提供し、また秋成や馬琴等の述作の材料ともなつてゐる。本集はまた勅撰歌集所載の名歌を解するなどに好資料となるものが尠くない。概して佛教文學書中趣味最も饒かなるものとして擧ぐべきものの一である。

本文庫には元祿刊本を以て校訂し、片假名文を讀み易からしめんが爲に平假名に改め、各卷末に略註を附けて讀者の便に供した。これは所謂の舊本には無いものである。

本書はもと芳賀博士の校訂に係るものであるが、本書の刊行を見るに及ばずして遂に逝去されたのは遺憾である。今不肖ながらこの小序を綴つて聊か故人の志を繼ぐ。

昭和二年四月中旬

和田萬吉

撰集抄目次

第一

(一)増賀上人の事……(三)
(二)祇園の御託により或男發心の事……(五)
(三)或僧印西に向つて歌を讀む事……(八)
(四)國行の三位遁世の事……(一一)
(五)宇津の山の僧發心の事……(一三)
(六)浮き世に住む人無常を知らず偽り拵へて世を渡る事……(一四)
(七)新院の御墓讃州白峯にこれ有る事……(一六)
(八)行賀僧都耳を切る因縁の事……(一九)
(九)一和僧都の事……(二三)
(一〇)[illegible]の事　青蓮院の宮……(二七)

（一二）播州平野の僧発心の事……（二九）
（一三）花林院の永玄僧正の事……（三一）
（一四）雲林院にて説法を聞きて発心する男の事……（三四）
（一五）慈恵大師の白骨の前、女人に法華を授くる事……（三六）

第二

（一）播州山居の僧、頸を搔きて往生の事……（四一）
（二）迎西上人の事……（四三）
（三）見仏上人の事……（四六）
（四）静円供奉の事……（四八）
（五）播州竹の岡の尼発心の事……（五〇）
（六）勝尊上人往生の事……（五三）
（七）三井寺の学徒法滅して菩提心を発す事……（五五）
（八）覚日上人の事……（五五）
（九）賢西上人の事……（五六）

第三

（一）正直男往生の事……（六〇）
（二）葛木山の麓の男発心の事……（六三）
（三）摂津国平野の三郎発心の事……（六四）
（四）良観僧正の事……（六六）
（五）西住法師の事……（六九）
（六）範円聖人の事……（七一）
（七）中納言顕基の事……（七四）
（八）東大寺僧[illegible]の事……（七六）

第四

（一）慈円大僧正の事　天台座主……（八一）

(二)宗順阿闍梨入唐を留まる事……(八三)
(三)永賢大僧都遁世の事……(八四)
(四)大隅三郎近宗妻の嗔恚を見て發心の事……(八六)
(五)内記入道保胤の事……(八七)
(六)永觀僧正遁世の事……(八八)
(七)乞食の僧覺尊に向って歌讀む事……(八九)
(八)中納言の局小倉山の麓に住む事……(九〇)
(九)西山の僧德大寺殿へ參らさる事……(九一)
(一〇)勝蓮阿闍梨親族の慈悲發し給ふ事……(九三)
(一一)眞誓僧正の事……(九五)
(一二)近江國の男發心の事……(九八)
(一三)江口の遊女の事……(九九)
(一四)嚴島並に宇佐の宮の事……(一〇一)
(一五)春日へ參詣の事。西行……(一〇三)
(一六)高野へ參る事付骨にて人を造る事……(一〇六)
(一七)玄奘三藏并に眞如親王渡天の事……(一〇七)
(一八)人々友亡の事。御冷泉院　女院　後三條院　大相國　大二條殿……(一〇九)
(一九)林懷僧都の事……(一一四)

第五

(一)西行上人の事……(一一九)
(二)西住上人往生の事……(一二三)
(三)富家入道殿春日參詣の事……(一二四)
(四)惠心僧都賀茂の社參籠の事……(一二七)
(五)桑門の僧山居往生の事……(一二八)
(六)慧遠禪師の事……(一三一)
(七)性空上人の事付室の遊女の事……(一三三)
(八)郁芳門院の侍武藏野にて經を讀む事……(一三八)

（九）近衛院の三位発心の事……（一三九）

第六

（一）唐土の帝子の事……（一四四）
（二）西山聖宗僧の事……（一四六）
（三）相模国大庭僧の事……（一四八）
（四）仲算并浄蔵貴所の事……（一四九）
（五）高心僧都の水想観の事……（一五一）
（六）無相房水の上に座す事……（一五三）
（七）覚鑁上人定の中に不動と成る事……（一五五）
（八）義景といふ武士、宮仕の情の事……（一五七）

第七

（一）山居の僧三昧不下に得る禅定の事……（一六一）

（二）京都長谷寺を信じ天眼を延ぶる事……（一六三）
（三）大智明神の御事……（一六四）
（四）鹿島大明神の御事……（一六五）
（五）敵ある男、山伏の笈の中へ入れ助かる事……（一六七）
（六）山居の尼念仏往生の事……（一六九）
（七）小野篁嵯峨院にて詩作る事……（一七一）
（八）都良香竹生島并朱雀門にて詩作る事……（一七三）
（九）清慎公并に野相公の事……（一七四）
（一〇）大江朝綱公并に白楽天の事……（一七五）
（一一）北野大臣の御事……（一七六）
（一二）菅相の次郎天神の勅に依り御優免ある事……（一七七）

第八

（一）公任位進み并に行平遷流の事……（一八〇）

（二）隆義老苦を歎き并に高光少將を歎する事……（一八一）
（三）公任、能宣、業性三人名歌の事……（一八三）
（四）中務元輔、實方、兼方、忠岑歌の事……（一八五）
（五）伊勢歌の事……（一八七）
（六）躬恒、花山院、義孝御歌の事……（一八八）
（七）遍昭名歌の事……（一九〇）
（八）經信大納言化生の物に遇ふ事……（一九一）
（九）行尊僧正、室の岩屋の名歌の事……（一九三）
（一〇）侍從大納言成通卿の事……（一九四）

第九

（一）鳥羽院御中陰琵琶弾き給ふ音聞ゆる事……（一九九）
（二）慈心僧都御の蓮花の事……（二〇〇）
（三）粉川觀音西郷奉成に藥を施し給ふ事……（二〇一）
（四）内侍所の御事……（二〇三）
（五）大江貞基入唐求法の事……（二〇六）
（六）安養の尼蘇生の事……（二〇八）
（七）僧理大德の事……（二一〇）
（八）行眞大德發心の事……（二一三）
（九）道希婆羅提寺遷化の事……（二一五）
（一〇）空體房の事……（二一六）
（一一）江口の遊女尼に成る事……（二一九）
（一二）寶房十一歳母の孤獨崩造り給ふ事……（二二二）
（一三）西行者の尼に遇ふ事……（二二五）
（一四）南都覺英僧都の事……（二二六）
註釋索引
註釋

撰集抄目録終

挿圖

（一）「江口の君」の圖　吳春筆（紙本著色、竪四尺七寸、横二尺七寸五分。）紀伊國 濱口吉右衞門氏所藏

（二）「西行物語繪卷」筆者不詳（紙本淡彩、二卷、一丈九尺四寸七分の一部）德川義親侯所藏

（三）「撰集抄古寫本」橋本進吉氏所藏

撰集抄

西行記

序

生死の[illegible]やらで。夢にのみほだされつつ。水の面の月を實とおもひ。鏡の内のかげ[illegible]てあけくれは。只妄念の心のみうちつゞきて。生死の船をよそへずして[illegible]の外にもてはなれ。＊鳥部＊舟岡のけぶりをよそにみて。過ぎにし方四十[illegible]しらずけふしもやあるらむ。しかれば同じ夢のうちの遊にも。新舊の賢[illegible]の葉を書集め。撰集抄と名付けて。座の右に置きて。一筋に知識に頼まんと[illegible]の中に思寛。十に一をもらし。事は八十隨好に思よそへて。百に廿を殘せり。[illegible]凡夫の[illegible]月を見ず。心老いて。斷妄の利劍おこらざる物なり。されば偏に冥助をあふぎ奉らんが爲に。卷毎に神明の御事をしるし載せ奉り侍り。

撰集抄第一目録

〔一〕增賀上人の事
〔二〕[illegible]にて有男發心の事
〔三〕[illegible]西に向ひて歌を讀む事
〔四〕[illegible]行の三位[illegible]の事
〔五〕宇津山の僧發心の事
〔六〕浮世に住人不知無常一偶構て世を渡る事
〔七〕新院の御墓讃州白峰に有之の事
〔八〕行賀僧都耳を切る因緣の事
〔九〕一和僧都の事
〔十〕[illegible]眼の事　寺[illegible]院宮
〔十一〕播州平野の僧發心の事
〔十二〕花林院の永玄僧正の事
〔十三〕雲林院にて說法を聞て發心する男の事
〔十四〕慈惠大師の白骨の首女人に授くる法華之事

西行記

撰集抄第一

〔一〕增賀上人の事　慈惠大師御弟子

(一)昔增賀聖人と云ふ人いまそかりけり。いとけなかりけるより。道心ふかくて。(二)天台山の根本中堂に。千夜籠りて是を祈り給ひけれども。なを實の心や付きかねて侍りけん。或時たゞ一人伊勢太神宮に詣でて。祈申し給ひけるに。夢に見給ふ樣。道心を發さんと思はゞ。此の身を身とな思ひそと。示現を蒙り給ひけり。打驚きて思す樣。名利を捨てよとにこそ侍るなれ。さらば捨てよとて。きて給ひける小袖衣。皆乞食共に脫ぎくれて。單衣なる物をだにも。身に掛け給はず。赤裸にて下向し給ひけり。見る人不思議の思ひをなして。物にくるふにこそ。見めさまなどのいみじさに。うたてやなど云ひつゝ。打ちかこみ見侍れども。露心もはたらき侍らざりけり。道々物を乞ひつつ四日と云ふに山へ登り。本住み給ひける慈惠大師の御室に入り給ひければ。宰相公の物に狂ふとて。見る同朋もあり。又かはゆしとて見ぬ人も侍りけるとかや。師匠の大師ひそかに招き入れて。名利を捨て給ふとは知り侍りぬ。但かくまでの振舞ひ侍らじ。いや(三)只狂惑を露して。心に名利を離れ給へか

しと諫め給ひけれども、名利をながく捨てはてなん後は。さにこそ侍るべけれとて。あら楽しの身や。おう／＼とて。（四）立走り給ひければ。大師も門の外に出で給ひて。はる／＼見送り侍りて。すゞろに涙をながし給へり。増賀はつひに。大和国多武の嶺といふ所に＊さそらへ入りて。智朗禅師の庵の。かたばかり。残りけるにぞ居をしめ給へりける。げにもうたてしきものは。名利の二つなり。正しく貪瞋痴の三毒より事起りて。この身を実ある物と思ひて。これを助けんために。そこばくのいつはりを構ゆるにや。武勇の家に生るゝものは。胡籙の矢を早くつがひ。三尺の剣を抜きて。一陣を駆けて命を失ふも。名利勝他の為なり。柳の＊眉細くかき。蘭麝を衣にうつし。秋風の名残を送る妾ともてあつかふも。名利の二に過ぎず。又慳貪の族に身をやつし。念珠を手にくるも。詮は只人に帰依せられて。世を過ぎむとのはかりごと。或は極位極官を極めて公家の梵筵に列り。三千の衆徒にいつかれんと思へるも。名利の二を離れず。この理を知らざる類は。申すにおよばず。（五）跡止観に眼をさらし。法文の至理を。弁へ侍る程の人たちの。しりながら捨侍らで。生死の海にただよひ給ふぞかし。誰々も。これをもて離れんとし侍れど。世々を経て思ひなれにし事の。改めがたさに侍り。しかあるにこの増賀上人の名利の思ひを。やがて振り捨て給ひけん。有り難きには侍らずや。これ又伊勢大神宮の御助にあらずば。いかにしてか。この心もつき侍るべきや。貪瞋痴の

村雲ひき覆ひ。名利の重病なる身の。五十鈴川の波に清がれて。天照太神の御光に消ぬるにこそと。返々忝なく貴く侍り。この事いつの世に忘れ奉るべきや。

〔二〕依祇園御託宣有男発心の事

過ぎにし比九重の外。白川の辺に。幽なる庵結びて。深く後世の営する人侍り。この人親の処分をゆゑなく。人に押とられて。詮方なく侍りけるまゝに。（六）祇園に。七日籠りて。ことはり給へと祈り申し侍りけるに七日と申すに曙。御殿の御戸を開かれて。やゝと仰せられければ。大明神の御託宣にこそとおもひて。いそぎおきなをり。畏りて侍るに。気高き御声して。

（七）長きよのくるしき事を思へかし。かりの宿りを何歎くらん

と御託宣なりぬと思ひて打驚きぬ。この御歌につきて。つくづく案ずる様。げにも仇にはかなきはこの世なり。（八）昔に見し人朝に死し。朝にありしたぐひ夕に白骨となる。悦もさむる時あり。歎もはるる末あり。楽尽悲来。手のうらをかへす世の中に。思を留めておろかにも。来世の長き苦を。歎かざりけん事のはかなさよと思ひて。はや手自本鳥を切りて。（九）妻子にもかくともいはずして。白川の辺にて。竹など拾ひ集めて。如形庵しまはして。明暮念仏をぞ申し侍りける。この身ををしむにはあらざりければ。たゞ息の通はんを。限とすべしとおもひて。里に出でて物を請ふわざも侍

らず。只二心なく念佛を申侍りければ。あたり近き人ゝ憐れみて。命を繼ぐたよりをぞし侍りける。かくて日數經にければ。妻子聞得て。彼所に來り侍りて。とかくこしらへ侍りけれども。あへて返事もし給はず。能ゝ念佛をぞし給へりけるさうなり。何してか道心も醒むべきなれば。こしらへかねて歸り侍りぬ。さて彼女房の沙汰にて。庵さるべき樣につくろひ。世渡るべき程の具足等へ送れりければ。手自いとなみてぞ。日數送り給ひける。さる程に世の中隱なきわざなれば。國分押取りける人。是を聞きて。淺猿や。かく程までは思はざりき。げにも憂き世の暗こそ。悲しかるべきにとて。押たりける所をば。本の主の道心おこせる人の。北の方にとらせて。やがて本鳥切りて白川の庵にいたりて。しかくといふに。本の聖も憐れに思ひて。よよと啼くめり。さらばいづちへか在すべき。是にて諸共に念佛し給へかしといへば。(九)さうなり。いづちへかまかるべき。一所に侍らんこそ。本意ならめといひて。内に入りぬれば。むつまじき友となり侍りて。同時念佛し給へりければ。功積り貴くすみ渡りて。夜を殘す老の寢覺にはあはれと聞きて。涙をながす人のみ多く侍りけり。かくて二年と申せしける。三月十四日の曉に先に世を遁れ給ひし人は。西に向きて座し。後に家を出で給ひし聖は。かの座せる上人の膝を枕にて。眠れる如くして終をとり給へり。明けにしかば。人雲霞の如く走り集りて。往生人とて(一〇)結緣をぞし侍りける。その形をうつし留めて。今に侍るとかや。この事を聞くに。すゞろに涙所せき落ちて侍り。如此よしなく人に疎げをなさるるには。かなはぬまでも。夜晝暇を惜ひて。すゞろに心をつくし。神佛に詣でても。あしかれとのみ祈りて。いとゞ思ひに思ひを重ね。ますく罪に罪を添へて。この世むなしく。來世徒らになりはてぬるは。世の中の人なるぞかし。しかあるにこの聖の。神のみことのりを。げにと深く思ひ入り侍りて。悲しくおぼえし女。いと惜かりし子を振捨てて。桑門の類となり給ひけん。すべてありがたきには侍らずや。我等如きのものの。いまの示現を蒙り侍りたらんには。先づ申す願をばかなへ給はで。あはれ道心の歌。なにとも覺へずと。神を識り申すとも。よもこの世をば振捨てじと。いと口惜しく侍り。又押取りけん人の發心は。なをたけありて貴く侍り。亡樣の敵などの。出家遁世せんは。いとゞうれしくて。ますます財寶にこそつながるべきに。淺ましと思ひて。一つ庵に行きて。後世のつとをたくはへ給ひけん事。筆にものべがたく侍り。印度もろこし我が朝に。つらく昔の跡を訪ふに。うき事にあひて。世をのがるゝ類は。多く侍れども。未だきかず。よろこびありて世をすつとは。されば往生の素懷をとげ給ふもことはりなり。(一一)和光利物の御めぐみ返ゝも忝く侍りき。(一二)本地阿彌陀。久遠實成正覺。爲度衆生故。示現大明神されなり。久遠正覺の如來。和光同塵したまふらん。ことにかたじけなく侍りけり。

（三）有德印西に向いて歌詠事

中比都の内に。いづくの者ともしられで。さすらへありく僧侍り。かしら面より始めて。足手どろかたにて。気色あさましきが。（一三）瞬またき物などもきず。莚薦などうちきつゝ。人の家に入りて物をこい。世をわたり侍るになん。心ばへのいみじくよくて。又心たしかに侍り。柳の木の枝なども。ぬしのゆるし侍らねば。取り用ふるわざも侍らざりしかば。人あはれみをたれて。命をさゝゆる程の事は侍りけるとかや。或時人の家によび入れて是れきよとて。帷を得させ侍りければ此の僧の云ふ様。御志は返ゝも有難く侍り。かゝるたよりなきものは。人の御あはれみならでは。何とてか片時も侍るべきなれば。便宜よく侍る時には。これを給はる。但し我れ等は莚こもをきなれて。さ様のものを肩にかけ侍れば。是はいとあたらしく侍るべければ。返し奉るに侍り。たゞ莚こもなどの。すて給ふべき時侍らん。それらをば得させ給ふべきとて。返しければ。あるじおもはずに（一四）おぼえて。をしてとらせ侍れども。思ひ様侍るとて。露手にもかけねば。力なくてやみにけり。物なども凡おほくはくはず。人のえさせなどするにも。今日はたべぬれば。由なしとてとらずぞ侍りける。後のためとてたくわうるわざもなし。念佛申し要文など誦して思ひ入りたるさまなれども。法文のかたには。もてはなれたるさまをぞしける。或時印西と云ふ聖のもとにより来りけるに。聖対面して。心のはるけ侍るべき。法文一言葉の給はせよと。懇に聞え侍れば。そばなる垣に。あさがほの花のさけるに。露のおきて侍りけるが。おりふし風の吹きて。露の落ち侍りけるをみて。打涙ぐみて。

みるやいかにあたにもさける槿の。花にさきたつ今朝の白露

是れこそ法文よとて出で侍りぬ。其の後はいづちへかさすらへ行きにけん。ふつと見へ給はずとなん。此の聖のありさまうけたまはるこそ。殊に貴く覚えて侍れ。げにあるにもあらぬ夢の世に。はかなくあだなるみに思ひを留めて。山林にも籠りやらで。名利の心もはれざんめるに。ひたすらまぼろしの世。かりの身をもてはなれ徳をかくし。乞食頭陀のありさまを示されけん。心の中貴に。いさぎよくぞ覚え侍る。昔の賢き跡をみるにも。一葉萬里によりて。徳をかくすと云へり。されば何なる智者の。心を發せるにておはしけるやらん。返ゝゆかしく侍り。歌さへありがたく侍るぞや。槿花をこそは。はかなき例には申すめるに。花にさきだつしら露。おちては更に跡もなく。吹きすぎぬる風。又とゞまる所も見えず。花又日かげに随ひてしぼみ。日は虚山にかたぶきぬ。あだなる世の中に白駒（一五）もすぎやすく。金烏（一六）も留めがたし。されば何とてしばしが程も。いたづらとしてすごせるや。頭にはすゞろに。老の波をかさね。眉には霜の積れるをも弁へずして。はかなき嬰児の。

父母に貪するごとくにして。むなしくはせ過ぎ。来世のくるしみをおもへば。地獄にはあらずや。しりがほにしてしらざるは。生死の無常に侍るぞかしな。あはれ此の乞食の人の。心のごとくなるおもひが。須臾ばかり付かじと覚えて侍り。此の事。江師の往生傳に註し載せ給へり。捨てがたさに。たくみの詞を。いやしげに引きなし侍るなり。見及ばざるにはあらず。彼の歌には平の京。東山の麓にて。往生の素懐を遂げぬと侍るをみるに。すゞろに涙をちて侍りき。哀しき彼等かな。十二因縁輪廻の間。巡りて無レ絶。二十五有流転の悪業るに不レ竭。前際定て輪廻の郷より来り。後際必ず生死の宅に帰りて。たがひに受胎を出でざる有情の類に。或は父母となり。或は師弟となり。主従として是も哀し。彼も貪りて後れ先立つ時は。往因の報ゆる所をもしらで侍らで。只一世の恋とおもひ。紅涙その事となく。袂を染めて。我が後の世の有様をもしらず。實におろかなるに侍らずや。往事を夢の夢かと思へば わかれのつらきは夢にもあらず。聖賢を昔の夢かと疑へば。古の昔はふたゝびきかず。(一七)仲尼鯉に哭し。(一八)羅睺羅に先立つ。聖人も此の歎をまぬかれず。上代英賢の跡を離れ侍らず。況んや末世をや。(一九)我が朝の右大将軍は。小うして父母に先立ち。(二〇)京極大相國。老いて長嫡に哭しましましけん。時に取り御身に當りて。千萬く恨み。只一身に有りとこそ思食し侍りけめ。可レ知無レ情は只生死の家鉄有る此の輪廻の綱なり。既に此の理を思ひ解きて。輪廻の流

の寄りはてず。月の影の消えざるさきに。後の世の勤をはげまし給へとなり。

〔四〕國行の三位中将の事

(二一)七條の皇后。失せさせ給ひしかば。人々散々になり行きて。宮の内あれはてゝ。ものさびしきありさまにて。侍りけるにこそ。様を替へ。袂を染め給へる方も。いまぞかりけるなんめり。其の中に後の御所にさぶらひける。(二二)伊勢と云ふ女房の許へ。人のとぶらひ聞き侍りける返事に。

(二三)をきつなみ あれのみまさる 宮のうちに 年へてすみし いせのあまも 舟ながしたる 心地して よらむかたなく かなしきに 涙のいろの くれなゐは われらの中の しぐれにて 秋の紅葉と ひとびとは をのがちりぐ わかれなば たのむ蔭なく なりはてゝ とまる物とは花すゝき 君なき庭に むれたちて 空をまねかば 初かりの 鳴きわたりつゝ よそにこそ見め

と詠み侍りけるを。宮の内の人々。是を聞き給ひて。殊にあはれみ思はれけるにや。* さうなり。さこそかなしくもをはしあひ給ひけめな。たのみもかけ奉る。皇后におくれ奉りて。日数もいまだ不レ経。袂もさかりとぬるゝ比。あはれにはかなき事を聞き給ひけん。心のうちどもは さぞ侍りけん。されども。浮世を厭ひとるたぐひ。さすが稀なるに。國行の三位と聞きし人。此の歌を見給

ひて彼いよ／＼歎きの重なり給ひて。手自本鳥押切り。剰に妻子をふり捨て。いづちともなくまぎれ失ひ給ひけり。後にはつゐに。又も見へ給はでやみぬと。ほの傳ひうけたまはるぞ。げに有難く覺えて侍り。指して日頃。心を盡し給へる人とも見へ給はざりけるに。さりがたき妻。いとをしき子をふり捨てて。行方しらずなり給ひけん。心の貴さは。筆にものべがたく。詞にもつくしがたし。實に妻子珍寶及王位。臨命終時不隨心とて。（二四）三途のちまた。（二五）中有の旅には。妻子珍寶身にそはざるのみならず。獨りて冥途にたゞよふ物なり。されば此のまぼろしの。しばしの程の愛着。ながく苦患の戸ざしたらん。心憂きにあらずや。唯戒及施不放逸今世後世爲伴侶とて。冥途の悲しきみちには。戒施不放逸のみこそ。身をばたすくなれ。しかしはやく恩愛をふり捨てて。戒施の功徳を。たくはへんと思ひ侍るなれど。年を經て思ひなれにし事のしのびがたくて。まゝとすぐすに侍り。しかるに此の三位の殿に發心して勤め給ひけん。浦山しきにはあらずや。道心のさめ給はざりければこそ。又も見へ給はざりけめと。貴く覺え侍り。さても往生の素懷をとげたまひなば。最初結縁の人にては。伊勢のみにてこそ侍らめと。すゞろにあはれに侍り。

〔五〕宇津山の僧發心因縁の事

「以往あづまぢのかたへ。＊さすらへまかり侍りしに。（二六）宇津の山邊の程。見過しがたく覺えて。暫時

く尋ね入りて侍りしに。いとゞたに。つたの細路は心ぼそきに。日かげももらぬ木の本に菴のごとくなる所結びて。（二七）坐禪せる僧あり。齡は四十ばかりにもなるらんと見侍り。いかにいづくの人の。なにゝつゐてか是には住み給ふらむ。又發心の因縁かまほしきよし。尋ね侍りしかば。「我は駿河國の者なり。武勇の家に生れて。（二八）三尺の秋の霜をよこたへて。（二九）五寸の鏑を。つかふべきしなの者なりき。しかあれども。生死無常のおそろしく覺えて。より／＼心をしづめて。坐禪などし侍りしかども。終に世を遁捨て得ずして侍る程に。（三〇）年頃の女なん身まかりにしかば。いよ／＼心もとゞまらで。＊本鳥切りて此の山に籠り侍り。「我は松崎と申す寺に侍りしを。親しき者どもとかく申す事の六借しくて。人にもしられず。此の二年斗に侍るなり。時々里に出て物を乞ひて。かたのごとくの命をつぐに侍り。今又心の澄みて。いたく物などのたべたきわざも侍らねば。月に二三度なんど。くひ侍るなりとぞの給はせし。あまりに貴く。浦山敷覺え侍りしかば。我ももろともにすむべきよし。聞へ侍りしかば。更によしなし。我も迷ひ。人もあやまる。（三一）たがひに知識にもなりがたし。いづくの所にも心を澄し給へ又尋ねてもおはせよかしとて。いたくもてはなれては。見へざりしかども。心うく不覺の心にて。やがてすみかとも定めずして。庵を罷りて出で侍りぬ。さても都へ歸るさには。過さりがてらならず。尋ね來るべき心ちして侍りし程に。思はざるに雜事等にさそらへ罷り

て久しく侍りき。のぼりさまに[illegible]よりつたひ侍りしかば。忘れ奉るには侍らざりしかど。つゐにむなしくやみぬ。[illegible]心のありさま。誠にすみてぞ侍る。「印度月支[illegible]のことは。[illegible]に[illegible]たり侍れば　且聞之。我が國[illegible]の。昔の賢き人は。見たてまつらねばしらず。いかがおはしけん。是はまのあたり見侍りしに。貴さたぐひなく侍りき。谷の深きにかくれて。峯の[illegible]に[illegible]えて。すめる月を見給ひけん。深山[illegible]て侍る。只何となく[illegible]ける跡を聞くにも。峯のほとり。み山のすまひのすめる事を。見るには其の事となしに。涙を催す事侍り。まのあたりその[illegible]を見奉りしに。[illegible]の[illegible]か流れけん。さても今又いかなる浄土にかをはすらんと。返々も床しく侍り。抑[illegible]とは。いかなる[illegible]ぞや。[illegible]をすてゝ。心に心を[illegible]じ[illegible]りて。心を[illegible]つべきにや。又[illegible]をはしり。木[illegible]天にいばふなんどいふ。[illegible]をむねにもつべきにや。もちては又いかゞあらん。たゞかぎりなく守るべきにや。[illegible]は[illegible]の[illegible]心侍らば。[illegible]にても侍りなん。念は[illegible]の如し。[illegible]に[illegible]に似たりと云ふ。古人の[illegible]あり。よく〳〵心をとめて。[illegible]し[illegible]はよこれぞ三[illegible]の中の[illegible]の行に侍れば。百[illegible]の[illegible]をつくらんにもまさりやし侍らん。何なる[illegible]も。只こゝろによるべきとぞおぼえ侍りめる。

〔六〕浮世住人不[illegible]

「過ぎにし比。[illegible]したの上村と云ふ方に。まかり侍りたりしに。[illegible]は[illegible]のほとりにて。奥よりの[illegible]にて[illegible]あつまりて。[illegible]の市のごとし。たゞ[illegible]のいろくづ。山の木のみ。[illegible]布のたぐひを。うりかふのみにあらず。人[illegible]の[illegible]を[illegible]せり。其中にいとけなく。又さかりなるは申すにをよばず。[illegible]はしきりに[illegible]をいただき。[illegible]にはそゞろに。あづさの弓をはりかゞめて。今日明日ともしらざるものゝ。しばしの[illegible]の命を[illegible]けんとて。そこばくの[illegible]を[illegible]へ。人の心をたぶらかして。[illegible]せる事を見侍りしに。すゞろに涙のこぼれて侍りき。空也上人の。山かげの[illegible]のとぼそを[illegible]さはがしと[illegible]びて。[illegible]の[illegible]が辻を。さこそ[illegible]さはがしきに。是れこそ閑なれとて。[illegible]にていほり[illegible]しておはしけん。むかしもあはれに思ひ出され侍りて、とにかくに[illegible]の[illegible]せきかねて侍りき。「[illegible]を何にたとへん[illegible]ぼらけ。こぎ行く舟の跡のしら波の消えぬめるは。秋の田をほのかにてらす。よひのいなづまのやがて光の見えざむめる[illegible]に白[illegible]の立ながら。光ほのめくにばかされて。年はいたくたけぬれど。心はむかしにかはらで。思ひ入り念仏の[illegible]もなくして。いや[illegible]の鬼にとられ侍らん事。返々むらうく侍り。むなしく[illegible]の[illegible]ときえぬる夕は。むつましかりし[illegible]子。さりがたかりし[illegible]子も。かゝへもたんと云ふ事や侍らん。只いそぎて野[illegible]に[illegible]り。[illegible]につみて。一片の[illegible]にたぐへとは。むなしくよこぎる[illegible]をうらみ。[illegible]に行きて[illegible]れし野[illegible]をみれば。あさぢがはらの秋かぜのみ。

身にしみて懐に名香と見ゆるは。形もなき白骨なり。しかれば我もはかなき身。人もあだなる世なり。其におもひをそめて。とはぬまを。うらむらさきの藤の花。なにとて藤にかゝりそめけるぞと。かりの身にうらみをのこしてあふ事や。涙の玉の緒となりけん。しばしたゆれば。おちてみだるゝ苦さと悲みて。仮のやどに思を留す。いとゞはかなき妄執にぞ侍るべき。たまたま人界の生を受けて。値ひ難き仏法にあくまでむつれ奉る時。十二因縁の流転の輪を切る。廿五有の生死のきづなをくりはて給へかし。さて今生徒らくてはせ過ぎて。悪道にをもむきなば。仏法にもありがたかるべし。若し昔五戒十善の力により侍りて。悪道のちまたをはなれ侍りて。又人界へ来り侍るとも。法滅の末に生みて。仏にほのめく時ならば。其変のやみをも。照す事かたかるべし。沈水縁りて此の所にかへりなば。生死の海の船をよそへずしてこそ。又悪道へおもむき侍らんずらめと悲しく覚え侍り。凡六道四生の間。あそこ爰に流転し。こゝに輪廻して。すこしも車の輪をめぐるにたがはず。しばしもとゞまる所には。生老病死。愛別離苦の苦に責て。すゞろにうき世にほだされぬる。浮ぶとも申すもおろかなり。浮ぶとすれば沈み。沈むと思へばうかぶ。浮ぶも浮ぶにあらず。しづむも沈むにあらず。たゞかたちをかへてめぐれり。実にはてしなかるべし。

〔七〕新院の御墓讃州白峯に有之事

過ぎにし仁安の比。西国はるばる修行つかまつり侍りし次に。讃州みを坂の林と云ふ所に。しばらく住み侍りき。松山の津のならの里にて庵りむすびて。つま木こりたく山中のけしき。花の木ずゑによする風。山路へとてかよふこ鳥。よもぎのもとのうづら。日数にあはれならずといふ事なし。其夜のあか月。さびたる鐘の声を聞くに。そゞろはらわたを断ち侍り。かゝる苦は此の世の楽としも侍らねども。むそゞろにすみておぼゆるにこそ。かくても侍るべかりしに。うき世の中には跡をとゞめじと思ひ侍りしかば。立てばなれなんとし侍りし程に。新院の御墓所をおがみ奉らんとて。白峯と云ふ所に尋ね参り侍りしに。松の一村しげれるほとりに。くぎぬきしまはしたり。是なん御墓にやと。今更かきくらされて物も覚えずまのあたり見奉りし事ぞかし。清涼紫宸の間にやすみし給ひて。百官にいつかれさせ。後宮後坊のうてなには。三千の美翠のかんざしあざやかにて。御まなじりにかゝらんとのみ。しあはせ給ひしぞかし。万機のまつりごとを。掌ににぎらせ給ふのみにあらず。春は花の宴を専にし。秋は月の前の興つきせず侍りき。あに思ひきや。今かゝるべしとは。かけてもはかりきや。他国辺土の山中の。おどろのしたにくち給ふべしとは。貝鐘の声もせず。法華三昧つとむる僧一人もなき所に。只峯の嵐のはげしきのみにて。鳥だにもかけらぬありさま。見奉るにすゞろに涙を落し侍りき。始あるものは終りありとは聞き侍りしかども。

未だかゝるためしをば承り侍らず。されば世をとむまじきは此の世なり。一天の君。万乗のあるじも。しかのごとくの苦みをはなれましく侍らねば。せつり(五〇)もしゆだ(五一)もかはらず。宮もわらやも果にはてしなきものなれば。高位もねがはしきにあらず。我等もいくたびか。彼の国王ともなり給ひけんなれども。隔生即忘して。すべておぼえ侍らず。只行きてとまりはつべき。仏果円満の位のみぞ。床しく侍る。とにもかくにも。思ひ続くるまゝに涙のもれいで侍りしかば。

よしや君昔の玉の床とてもかゝらん後はなにゝかはせん

とうちながめられて侍りき。盛衰は今にはじめぬわざなれども。ことさら心驚かれぬるに侍り。さても去ぬる保元の都の軍。秋七月の比鳥羽の法王。はかなくならせ給ひしかば。一天暗闇に迷ふ。花の都くれふさがり侍りて。貴賤のたぐひうつゝ心も侍らず。なげき身の上にのみ。つもりぬる心地どもにておはしまし中に。僅に十日のうちに。主上上皇の。御国あらそひありて。上を下にかへし。天をひびかし地をうごかすまで。乱れたゝかひ侍りて。夕に及びて。大炊殿に火かゝりて。烟雲おほへりしに。御方は軍勝ちに勝り。新院の御方の軍破れて。上皇讃岐の国に遷されて。いづちともなく落ちさせ給ひしを。兵共追ひかけ奉りていさゝかも恐れ奉らで。責まいらせ侍りしを見たてまつりしに。よしなき都に出で悲しうむく侍り。さて讃岐にこそうけたまはりしか。讃岐

はある山の中より求め出し奉りて。仁和寺へうつらせ給ふ。宇治左府は。矢に当らせ給ひて御命終らせ給ひぬれば。奈良の京。般若野の五三昧に。土葬し奉りけるを。勅使たちて。死がひ実検の為に掘りおこし奉りけると承はりしに。「あはれ六道(五二)しき世の中かな。誰か知らざるうき世はかゝるべしとは。ことにあやうくはかなき身をもちて。したりがほにのみ侍りて。むなしく閻魔王して。無常の鬼にとらるゝ時。声をあげてさけべども叶はずして。冥途にのみ廻めぐり侍らんは。いとゞかなしかるべし。」栄耀もなく。無常もはなれ侍らん世なりとも。仏の位目出度きと聞きたてまつらば。などかねがはざるべき。況んや栄耀ばなはだしきをや。無常すみやかなるをや。たゞ心をしづめて。往生を願ひ給へ。すこしも身にやかはり侍らず。賤しき身も。貴なるも数ふるも。みな夢のまへのかまへなるべし。

〔八〕行賀僧都耳を切[illegible]の事

むかし奈良の京。山階寺の僧にて行賀僧都と云ふ人(五三)いまそかりける。平備大臣の御子にてぞ侍りける。法なき智者(五四)にていみじく。法の跡どもを施し給へりける人なり。三国(五五)の秘要にすみ侍りけるに。ある夕暮方に。四十あまりにみゑ侍る法師の。みめさまより始めて(五六)すがたありさま。いとゆうになん見え侍る賤のものゝ。しのびやかにより来て。打ちなみだぐみて。行賀僧都に申(五七)すやう。

かすべくも覚しめしよるまじきわざなれば。申すともふつに叶ふべしとも覚え侍らねども。思ひわびてそればかりこそたすけ給はめと思ひて。泣く泣く申すになん。我がうしろに隠れ出て。已に死に侍らんとす。命のおしきはさる事にて。此の苦痛にいきてながらふべくも侍らぬ程に。当時堪え給へる若君にみせ給へば。貴からん聖人の。左の耳を取りて来れ。つくろいやめんといふ。さらでは敢ひ七歳(一五八)の時を山つかとつめるとも。苦痛やむべからずと申し侍りしかども。いかなる聖人も。我が耳切りてあたへ給ふ事侍らじと思ひ侍りて。たゞかひなき涙のみこぼれて侍りつる程に。おもはざるそこの御事こそ。貴き聖事なれば打ちわび申さんには。さる事もや侍らんずらんと。人のつげ侍りつれば。もしやと参り侍りたりとてさめぐ\となくめり。大臣に覚えて。いかなる者ぞ見んとの給ひければ。うらかたぬぎて侍り。みるに目もあてられず。かわゆしとも事もなのめならず侍りければ。さる事ならばいとゞやすしとて。かみそりをもて。左の耳をきってとらせ侍りければ。手を合せて礼を施し臥拝みてさり侍りぬ。さて大臣は我が身のいたき事は。露おもひ給はず。此の女子の行末のみぞおぼつかなく思ひ給へりける。かくて又人に逢るべくもなかりければ。今はひたすら。世間を思ひ捨てて。三輪と云ふ所に。思ひ澄してぞ籠り給へり。賤きながれにすゝぎてし。彼の色を又はけがさじの。文覚の昔の跡ゆかしく。げにと思ひ入りて。月を眺り前をかきね給へ

り。かくて何の頃にか侍りけん。御門のまどろみ給ひけるに。十一面観音の御枕の上にわたらせ給ひて。いつぞやたまはりし耳は。既に今かへし来るなり。更に御悩はふかくおはしけり。あらかじめさむる事なかれとて。かきけつやうに失ひさせ給ひぬ。うち驚きて。先づ耳をさぐり給ふに。すべてつゝがなし。されば何とてか。たがひ侍るべきなれば。いさゝかもかはらずぞ侍りける。あな不思議。されば御の御耳しはさにこそと覚えて侍りけるよりは。いとどかなしくて。うつゝにもいませざりけりと。御ひらけたまはりたるこそ。返ゝ有りがたく貴く覚えて侍れ。おろおろもろこしの昔の跡をたづね侍るに。(六〇)玄奘三蔵の渡天し給ひけるに。有る山中にして。悪人を以て。くさくけがらはしき病人を。頭より足のあなうらに至るまで。ねぶり給ふ時。観音となり給ひて。む経をさづけさせ給へりと承る。其の外もろこしにも。我が朝にも。古今すべてかゝるためしをきゝをよばず侍り。三蔵は身をそばめる昔をふれ。御門は身のいたくかたはなるべきをかへりみず。耳を切り給ひけんは。実にありがたくぞ侍るめり。彼は上代也。是は末代。彼は大国也。是は小国。三蔵は聖者御門はただ人なり。更にくらべて云ふべきに侍らねども。今の御門の思ひ給へる様はたとへもなくぞ侍る。うへたる虎に身をあたへ給ひけむ。昔の因行にも。いづくかおとりて侍るべき。しかればこそ。大聖尊の御をかゞ見させ給ひて。かゝる不思議をもあらはじ給へなと返ゞいみじく覚えて侍

り。人のならひ。我が身は世にありて。さて仏法をもひろめ。衆生をもすくはんとこそおもふめるに。いやしき法師の詞に耳をそぎて。我が身は[illegible]し給へる。げに実に貴きのべ奉るにもすゞろに涙のもれ出でて。そこはかと見へわかず。煙の立つ所も。かれ野にきゆるさゝがにの。いとかきみだして。そことも見へ侍らぬまゝには。とにかくに。くもでに物を思ひつゝ。身をつくしなるうさの[illegible]。時のめぐみの[illegible]に。うるほされつゝ[illegible]まで。[illegible]の心を。付けたまはせよかしと覚えて侍り。[illegible]むらき身ともがな。[illegible]も[illegible]にのみなる世の中に。思ひをとゞめて竹の葉に。あちれふるなりさらく／＼と聞くは。[illegible]はねぬべきむちもせず。夕暮は物思ふことのますかと。よそになしても聞ひたく。こぬ人をうらみもはてぬ物ゆゑに。松にかゝればうらむらさきの藤の花。かけひの水のたへ／＼になり行く[illegible]に[illegible]見へて。心ぼそさの音を聞くにも。[illegible]のうづみ火きえやらで。[illegible]になびける[illegible]にむせびて。[illegible]し[illegible]に。[illegible]かうべにつもり。[illegible]の[illegible]にたゝみて。[illegible]にむかへばむかしのかたちにもあらず。共に変りてむつ事をのべんとすれば。耳もおぼれてきこへず。花を見んとて[illegible]をながむればさらに其のかたちも見えわかず。[illegible]かゞみて足手もすおいたくて。[illegible]に責められ。[illegible]の鬼目の[illegible]に来れども。[illegible]べて[illegible]く心もなくて。此の世いたづらに[illegible]きて。[illegible]の[illegible]に[illegible]りて功徳[illegible]の[illegible]ありて。[illegible]事を[illegible]時。いかにこたへん。つくれる[illegible]があらば[illegible]と

ても叶すべき。其の時くやしく悲みてこそ侍らんずらめ。[illegible]の[illegible]にむかはゞ。さあらく[illegible]立てる[illegible]おほく。[illegible]のかたちのみこそ。みえ侍らんずれな。所々に仏多くましまし。[illegible]に花さくといへども。一枝手折りて後世の[illegible]とて奉る事なし。[illegible]てりと云へども。[illegible]に[illegible]きても[illegible]するわざなくて。よしなき女の色にほだされて。すゞろに心を富士のたかねによそへて。[illegible]のたけのけふりにくらされて。いたづらに月日をすごして。むとうき目を見るわざ。げに／＼[illegible]にぞ侍るべき。さても行[illegible]の[illegible]にして耳を切り給ひし功には。[illegible]生死のきづな[illegible]切り捨てて。三界火宅の外に出で。ほのほにこがるゝ衆生をあはれと見そなはしていまぞかるらんと。くり返し貴くぞ侍りける。此の[illegible]心[illegible]に。かたばかりのせ侍りしやらん。[illegible]もあらまほしく。世のするに侍り。たくみの[illegible]をいやしきさまに引きなしぬる。[illegible]り一方ならず侍れども。もらしてやみなん事のあたらしさに。又筆を染めぬるなり。う世の中の草がくれ。[illegible]なきまでも。[illegible]をそばむるわざなかれとなり。ちかふらくは。身はたとひ[illegible]の[illegible]にしづむとも。此の[illegible]の[illegible]を忘れ奉らじ。三世の仏[illegible]。我二なき心をかゞ見給ひて。[illegible]の[illegible]の心をも。おこす身となさせ給へ。[illegible]の心を付くべきものにや。

〔九〕一[illegible]事

むかし興福寺の僧都にて。一和僧都と云ふ人あり。智行ともにそなはりて。僧都の位に至り給へりける。後には世を遁れて。外山と云ふ山里に住みわたり給へりけるとかや。彼の興福寺の維摩会を見侍りしに。此の僧都の有様。おろ〳〵申し奉せて侍りしは。彼の興福寺の維摩会とて。双び無く目出度き法会侍り。講師は入宋の明匠ときに行高きを撰び給ふ事にこそ。[illegible]なる学生は維摩会の講師。かけまくも畏き神の御ことのりと侍り。神なる春日は法相擁護の誓約とぞ。[illegible]使立つなんどして。殊にやんごとなき公請に侍り。しかあれば彼の講師に。撰ずるを以て。誠をたしなむ思ひでとし侍るなり。此の一和僧都。彼の撰に入らんずらんと思ふ所に。はからずして祥延と云ふ人にこされにけり。何事も前世の宿業にこそ侍らめと。思しめし給へども。猶口惜しく思ひ侍りければ。永く本寺をはなれて年来住房の本尊ともなれかしと思ひて。弟子どもにかくともしらせず。本尊持経ばかり竹の笈に入れをさめてひそかに三面の僧坊を立ち出でて。伊勢の大神宮にまうでゝ。なくなく今は我の[illegible]奉り給ふ心の中のいぶせさは。さながら思ひやられて侍り。さすがに住みなれし寺もはなれがたく。なれぬる友も捨てがたくや侍りけん。指して何方ともなく。行くさきもさだめ給はざりけれども。あづまのかたにおもむきて。鳴海のなるみ方にも付き侍りぬ。暫時のひまやすらひて。熱田の社に詣られ侍り。しば〳〵法施など奉りて侍りけるに。けしかる巫女のいて取りて。一首をなして云ふ

和。我うらみを含める事ありて。本寺を離れたり。迷へる人のならひ。我はたへぬものなれば。事にし侍れども。心にかなはぬは世なり。然るに。えびすが城へと思へども。そこにもつらき人あらば。又何の所とてか越え行かん。只急ぎ本寺に帰りて。日比の望をとぐべしと侍る時。一和僧をたれ。思ひもよらぬおほせかな。かゝる乞食修行者に。何のうらみか侍るべきといふに。明神又にあざけり侍りて。

つゝめどもかくれぬ物は夏虫の。身よりあまれる思ひなりけり

と云ふ歌の古を出して。汝おろかなり。さらば示して聞かせん。汝維摩会の講師を。祥延に越されて。我を恨むにあらずや。彼の講師と云ふはよな。天下の札に記すなり。其の文は既ち祥延。一和。祥延。一和とあるなり。天下の札に記しぬるも。是むかしのしるべなり。とく〳〵修行をやめて。本寺にかへるべきなり。汝は更に別なく。我を捨てといへども。我は汝を捨てずして。是までしたひ示すなり。春日の山もすでに離れぬとてあがらせ給ひにければ。一和かたじけなく貴く覚えて。我が寺に帰り上りにけり。再びかさぬる衣は。涙の露のしどろにて。時雨はるゝ秋の野原のむちして。いくしほがまの袖衣。すゝがれはてゝ侍りけん。げにと覚えてあはれに侍り。此の寺官を官く時を見侍りしに。すゞろに涙落ちて侍りき。我はたれもかはり侍らぬに。年を経てすみなれし所の思ひす

てがたきに。やすくも思ひわかれ給へりけん。心の中は。さぞ中々澄みておはしけんな。又彼は更に情なく衣を捨てといへども。我は袈裟を捨てずして。是まで示すなりと。阿弥陀仏の侍りけると承はるに。すゞろに袂の絞りあへず侍るなり。凡俗の世に離れさせ給へりしには。地蔵の衆生まで縁り奉つて。袈裟を纏ひ侍りき。我らむなしく。仏の御出世にもれぬ。三会（七九）の暁もはるかなる闇の中に生をうけて。ただ明暮は露にのみばかされて。おなじ様に立つ水の泡の。流れきゆる心ちして侍り。我らを哀とみそなはして。弘法大師の。なき跡の衆生をすくひ給はんとて。時と還じ給ひて。今も彼の一刹を利し給ふにこそ。こゝすみよしにあらずとて。もしほの煙の風になびくを守り。鹿千島の跡を尋ねて。あらぬしほがまの浦に尋ね至りて。すみかとせんに。そこにもつらき人あらば。又いづちとてか行くべきな。浄土にあらずは。心にかなふ所あらじ。聖衆に来ずば。思ひにしたがふ友もなかるらん物にこそと。今の阿弥陀如来身にしみて覚え侍り。口惜しきかな心とくるしき所にとまり居て。すゞろに袖をこがす事を。抑此の御見聞を。当来の礼に廻し給ふらん。ありがたく覚えて侍り。世々を隔とも。彼の御言にのぞまざりければこそ。かくつたなく。さぎら（八〇）もあさき身と生れけめと。返々もうく侍る。比は（八一）神無月中の十日の事にてなん。殊に目出度くとぞうけたまはる。さても又一刹。世を離れて。思もかよはぬ所に。いまそかりけん事。貴く覚え侍り。

本尊より外には。又頼むべき人もなし。松風より外には。事問ふもの侍らざりけり。殊くに哀に覚えて貴くぞ侍る。

〔十〕[illegible]の事

過ぎにし比。越前国（八二）さそらへ罷りて侍りしに。人の語り侍りしは。中比。此の国の見かきの郡。小野の里と云ふ所の山の中に。いづくの者ともなくて。すみ過る僧あり。いたく思ひ下るべきしなとはみえずながら。浅ましくやつれ侍りて。装ひげなんどもそりあけずして。つたなき体したる有りける。凡物などもおほくは食はず。たゞいつとなく打ちしめり。時々念誦しなんどしても涙を目に浮めてのみ侍り。時すなどり（八三）し。あみ引なんどするを見ては。けしからずなきもだへて。念仏（八四）など唱へて念誦し給へとなん云ひて。山の中に入りて隠せしが。此の所に一とせばかりすみて。其の後国へも出さんめれば。已に身まかりにけるにこそと。人々あはれみて。或る時彼の庵に尋ねまかりたるに其の身は見え侍らで。かたはらなる板にかずかずに物をかきたり。見侍れば。

昔は（八五）天台山の碩徳として。（八六）三千の貫首に至らん事をおもひ。今は小野の山中にすんで。（八七）弥陀の来迎にあづからん事をねがふ。

世の中はうきふし茂き篠竹の。など色かへてみどりなるらん。

とかゝれ侍り。又岡予して遠に山の奥なる木をけづりて、かく書きつけらる

久寿二年三月九日。　西住法師（八八）（八九）

心からくら部山の昔をわたり。とはんともせず法のみちをば

とかゝれて。見へずなり侍りきとて。今の世まで難しみ侍り。都までも。さる人や聞きおよび侍りて。手跡のいみじくて。一文字二文字づゝ。みなわかちとり侍りきと。語り伝へ侍りしに。すゞろに涙のせきかねて。袂をはやみに落し侍りしは。みちの国の。衣川とは是ならんと覚えて侍りき。此の青蓮院の僧正慈鎮と申は。鳥羽院の御入の宮。伏見大夫俊綱の御孫。御母の女房の。御扶の御子にていまそかりき。女御はかなくならせ給ひしかば。彼の御母君の御にとて。七の御年山へ（九〇）登らせまいらせられけり。世行めでたくて。世の末にありがたき御に聞かせ給ひへりしが。（九一）僧正までならせ給ひて。十八と申しける。長月の中の十日比になん。いづちともなく失せさせ給へりき。此のよし山より奏せしかば。法皇（九二）に御涙を失されて。みことのりを書く国々に下されて。尋ね奉りしかどもかひなくて。鳥羽院もかくれさせ給へるに侍り。あさましやさては是まで。御残していまそかりける事よ。昔はたちに及び給はぬほどなれば。御心の中。よろずいぶせく思ひ入れて侍り。かてのともしく。御身の苦しき事のみこそわたらせ給ひけめ。御旅とてげに一夜をすごさせ給へ（九三）おはしましけるにや。御足もかけつかれてぞ侍りけんと。涙ながらに侍り。露の命の中にいつもみどりに。色もかはらずなげき。心とくらはし山にたどり侍りて。法の道をばあゆとも知らぬわざのうさを。御とめさせ給ふ。げにやるかたなく。心すみておぼえ侍り。時なども。今はきこしめさずして。涙をつくるものをあはれみ。涙をながし。念仏をすゝめさせ給へりけん。わくかたなく貴く侍り。つらつらおもへば。又げにも。輪廻生死のちまたを離れて。五十人界に生れ。仏祖の御教にあくまであへる時。心をはげまして生死の海をうかび出る。はかり事を廻さん時には。心にかなふともたでは。うかみがたくや侍らんと。くり返し貴く侍り。乱れ三（九五）界の輪廻の。彼の青蓮院の御心を。十が一の心ばせを付給はせよかしとまで。思ひやられて。すゞろに涙のこほれぬるぞとよ。さても僧正御のきえやらで。天の下にながらへて。いまそかりもやすらん。今は又隠士にも生れ給ひにけん。公顕はいまだ草の戸ざし。さしはて給はぬ隠事ならば。必ず事合ひたてまつらん。花むなしき御名のみをのこす。隠事にしある物ならば。一浄土の友とおぼして。憐みをたれさせ給へとなり。隠居にて山へのぼらせ給へりしには。御伏仕りて侍りしぞかし。

〔十二〕播州平野隠士心の事。

中比播磨国平野と云ふ所の山のふもとに。庵に向ひてかたばかりなる庵結びて行ふ法師侍り。明

戀慕の思ひを申してなん侍りける。或時人行きて戀心の由を尋ね侍りければ。いと難しく侍りし。戀はなんはかなくみなしてしかば。何の所に。いかなる苦をうけてか。なげくらむとかなしく覺えて彼女の墓所を。訪ひ侍らんと思ひて田などの侍りしをも。皆ふり捨てかく籠り侍りし後には。人と交はすべて言ひなく侍るとぞ語りける。そとへ出るわざなんどもせざりければ。人々あはれみて。食物かたのごとくしてぞ送りせしける。或時俄ならず。此の村里に出で、人々に云ふ樣。をのれは。明日往生し侍るべければ。今は暇の別れ申し。あらまほしくて出侍るなり。此の日比の恩み難しがたく。覺へ侍ると。よにも嬉しに云ひければども。嬉しくも思ほざりけるに。げにいひし如くに。明日身たへてけり。あやしき紫雲にそびき。常ならぬ香いほにみちて。眠れるがごとくして西に向ひて手を合せて侍りけり。此の事傳聞くに誠に哀しく侍り。實に夫婦となれるならひ。彼の偕老同穴の契こまやかに來ん世を思ひかけて。たのむわざ不侍。かのもろこしの相門の。言をかけらば。つばさを比ぶる鳥となり。地にすまば。枝を連ぬる木とならんと契り。此の大和國には。鑑となりて。泣きそらんなど誓えめる。げに哀れ深くたのむめれども。死にて後は人の心のうたてさはあらぬ色にみうつりて。たのめし人のことは忘れはて、。こまこまに後の世を。とぶらふ事も聞けざるに。此の僧の道に入りて後あけん。げに有難く覺へて侍り。訪ひ菩提祈し侍りぬれば。とはる、女。よもなほしきわざ侍らじと。

戀々深山籠り侍り。げにいかなれば。いける程はその其事となく身のいたづらになりぬるまで。思ひ人の死して後の。苦しみを歎かざらんと悲しく覺へて侍り。さてもこの歌は。いづくの人にてか侍りけん。所もしらず。名ありさまなど。つたなげに侍りけるなりと聞くにも。身心の中ゆかしく思ひやられて侍り。發心の始より。今際のきはまで。すみてぞおほえ侍る。

〔十二〕 花林院永緣僧正の事

さいつ比。大納言經信の田上と云ふ山里にすみ給ひける。長月の下の弓張の程。たそかれ時になりて。年六十に傾きてまみゆ有樣。實に賢くやんごとなき僧の。入り來りて物を乞ふ事侍り。姿は殊にやつれぬれど。いかにもただにはあらず見え侍りければ。大納言とどめ聞えて。さまざまにいたはりなどして。哀れけぬる程に。誠に此の僧を人間かなる方に招きて。いかなる人の何とてかくはおはするにかと問ひ尋ければ。はかばかしきいひやりたる方侍らず。世わたらひのともしく侍りしまゝに。かく罷り出たりと聞ゆめれど。誠實にもとも覺えねば。強ひて尋ね給ふとき。此の僧泣く泣くうちくどきて云ふ樣。我は興福寺花林院と云ふ所に住み侍る者なり。不空の勝地にも年をへて住なり。位階をも心のまゝにのぼりて侍りしが。或時の言葉にや侍りけん。年のまかり老いぬるに随ひて。かたはらのさびしく侍りし程に。思はざるに。けしかる女とつれて侍りし程に。し

ばしはつゝみ侍りしかども。（一〇一）天の下みかさの山の甲斐もなく。もりて人の知り侍りしかば。さ様のわざする身をばをかぬ事に侍れば。一寺[illegible]ってそひ侍りし程に。するかたもなきまゝにかく[illegible]り侍りて。世の女すてがたくてひつさげ侍れば。うき世のほだし。げに是ならんと覺えて侍るなりと申えさすれば。思はぬ事ながら實におぼえて。しかあらば其の人をもろともに[illegible]もあて侍らん。是に住み給へとの給はせ侍れば。いとどうれしき事にこそあらめとぞ云ひける。さて大納言も歸り入り給ひて。あくるや遅きと。かの所におはして見給ふに。ありし僧はなくて。目出度く手にて一首の歌を書きたりける。

うしやげに田上山の山さびて。法のみちしは跡しなければ

と書きてつるに見えずなり給ひぬるいぶせさに。彼の大納言[illegible]寺の宮主門さまに付きて。くわしく尋ね給へりけるに。[illegible]と云ふ人。年比世を遁るゝ心深くて。[illegible]に籠り給へりしを。寺をしみ留め奉りて。心にもあらずながら。のべ給ひし程に。（一〇二）いにしき月の比[illegible]にあおるべきよし其の聞侍りしかば。はや跡なくうせ給ひにしかば。弟子どもうつゝ心なくて侍り。いづくにこそおはすれとも聞えざりしかば。歎き給ふらんよとて。[illegible]のすゞろにな[illegible]へるなり。[illegible]ありさま事かもたがはずとて大納言も[illegible]きまでしほれ給へりけりと。此の事を語り侍るに。

御心もおぼへず悲しく侍り。（一〇三）遠つ國の清き山水の跡をもとめて。都さはがしき末の代には。すまぬまされり。世をうしとおもひ。（一〇四）又はけがさじなといふ衣の色はむかしの家良の[illegible]の[illegible]。[illegible]に[illegible]く天竺の昔の跡にこそ。凡そ多く世を遁るる人の中に。（一〇五）山寺も[illegible]のいにしへは。聞くも誠に心のすみて貴く侍りしが。今の[illegible]の[illegible]。いでこしかた思ひやる末にも。ありがたくぞ侍るなる。凡そ人の習。世を背くまでも。名をばうづむとも。名をば朽まじと思ふめる。ことによしなき色にふけりて寺を離るるよしの。いつはりをのべられけん。心中思ひやられてわくかたなく哀に侍り。（一〇六）此事の文かとよ。實を隠し狂を顯せと侍るは。是ならんと覺えて侍る。しかればもろこしにも此の[illegible]にも。げに〳〵しく世をのがるゝ人は。皆か様に侍るとかや。げに人にはつたなき物と思し下されて心一つに思ひすまして侍らんは。いみじくすみ籠りてぞ侍るべき。さて又あちこちさそらへゆかんに心にかなはぬ所あらば。思はなるゝぞかしなんど。すゞろに[illegible]く侍り。世をすつとならば。かくこそあらまほしくて。身のちからもいたくつかれ侍らざりし比。國々[illegible]を[illegible]まはりてやんごとなき寺々。面白き所々[illegible]し侍りしが。[illegible]りて身のうれへも忘られ侍りしかば。かくて一期を過したらんも[illegible]からじと覺え侍りき。況んや[illegible]む[illegible]にしてもかしこく。さぎらあらん人の。なじかは心もすまで侍るべき。（一〇七）こしの白山[illegible]りて。[illegible]の[illegible]のはゝきゞ。[illegible]になびきやすく。佐

野の[illegible]の。ほやのすゝきそよめきて[illegible]じむの[illegible]の[illegible]は。[illegible]に[illegible]れてしどろなる[illegible]、木曾の[illegible][illegible]。[illegible]の[illegible]など[illegible]りしに。心もとゞまるべき[illegible]なり。[illegible]の[illegible]のせき守とめかねし。[illegible]こし山のうす[illegible]。み[illegible]しがたく。[illegible]千鳥の。[illegible]ふみつくるなるみがた。富士の山[illegible]は時しらぬ。かのこまだらの雪のこり。浮島が原。清見が関。大磯小いその浦々は。[illegible]きがたく侍るぞや。此の僧正は。六十に[illegible]ひぬれば。さ[illegible]の所を見いまそからんも。叶はでや侍らん。さてもいかなる旅に。思ひ[illegible]しておはすらん。道よ[illegible]く侍り。[illegible]れ此の身を思ひ捨つる心の。[illegible]かなりともつけねかしと。覚えて侍るぞや。

〔十三〕 [illegible]の[illegible]を[illegible]て[illegible]心する男の事

中比[illegible]の京にいといたうまづしから[illegible]住みける男女ありけり。下れるしなの人なるべし。此の男ある[illegible]の[illegible]の侍りけるに。[illegible]の[illegible]に女の[illegible]に[illegible]でてけり。[illegible]いひしらぬ。[illegible]く[illegible][illegible]を[illegible]れば。[illegible]人よもよよとなくめり。此の男のいたく心を[illegible]して。やがて[illegible]に[illegible]をおろしてし。[illegible]て。[illegible]山の奥にいほりかたばかり結びて。[illegible]に[illegible]し。[illegible]に[illegible]て[illegible]をなんこひ[illegible]なる[illegible]をも[illegible]りければ。それを[illegible]るで[illegible]に[illegible]るわざもなかりけり。[illegible]も[illegible]ず[illegible]て。[illegible]らかに[illegible]し侍り。されば女のこす[illegible]の[illegible]には。[illegible]と[illegible]をかけず[illegible]し。[illegible]人の[illegible]ね行きて。いかに女のくるしきに。女は[illegible]ふにか。いねもし[illegible]はで。つかれ[illegible]には侍らずやといひければ。女の[illegible]に[illegible]。[illegible]は[illegible]となく。さるていなる女なんどをみ侍るに。[illegible]なくみだりしものの思ひ出さるる時も侍り。おさなき[illegible]を見る時は。ふり捨て出でし子の面かげに立て。いかにも[illegible]れぬべく侍り。女はさすらの[illegible]もなくて。心のすみ侍れば[illegible]もなし。[illegible]らずとても生死[illegible]の[illegible]はれて。いねもせられず侍れば。ありも侍るなり。さて又をのづから耳にもれて。[illegible]れと[illegible]そなはし。一[illegible]をもし[illegible]をもし侍る人あらば。それをなん仏を[illegible]する心とせんと。[illegible]ひ侍るにこそと申しければ。[illegible]ね来ける人も。袖をしぼりて[illegible]みつゝきりにけり。さて三年[illegible]て[illegible]に三日まで[illegible]にも出でず侍るいぶせきに。人よまかりて侍りければ。西に向ひて手を合せてなんいきたえにけり。[illegible]しく[illegible]しく覚えて。いそぎ人にふれなどして。来りおがみ侍りけるとなん。げにありがたかりける心なり。下れる人は。いかにも情のすくなくて。只[illegible]し[illegible]りたる事のみを思ひて。後の世の[illegible]をば。さしはなちて[illegible]はざるめるに。[illegible]のみのりの心にしみて。さばかり身にかへて。[illegible]をしく[illegible]しき[illegible]子をふり捨てて。二[illegible]ずなりけん。誠に貴く覚え侍り。又[illegible]はなにはざに付けても。心の[illegible]きぬべく覚ゆるとて。いたく[illegible]にも出でざりける事。[illegible]ひとり侍る心の中。[illegible]ひやられていとゞかしこく侍り。さて生死[illegible]のおもはれていもねられず侍りけん。身にしみて貴くぞ[illegible]

え侍る。世を捨つる人多くいまそかれども。誠はすてがたく侍るに。無常なるあやしの心の。下賤に侍りけん事のありがたさ。やるかたなく侍り。悲しいかなや。昨日ありし人今日はなし。朝に世路に誇る輩。夕は白骨となり月を詠むる友。さき秋に零落し。花にたづさふる族。むなしく嵐にさそはれて。跡かたなくなりぬる世の中に。おろかに思ひを留めて。徒らに我が身につもる年月の。宵は霜の露にかはりて。長月の末野の原の。かれ野の草にたゞへて。跡なくなりはてんとする事をも思はず。心のあるにまかせて。秋の夜長き夜すがら。その事となくねぶりて。はかなき夢をのみ見て。むなしく月日をすぐさん。げにもむうきわざなるべし。されば天台大師は。耳目をふさがごとくにせよとすゝめ。上の聖は。あたかも眼をしのげと侍り。今此の僧の有さまこそ。これらの教へに叶ひて侍れ。「一二〇」出家しや世を捨つるといへども心はこれを捨てず。形は染めぬれども。心はそまぬ輩にして。心身かたちがへにて。蜜行いたづらになしはてぬる事よ。しかあれば心の師とはなるとも。心を師とする事なかれと。佛もをしへ給へる是なるべし。とにかくに闇のすゝろにしとろに侍り。

（十四）天台大師白骨の舞女人に法花經を教ふ事

昔侍る比。陸奥國ひらいづみの郡。衣と云ふ里に。しばし住み侍りし時。其のあたり見侍りしに。さかしば山といふ山あり。木の生ひたる有様。峯の嵐。水の流れたるやう。都に遠くとも誠に及びがたき程に見え侍り。里を離れて十餘町もや侍りけん。あちこち経廻し侍るに。河のはたに。高さ一丈餘なる石塔を立てたり。くぎぬきしまはし。花ひなどして。めでたく見え侍りしかば。是はいかなる事にかと尋ね侍りしに。或る人の申ししは。中比此の里に遊女侍り。其のむすめなりけるもの。法花經の讀みたく侍りけるが。をしゆべきものなしとて。明けくれなき嘆いて過し侍りけるに。或る時天井の上に聲ありて云ふ様。なんぢ經を求めて前にをけ。我れこゝにゐてをしへんと聞ゆ。あやしく思ひながら。經を得て前に置き侍るに。天井の上にて。ゆゝしき聲にてをしへ侍り。八日と云ふに習ひ終りぬ。其の時此の娘。いかなるわざならんと。いとゞあやしく覺えて。天井を見侍るに。白くされたる首おひたるかうべに。舌のいきたる人のごとくなるあり。此の白骨のをしへ侍るにこそと思ひ驚きて。こは誰にてかおはすらんと。問ちに尋ね聞ゆる時。我は比叡山の僧の住侶。「一二一」天台大師のかうべなり。汝が心ざしを感じて。來てをしへ侍り。又我が首を。比叡山へ送れと侍りければ。殊に有難き事たとふべき方なんなく覺えて。泣く泣く此の山に納めて。かくのごとく「一二二」墓なんどし侍り。此の比までも山中に。其の墓の事するをり侍り。さて此の女は尼になりて。此の山中に庵結びて思ひすまして侍りしが。此の二十餘年さきに往生して侍るなり。其の時の様なり

にあり。是より申し侍りしかば。かの人とともなひて。山の奥に入り侍りてみるに。四三間なる[illegible]の神さびて[illegible]侍りしかば。かきくらさるゝ心ちして。今更ものも覚えず侍りき。かゝるためしげにありがたく侍るべき。先づ[illegible]ならふべき人もなき。[illegible]の[illegible]に生れぬる女の身に。げに[illegible]のよみ[illegible]ちらさまほしく覚えて。ねてもさめても。此の[illegible]のみ[illegible]おれりけん。心の中の貴さはつたなき筆にはつくしがたく侍り。しかればこそ。[illegible]大師の[illegible]を[illegible]して。[illegible]け[illegible]ひけめと[illegible]なく。侍りもろこしの昔こそ。まづしき男の。[illegible]をえよまざるとて。おもひ歎き侍りけるにこそ。いづくの者ともなくて。見めよき女の来て妻となりて。一[illegible]をはりて。後には[illegible]と[illegible]れて。失せ給へりきと。[illegible]の[illegible]に[illegible]せて侍れと。[illegible]ひ出されてくり返し貴く侍り。又上代にはさるためしあまた侍れど。世下りては。げにもと覚えぬわざなり。又さまかへて[illegible]ひ[illegible]して侍りけん。[illegible]に[illegible]山深く侍り。今はいづれの浄土にか生れぬらんと。[illegible]上[illegible]くおもひやられて侍るぞや。[illegible]なまじゐに家を出て衣は[illegible]めぬれど。はかぐしき[illegible]む[illegible]もなくて。[illegible]山に[illegible]ひます事もなくて。年のいたずらにたけぬるぞ。すゞろに[illegible]しく侍る。さても[illegible]大師の[illegible]つ[illegible]の。[illegible]なる[illegible]山に[illegible]を[illegible]れて[illegible]の[illegible]を[illegible]し給はんとにや。[illegible]の[illegible]のきこゆるなるは。[illegible]にも[illegible]かぬ心どもにて。[illegible]の。[illegible]んなる[illegible]にて侍る[illegible]しきよと。[illegible]に付けても。なにとしてうかむべき。[illegible]と覚えて。そゞろに[illegible]かしく侍り。なをく此の女[illegible]もしらまほしく。其の[illegible]の[illegible]も[illegible]ね[illegible]く。年月も[illegible]へたく侍りしかども。つまびらかに知れる人なくて。[illegible]すに及び侍らず。此の所はかやうの事。[illegible]下に[illegible]なき[illegible]にて。昔[illegible]の[illegible]の不[illegible]をも。[illegible]に不[illegible]侍り。[illegible]の[illegible]なんど云ふ人もながらへても侍らんと。尋ね合せまほしく侍り。

撰集抄第二目録

〔一〕紀州山寺の僧都を捨て往生の事
〔二〕[illegible]上人の事
〔三〕[illegible]上人の事
〔四〕[illegible]供奉の事
〔五〕紀州竹の関の尼発心の事
〔六〕[illegible]上人往生の事
〔七〕三井寺の僧使法滅して[illegible]発心の事
〔八〕[illegible]上人の事
〔九〕[illegible]上人の事

西　行　記

撰集抄第二

〔一〕紀州山寺の僧都を捨て往生の事

[illegible]と聞えしなんめり。おぼろけならでは。人もかよはぬ山の中に。〔一〕そまする人の。みたりつれて入り侍りけるが。山中を見めぐりけるに。山の谷合に。木ぐらき事もいたくはなかりける所に。木蘭木の実など。とかく構へたる。かた井なる庵に。木のはを敷きつゝ。麻き衣ばかり着たる僧の。死して侍りけるを。鳥の来て有りけると覚えて。月などもつきそんじて侍り。かたはらにけしかる硯紙ばかり侍り。大なる木にかくかきつけ侍り。

死生共に死生に非ず無来無去にして本来寂静也

と。書きたりと語り侍りけれど。其の里の人尋ね侍りて。みる事もなくてやみ侍りしと伝へ聞き。いかなる人にていまそかりけん。返々床敷く侍り。谷の深に隠居して。嶺の松風に思をすます。[illegible]にこそ。いづれの比より彼の所にすみけん。庵なんどは神さび。ふるめかしき様に見えけるなれば。年経けるにこそ。何とて斯の身を。さゝゆるわざも侍りけるやらんと。心苦しく覚えて侍り。

生死も生死にあらず、来るも去るも実には侍らざりけん。心の中やるかたなく、すみわたり侍りて、かやうの閑居などは、世の末には難かるべしなど云ふ人も侍る。それはかならずしも、さは侍るまじきにや。片岡山のわび人の、飢にうへて臥していまぞかりける事などを、伝へて聞え侍るには、閑居の跡は中々当時其の比にや侍らんとおぼえて侍り。あはれ貴かりける事かな。硯より外には何も持たざりけん。よしありて覚え侍り。世を遁るゝ人の有様、しなじなに侍れども、海のほとり深山のすまひは、誠に頼もしくも侍れども、指し当りては、身一つたくする栖のはかりがたさに、都の山のすまひも、かなひがたくして世にふるぞかしな。然はたゞ此の身を惜み、顧みるおもひの、はなはだしきにこそ侍れ。なにゝか此の身をしむべき。おしまずばなどか、山深く思ひすまさで侍る。抑本来寂静なりとは何の寂静ぞや。無来無去なりとは何の物をか指しり侍けん。

〔二〕 [illegible]大人の事

過ぎし比、[illegible]大納言[illegible]、東山に住み給ひける比、いづくの者ともしらぬ法師の来て、此の殿に宮仕へ奉らんといひければ、大納言聞き給ひて、いと思はずの事かな。法師は僧の下にこそ侍るべけれ。何とて是には宮仕へし奉らんと云ふにやあらん。但しさてもあれかしとて、其の殿に宮仕はれ侍りけり。殊勝しくむばへいみじくて、萬につけて正直に侍りければ、其の内の人、皆

賞とぞ仰付けにける。する態もなかりけれど、心ざまのなつかしくて、誰にもいみじく、ゆかしき物におぼされ奉りて、さる物などもさはやかにあたへ給へば、二三日は誰にも儲けたんめれど、後には跡なくうしなひけり。かくする事たびたびになり侍れば、人あやしみて跡をかたらひたるにや。さも侍れけしからず。又心も見えざめりなど、悪しきまで沙汰し合ひ侍り。大納言此の事をもれ聞き給ひて、又さる物などたまはずとて、いかにかくは跡なくなしはつるぞ。此の跡はあらかじめ失ふべからずと、能く仰せ含め給へりければ、此の物も取りて取り侍りけり。其の後人々目を付けて見侍れば、此の物を衣に包みて、門より外ざまへ走り行くを、見えかくれに見侍りければ、法師の[illegible]に、殊に痛くかはゆげなる乞食に、きものをぬぎくれて、我が身はたゞ合せなる物ばかりきて帰りにけり。此の見あらはせる人、目もめづらかに心驚きて、急ぎ大納言に此のよしを聞えてけり。其の後はよしある人にこそとて、日比にも似ず思ひ深くおぼし、人ももてなし聞えければ、世にもほいなく思ひたりけるが、二三日ありてかきけすやうにうせてけり。殿より始めて、諸人よ忍び合ひ給へりけれど、つゐに見え給はでやみにけり。此の物うせて後、廿日ばかりへて、大納言歌詠みの内に撰ばれ給ひて、冷泉中納言[illegible]と申す人になん合ひ給ひて、いかゞして名歌詠みて勝の[illegible]に叶ひ侍らんとおぼして、この事のみを歎き給ひける。ある日の暮に、ありし僧の来て勝の[illegible]

ひ給へる歌。おもひよりてこそ侍れとて。
（七）水の面にふる白雪のかたもなく　消えやしなまし人のつらさに
（八）[illegible]むなよ影みえかたの夕月夜　おぼろげならぬ雲を待つ身を
と[illegible]みてにげさり給ひけるを。袖を引き留めて。[illegible]人にてかをはすらん。此の日比のなさけに。[illegible]にの給はせよと侍りければ。泊瀬山の[illegible]とてなん。ふりほどき出で給ひにけり。其の後はふつと見え給はで。とゞまらせ侍りけり。一かたならねど。何も皆。名をばうづまじとのみこそ思ひ給ふめるに。[illegible]と名をしづめて。いさぎよき實の心を隠して思はざる所に[illegible]りてつぶれとなり。（九）得る所のきる[illegible]を[illegible]びやかに。わび人にほどこされ侍りけん。[illegible]山[illegible]にはあらずや。すてんとおもへど。いける身はさすがなるに。やつれはてけん心こそ。思へばかしこく侍れ。讀み給へる歌は。（大[illegible]の歌とて（一〇）[illegible]にのれる[illegible]に侍れば。中々ともかくも申すに及び侍らず。[illegible]よやさしくすみ[illegible]りてぞ。覺え侍る。又[illegible]の事其の事となくふかくいまぞかりけん。いみじく身にしみて貴くぞ侍る。げにも[illegible]かに[illegible]すれば生きとして生ける[illegible]・[illegible]の類まで。[illegible]つべきものにはあらざりけり。[illegible]く百千[illegible]の[illegible]。[illegible]と生れて。[illegible]の田をおどろかすなる。（一一）[illegible]の。ひた[illegible]に[illegible]く[illegible]て侍りけん。そのが[illegible]に[illegible]子をならして。心とさはぐ[illegible]。かり[illegible]の[illegible]にはをひろ[illegible]

[illegible]としては。こし路の空にも[illegible]りけん。[illegible]となりて。いくたびか人の味をもましけん。[illegible]と生れてはおもきをおひて。九重の[illegible]にいなゝき。牛と[illegible]りてはうき世の事をかゝりて。[illegible]きおれる時もおほかりけん。さては彼らもよその物にあらず。皆ひとしく心を具し侍り。[illegible]しかしながら。世世を[illegible]て[illegible]を[illegible]し心をつくし。[illegible]に[illegible]を[illegible]みし人なり。さもあらず[illegible]き[illegible]。或は[illegible]はなはだしき父母にてもありけん。しかあれば。かれら心にもてはなれんは。いみじくおろかの事にこそ侍るらめ。あらかじめ人をそばなるわざなく。[illegible]を[illegible]れとみそなはし給はゞ。[illegible]大師の[illegible][illegible]。やうやく。[illegible]じ[illegible]る心なるべし。生をへだつるとていかなる事やらん。[illegible]人の此の[illegible]をば知りながら。心には思はぬぞとよ。乞[illegible]は。三世の[illegible]。此所にうちつゞき。人をそばむる心をやぶりて。實の[illegible]を。[illegible]くほどこし給へな。[illegible]しきかな[illegible]に人界に生れ侍る時。いかにも[illegible]めは[illegible]くてはせすぎ。さて[illegible]ふとおもふ事は。[illegible]く[illegible]れ来。生死の[illegible]をきざし。つみ[illegible]めて。（一二）[illegible]の五[illegible]十[illegible]の[illegible]を。行末なくなしはてぬる事を。くひても甲斐なし。實には[illegible]ざめり。[illegible]は[illegible]のごとくにして。[illegible]日は[illegible]をきやす事はやし。[illegible]日といへる[illegible]ち外に求むべからず。我が心是なり。[illegible]日の心しなく／＼なるにあらず。たゞ[illegible]の一門なり。されば[illegible]心を[illegible]さば。[illegible]よりつみ[illegible]め[illegible]ける[illegible]の。さながら[illegible]えて[illegible]の月を。[illegible]の中にすまさんこと。[illegible]き[illegible]にあらず。[illegible]の

所作すむならば。立つ事易く時。難波なる事故にて侍るなるべし。さて見仏上人は。つゐに臨終正念にて終りぬと承り侍るは。誰ひかへも給へるにこそ。なを／＼心中やる方なく。貴く覚えて聞くに。其の事となく。涙のもれ出で侍りき。今又筆を加ふるも。涙の袖に落ち添ひて。おもふばかりもかかれず侍れば。いとゞつたなき筆の跡。ふしをもそばむるわざなくて。事かくれ侍る所までも。そしりをば後に残しぞと覚え侍り。

〔三〕見仏上人の事

往昔或る聖とともなひ侍りて。越路の方へ迷へ侍りき。越前国いなやつの浦の内に。山深くましはりて。殊におもしろく見ゆる所侍り。人里遙に離れたり。岩はさがしくて。いたくあら磯なり。よにも心のとゞまりておぼえ侍りしかば。しばらくやすらひて見侍りしに。岸その事となくそびへあがりて。木どもゝよしありておひて。松やの日出深く見ゆめり。床しさに歩よりて侍るに。齢四十ばかりの僧独居して侍り。庵のいはやは殊勝きにてなん。姿を絵にうけ侍り。殊に心もすみて。いまそかりげに侍りき。只そのまゝに読経の外には。なに事もあたりにみえざんめり。なつかしく覚えて。いづくの人にかいますらん。所さまさこそすみよしと。おぼすらんと申し侍りしかば。僧すこしほうえみ給ひてかく。

浜かた村立つ煙もみえぬ浦を。古昔とたれかおもはん

との給はせ侍りしかば。何となく殊に覚えてかく。

松がねの岩うつ波にあらはれて。古昔とおもふばかりぞ

と詠みて侍りしかば。此の聖もいとおかしげにいまそかりき。さても何人にてかいまそかるらん。いつも此の所に住み給ふにやなんど尋ね侍りしかば。いさとよ人は。月まつ島の聖とこそよび侍れ。又いつもこゝに住むにはあらず。月に十日は。かならず来てすむなり。其の外は何もくび侍らずとの給ひ侍りしに。奥床しくて。さては見仏上人と聞え給ふ上人の御事にこそと。かたじけなく覚えて。姿をば隠行となん申すに侍ると。おそれ／＼申し侍りしかば。さる人ありと聞くと。の給はせ侍りき。さても侍るべきにあらざりしかば。名残多く侍りしかども。心の憂き事など問ひたてまつりて。泣く泣く別れさり侍りき。帰るさには見え給はざりしかば。又四日のみちを経て。松島へ尋ねまいりて。其の寺に二月ばかりすみて侍りき。此の事げに思ひ出に。涙のいたく落ちまさりて。聖のぺん給の。立つべき所もみえはかず侍るにこそ。此の松島のありさま。ゆゝしく面かにして。心もすみぬべきをふり捨てて。多く山を越えてゝ。はる／＼北国のさかひまで。いまそかりて。松島に付けて。いとゞ哀をまし。よりくる波に。すめる心をあらひ給ひけん事。いとゞいま

よくおぼえ侍りき。身にしたがへる人もつかず。命を助くるかてをもこしらへ給はで、十日の間すみ給ひておはしけん。心の内の貴さは。ならぶる物やは侍るせめて貴さの程はいかゞせん。其の跡の。こし路の雪の山居のすまゐ。思ひやられて。すゞろに涙のしどろなるに侍り。いかなれば人の。道心を具しながら。山をへだつるまでにかはるらん。道心ふかき人なども、世を遁れ侍りて。閑かなる寺などに。住むはならひなるぞかし。小島のわづかに吹く風と。峰をはらふ嵐の。より〳〵いらかに音づるゝ外はすみかへりたる松島をさしをきて。*人もなぎさの浦風に。袖にあさの衣の。をふかせてすみ給ひけんは。（二四）心なき身にも殊に覚ゆるぞかし。弟子などにも。しられ給はざりければこそ。尋ね来る人もなかりけめ。松島に侍りし時にも。（二五）上の醍醐の十日の講は。かきけし失せ給ひにしかば。又南堂の林中に住み給ふにこそと。殊にかなしく侍り失せ給へる事は。一の弟子の寺をはからひ侍りけるなり。月ごとにあるわざなんめれば。いまさらおもひおどろく弟子も侍らざりき。

〔四〕平等供奉の事

[illegible]ぎにし比。[illegible]の[illegible]の[illegible]のもとに。[illegible]行ふこと侍りき。[illegible]のあたりに。ふれはひ侍りしかば。[illegible]もあなまほしく覚えてのみぞ侍りしに。[illegible]は[illegible]にてかいまそかりけん。さしも貴むる類り。あやしくありし人と覚えず侍りき。只乞食かたゐと申す物のみ多く侍りしが。其の中に衣のやれたるをかたばかり腰にまきて。桶といふ物をふりて。食物をこひ侍り。みれば天台山の平等供奉なり。僻目かと見れば。あたかもまぎるべくもなし。定めてそれなり。こはいかにとかなしく覚えて。多くの人をわけつゝ供奉の方へまかり侍れば。我を見付け給ひて。ちともさはがず。門ざまへ出で給ひぬれば。誰も人閑かならん所に行きて。静かにきこえ侍らんと思ひて。尻ざまに付きてまかり侍りぬ。さて人もなき林の中に。もろともにやすみ侍りて。日ごろの御ありさま。我が山の外さまにすみにくゝて。あぢきなくいつまでかかゝらんとおもひて。*そぞろへ出でたりし日に。其の後は道心もさめなどして。かへらまほしかりつれども。とかくさたせられん事のうさに。かゝる身とこそなりぬれ。さても（一六）大宮の大納言のあたりに。なに事か侍る。よにもいぶせくこそ侍れ。さらば何となく。みる目もつゝましきに帰り給ひて。夜なんかならずおはし侍れ。当の事も聞かまほしく侍るにとて。所くわしくおしへ給ひて。かならずと侍りしかば。暮るるをたのめて行き別れ侍りき。日の山のはにかたぶく程にも。なをおそく覚えて。暮るるやおそきと。の給はせし所に行きたるに。ふつとみえ給はず。悲しさはまたのみにこそと思ひ侍りしを。若やとて其の夜は明かしぬれど。つゐに空しくてやみ侍りぬ。明けて後其の辺をなんいかに尋ね侍りしかども。ふつ

にみえ給はず。此の[illegible]は。[illegible]の[illegible]。大[illegible]の大[illegible]の[illegible]の[illegible]にぞ。いとけなくおはしける[illegible]より。世をのがるゝ心の[illegible]くて。さるべき[illegible]の[illegible]かなるを尋ねて。[illegible]には[illegible]り給ひけるとなん[illegible]ひうけ給ひしが。つゐにはたして。[illegible]く世を[illegible]てはてゝ。いまそかりけるにこそ[illegible]く侍れ。いかなれば是をみるにも。おどろかぬ心にて。あさましき身を[illegible]しみ。[illegible]てやらざるらんと[illegible]ゝよも心[illegible]く侍り。さこそすて給ふ世なりとも。わづらはしく[illegible]のまねをさへ。し給ふらん事のわりなさよ。それ[illegible]をかくすに。[illegible]くの[illegible]あり。[illegible]の[illegible]の[illegible]の入千[illegible]つる[illegible]に[illegible]りて。あやしの[illegible]にやつれて。[illegible]をなんかい給へり。此の[illegible]の[illegible]は。つたなき[illegible]と[illegible]りて。[illegible]のまねをなんし給へり。[illegible]れ[illegible]をかくしかねて。とかく[illegible]ひ給ふめり。げに[illegible]いはぬさま[illegible]さむ[illegible]に。[illegible]さわざにや侍るべきと。[illegible]えてあはれなり。いかなりけるふしにや。[illegible]山をも[illegible]れ給ひけめと。世を[illegible]の[illegible]きそめけんも。すゞろにおぼつかなくも侍り。[illegible]々[illegible]ふに。[illegible]の[illegible]を[illegible]に[illegible]れたる[illegible]。江のほとりにつながざる[illegible]にたがはず。此の身いまに[illegible]の[illegible]のふき[illegible]て。いつともなく[illegible]のはなたれ。[illegible]のよもにみだれぬさきに。[illegible]くべき方をこしらへ侍るべきよしてあり。其のはかりごと[illegible][illegible]の[illegible]を[illegible]かに心に[illegible]ひめぐらして。此の[illegible]をすべきにこそと[illegible]えて侍り。

（五）[illegible]心の[illegible]

むかし[illegible]の[illegible]と[illegible]ふ[illegible]に[illegible]びて行[illegible]侍り。本は[illegible]の[illegible]女にて侍りけるが。[illegible]さまなども[illegible]からざりけるにや。（二〇）[illegible]に[illegible]りて。一とせの[illegible]になんすみ[illegible]り侍りけるが。いかなる[illegible]か侍りけん。すゝめられ[illegible]りて。[illegible]にかへりて[illegible]。又も[illegible]のふるまひなどし侍らざりけるとかや。[illegible]る時[illegible]の[illegible]の人の[illegible]に[illegible]りて。[illegible]より[illegible]さまへ行きけるを[illegible]ひ見て。[illegible]を[illegible]りて。（二一）[illegible]にひきつゝみて。かく書きたり。

[illegible]もせずうきを見るめの[illegible]しさに。あまと[illegible]りても[illegible]ぞかはかぬ

と書きて。[illegible]になげ入れ侍りて[illegible]。ひたすら[illegible]ひ[illegible]りて。此所に[illegible]とかくこしらへて[illegible]すまして侍りけるなり。[illegible]を[illegible]ひて。[illegible]しづくとなきこがれ給ひけるなり。さて此の[illegible]は只わく方なく[illegible]し侍りけるが。つゐに[illegible]のごとく[illegible]して。[illegible]ておおかた人[illegible]く侍り。其の[illegible]の[illegible]とて。今の世まで[illegible]ちたるまろ木の[illegible]へ侍りしかば。[illegible]などにこそ。ただすこしすぐなるやうしたる。木のふしなんども。さながらいぶせくて侍りし見侍りしに。すゞろに[illegible]しく[illegible]ひやられて侍り。人[illegible]も[illegible]にとをざかり侍るに。かなはぬ女の心にて。とかくしてあやしげにこそ。ひきつくろひ侍りけめ。[illegible]などをば。いかがかまへ侍りけんと。[illegible]ゝいぶせく侍り。[illegible]じく女といひながら。さやうの[illegible]人などに[illegible]りぬれば。人にすさめらるゝ[illegible]などをも。いたく[illegible]ひとるまでは（二二）[illegible]なる[illegible]を。ひ

たすら淨土に心よせて。こりはてにけん心の程。いみじく覺えて侍り。此の中納言もいみじき往生人にていまぞかりけん。つれもなき心の。おもひおどろきて。世を[illegible]の吹きにけるにこそ。今は又むつましき新生の菩薩どもにてこそ。いまぞかるらめと思はれて。其の事となくあはれにたつとくも侍るかな。

〔六〕[illegible]入道往生の事

むかし[illegible]尺殿とて。世を遁れる人侍り。なま君達にて殿上の交なんし給ひて。近江守に成りなんどして侍りける。いかなる事か侍りけん。俄に家をいでて本鳥切りて頭陀をなんし侍りけり。元より妻子はいませざりければ。知る所などをば。さながら北方に讓り給ひて。出でられし後には。又も其の家へは指し入り給はずとかや。只人の家に入りきて。よも山のそゞろ事。昔今の物語をして。日を送る業にて。はかぐしく勤なんどもなかりける人にて。面白き物語をなんし給ひければ。大臣家などに。常はめされて。何となく世をなんすぎられにけり。装束はなにをもきらはず着給ひけり。足も手もあらひもあけずいまそかりける。或る時。富家入道殿の中將にていまそかりける頃。二條におはしましける時。彼の[illegible]尺殿まいり給ひて今日身まかり侍るべし。いかならん山中にても。はひ隱れ侍らんと思ひ給ひつれども。往生をなん遂げ侍るべきにて侍れば。臨終にも。佛を開く緣びをかんと思ひたまふれば。此の御所のかたはらにておもひて侍り。ことなくや侍らんと申し給はせければ。誠おかしがらせ給ひて。さうなり。なじかはと仰せの有りければ。うれしき事にこそとて。御所の東の山ぎはの松の木の下ちて。誠におもしろき所に。石の上に西向きになん。手を合せていまそかりけるが。げに其のまゝにて。やがて息絶えにけり。紫の雲上におほひ。たへなる音樂所にみちてぞ侍りける。人々集りておがみけるなり。其の形體を移し留めて。おなじく石に彫え給へりける。今に侍り。[illegible]の雨のおちたるを着て。こもといふ物をうしろに引きかけ給へる姿なり。比は十二月三日とぞ。殊に哀れにも侍るかな。多くの財寶を皆とり捨て。そこばくの田園をさながらもて離れていやしきさまにやつれ給ひて。知りしらぬ家共に入り居て袖をひろげ給ひけん。さすが人も[illegible]木ならねば。見る目もさらに。かきくらされてこそ侍りけめ。さそらへいでて後は又も昔里に歸り給は[illegible]りけるも。かしこくぞ侍る。又世を捨てても。すみなれし所。しれるさかひなどにては。袖をひろぐる事は。いかにも有難かむめるにと。それさへ推みて覺え侍り。なにとなき物語りして。其の事となく日を送り給ひけんは。外の有様はものさはがしきに似たれども。内の心はすみ濟りて覺え侍りけり。(二四)大隱は朝市にありといふ。これならんと覺えて侍り。

〔七〕三井寺の[illegible]して[illegible]心の事

以往。所謂大江山。いく野の里を過ぎ侍りしに。人ざと遥か離れて。谷よりは東に五六町。山の中に入りて庵結びて。六十ばかりにかたぶきたる僧いまそかりき。かけ樋の水。心すごく流れて庵の内すみ澄りて。[illegible]へるあさの衣の外は。何も見え侍らず。殊に貴く覚えて。委しく尋ねたてまつり侍りしかば。昔は三井寺の学侶にて侍りしかば。山と寺と中悪しき事の有りて。山のために。寺やかれ侍りしかば。住所なくあぢきなくて。[illegible]り出で[illegible]々迷ひありき侍りし程に。今は年も傾きぬれは。此所になん住み侍り。「寺は里へ出で侍りしかども。今は又住むべきほどにも侍らねば。有るにまかせて里へも出で侍らねども。人の時々尋ね来て。命を継げに有りとぞの給はせ侍り。ゆゝしくいさぎよく。すみ澄りて見え給はせ侍り。げにも(三七)[illegible]のうちには。山寺とて[illegible]もさかりに侍れば(三八)[illegible]の三会の暁まで。あるべき寺なりとて。(三九)[illegible]大師に[illegible]へ給ひし。[illegible]なりと覚えて侍るに。多くの[illegible]。さながら[illegible]と[illegible]りけんを見侍りけんは。さこそかなしくも侍りけめ。[illegible]の[illegible]心(四〇)。[illegible]にも[illegible]くも侍るかな。[illegible]しいかなかりの世。あだなる身をしらずして。いつとなく[illegible]をのみよこたへて。はてには寺をさへ。ほろぼし侍らん事よ。何を[illegible]子にかり。[illegible]を[illegible]門に[illegible]して。さぎらをみがく人だにも。[illegible]の中の[illegible]ひとて。[illegible]の金あり。まして[illegible]の[illegible]をわきまへ侍らぬ人の。心任せ侍らんは。[illegible]にぞ侍るべき。只げにもひたすら。[illegible]れずば。此の寺は栄はれじと。[illegible]々かしこく侍り。(四一)如く人の身にきはまりて。苦しきは[illegible]なり。うらみ[illegible]何よりおこるぞ。世にあるより[illegible]る物にこそ。世にあればこそ[illegible]はあれ。[illegible]あればこそ[illegible]はあれ。うらみあればにぞ[illegible]する。[illegible]すればこそ[illegible]する。されば心と苦をうけて。[illegible]せるは世にある人にこそ。

〔八〕 [illegible]日上人の事。

昔[illegible]戸の[illegible]と云ふやんごとなき[illegible]。もろこしに渡り給はんとて。西の国に趣きて。播磨の明石といふ所になん。すみていまそかりけるに。浅ましくやつれたる僧の来て物を乞ひ侍り。さながらあかはだかにて。えのこを頭にいだき侍り。人尻前に立ちてわらひなぶりけり。あやしのものやと。[illegible]におぼへて見給へば。[illegible]木寺の[illegible]日上人にていまそかりける。ひが目にやと能く見給へどさうなり。まがふべくもあらざりければ。かきくらさるる心ちして。伏拝びて。あれはめづらかなるわざかなとの給はせければ。上人[illegible]笑みて。[illegible]に物狂ひ侍りなりとて。走り出で給ふめるを。人あまたじて留め奉らんとし侍りけれども。さばかり木ぐらき。[illegible]木が中に入り給ひぬれば。跡なく止み侍りけり。[illegible]はあまりすべきかたなく。かなしく覚え給ひて。其の寺となく。其の里にとまり尋ね給ひて。[illegible]く尋ねいまそかりけれども。其の後は又も見へずなり給ひにき。さて里の

翁に。くはしくことの有様を問ひ給へりければ。いづくの者とも人にしられで。此の村に住みても。廿日ばかりなりとぞ答へ侍りける。此の事かぎりなく哀に覚えて侍り。何とげに世を捨つると云ふめれど。身のある程は衣物をば捨てずこそ侍るに。誠にも貴くもおぼへ侍り。凡そこの聖人は。時々ものくるはしき様をなんし給へりけるなり。或る時は清水の滝の下に寄りて。合子(三一)と云ふ物に水をうけて。かくれ所をなんあらひ給ふ事つねのわざなり。いみじくしづかにおもひすまし給ふ時も侍るめり。一かたならずぞ見へ給ひし。すみわたる心のうちは。いつもおなじさまなれども。外の振舞は百に替りければ。よしなき人のおもひを。我のみ一方にはとゞめしとおぼしけるにや。此の聖人ぞかし。中関白の御忌に法興院に籠りて。暁方に千鳥の鳴くを聞き給ひて。

(三二)明けぬなりかもの川瀬に千鳥鳴く。けふもはかなく暮れむとぞする

と読みて拾遺集(三三)に入り給へり。明けぬるよりはかなく暮れぬべき事の。兼ねて思はれ給へりけるにこそ。彼の拾遺集には賀茂法印とのりて侍るは。此の聖人の事にこそ。

〔九〕 瞻西聖人の事

東の京の雲居寺(三四)と云ふ所に。瞻西上人(三五)と云ふ人いまそかりける。智行ともにそなはりて。偏へに此の世をなん厭ひ捨てて。わくかたなく後世のいとなみのみにて侍りけり。或る時京極(三六)の大殿の御所。

粟田口になん住み給ひける比。冬なりけるなめり。けしかる女の出来侍りて。あまりに寒く侍り。いか斗の物なりとも得給はせよと聞き侍りければ。さこそ寒かるらめと哀れにおぼして着給へりける小袖をなん給びてけり。さてあくる日又ありし女来て云ふやう。昨日の小袖ははからざるに失ひて侍り。又給はらんと云ふ。やがて又給びてけり。さてあるべきかとおぼす程に。又次の日裸ばかり身にまとひて。又(三七)衣得給へと云ふ時。此の聖人心得ずおぼしての給ふ様は。二どは善悪を以て汝にあたへぬ。さのみは身のちからなし。叶ふまじとの給ふ時。この女きあしくなりて。汝はきはまりて心ちいさかりけり。心ちいさき人(三八)のせをば受けずと云ひて。二の小袖をなげ返してかきけつがごとくうせ侍る。聖人化人の来て。我が心をはかり給へりけるにこそとて。心の程を自はぢしめて。悔い悲しみ給へりけるぞ。哀にかたじけなく覚えて侍る。かやうの事などは。世あがりて聞きをく跡おぼへ侍れども。末の世にはためしまれなるべし。さればいづれの仏菩薩の来て。女の姿と見へて心をはかり給ひけんと。床しく覚え侍り。彼の聖人は文殊の化し給へるにやと。の給はせければいかなるしるしの侍りけるやらん。聖の心の露ばかりもけがれざりければこそ。すめる月の。空くもりするあやまりも侍りけめと返ゝ床しく。おかしくおぼえて侍るぞや。げにかなしき我らかな心一のしづまりえで。引き結ぶ深山の草の庵に跡とめがたくて。只はかなき嬰児の跡のごとくして。

むなしく月日過ぎ行きて。老の波路にたゞよひ侍りて、なぎさによれば岩ほにくだかれて。おのれとのみ生死の海に沈む事の心うさよ。さて又佛菩薩の。御心に背きければ。御ことのりをも聞かざるまゝに。いよ／＼くらきよりくらきにまどひて。眞如の月にはこゝろもかけざるうさは。さらに書き述ぶべくも侍らず。

撰集抄第二　終

撰集抄第三目錄

西行記

〔一〕正直房往生の事
〔二〕笠木山寺の聖發心の事
〔三〕播磨國平の三郎發心の事
〔四〕良[illegible]僧正の事
〔五〕西住法師の事
〔六〕[illegible]入の事
〔七〕中納言顯基の事
〔八〕東大寺[illegible]の事

撰集抄第三

〔二〕正直房往生の事

「美濃國と聞きしやらん。中比其の國にあやしの僧。里を廻りて人にみやづかふ侍りけり。いみじく心ばへわりなくて。何事にも心得たりければ。人々我れも〳〵とあらそひやとひ侍りけり。二三日つゞゝなんつかへけり。態とびとつ所には久しくはいずと侍りける。心だての云ふべきかたなゝ。すなをに侍りければ。正直坊と名付けてよぶ人も有り。又直心坊となん云ふ族も侍りけるとかや。其の里にめぐりつかふわざ。五年ばかりをへて(一)掻き消ち見へず成りにければ。誰々も怪しみ忍び合ひて。普く尋ねけるにある山のふもとに。西にむかひてうるはしく座して。手を合せて氣たへ侍りぬ。そばなる木にかく書きたり。(二)保延二年十月十五日。もゝすぢりゆがみ房。まがれるながら往生しぬと。目出度き手にて書きたり。餘りにかなしくたうとくて。其の國の人々皆々力を合せて。いさゝかもたがはず。形體をなんうつし留めて。置き奉りて侍り。其の姿はかみなど長くて。帷ひとつにひがさといふ物をしき給へるなりと。語り侍りしを聞くに。隨喜のなみだせきかねて侍り

き。「いかなる智者の。一爾畔里によぢて徳をかくして五とせの程。心安きつぶねとなりていまそかりけん。今更修行の昔戀しく侍り。又修行と一所に久しく跡をばとめ給はざりけんも。定めてふかき心侍らむと覺えてたうとし。よもみのの國ばかりにはかぎり給はじ物を。外の國にてもつぶねとなりてこそは。又さるべき徳の聞えてこそ。此の國にて隱れはて給ひけるにこそ侍らめと。眞に覺えて侍りとしてもげに。はては隱れもなき物を何に中々に徳をしづめ給ふらんとかなしく覺え侍り。心のいさぎよく澄める程は。いくらばかりといふべきふしぎ不レ覺。さても百すぢり。ゆがみ房とこそ書き給ひぬるに。何とて心いたく。すなほにはおはしけるやらんと。おかしく覺え侍る。此の名を聞き侍りしに。餘りに貴く侍りしかば。彼の國に罷り下りて。移しとゞめ奉る姿をも。拜見し侍らんと思ひ給ひて。既に佛前のほそ谷川まで出で侍りしが。心地の惱しくて行くさきの道もいぶせく。思ひやられて侍りしかば。そこより思ひ返して。きびつ宮に罷り侍りき。其の後はつれもなき心にて。いつもくちせぬ縁かたちにし侍ればと。心一をやりて。今は年のたけぬるぞかし。よく縁もうすく侍るにこそと。返々心うく侍り。しかあれどもよひ曉の心のすむ時は。野寺の鐘のつく〴〵と思ひ出され奉りて。すゞろに涙のもれ出づるに侍り。哀れせめて是斗の心なりとも。やがて曉の鐘の聲よりして。うちつゞきさめぬ事にて侍れかし。何とあればか。心々にかはりて。

世を[illegible]の身にしみて思ひ侍る人も。いまぞかゝらんと深山深く覚えて侍れば。[illegible]の後は
さりともむなしからじと。たのもしく覚えて侍り。げに心のすみ居なん後には。いかならん友にま
じはるとても。なじかは可レ悔。ますく\こそすみ侍らめと。床しく侍るぞや。「此の世にははかなき
つぶねの様の。姿にてこそおはすとも。今は(三)安養界の聖衆につらなりましますか。又[illegible]隔た
る(四)[illegible]天の雲の上にも生れ給ひけん。又さもあらず。(五)補陀落の南の岸にいまして。大士の法門を。
いつも耳にふれ給ふ。聖衆にもや交り給ふらん。(六)[illegible]代は憂き世に交りて。[illegible]きなさけをとゞめ
給へり。げにいとゞあはれさそふるかたなく覚えて侍り。

〔二〕 [illegible]山[illegible]の男発心の事

過ぎにし比。西国の方にまかりて侍りしに。(七)[illegible]山のふもとに。よもはれ渡りたるが。風なども
さしもいたむべき様にもあらぬ所に。賤しき庵あり。只身一をかくすべき程にこそ侍れ。哀れにて
見侍るに人もなし。あやしや此の所に住みける人も。已に思ひ侍るゝにこそと。哀れに覚えて。暫く
やすみして侍るに。けしかる男の。五十余りなるが。とかく[illegible]へて[illegible]さまに。のぼりくだるあり。見
侍ればさむき道に[illegible]もなき[illegible]を一つなん腰にかけ侍りけるが此の庵に入りつゝ。うちやすみてい
ねたり。こはいかにとあやしくて近しく寄れ侍るに。我が世の中に侍りし時。たゞもなくまづしき

身にて侍りしかども。[illegible]の縁になんかゝりて。むさぼりすぐ侍りし程に。なすべき勤めはまらず
して。人のいたくはげしく。[illegible]と申ししに。こゝにてもろともに。いたづらにこそなりなめと思
ひ侍りしが。倩おもへば。しばしが夢の世の中の。名をおしみて後世をいたづらに。なしはてん事
の悲しく覚え侍りしかば。日比すみし家をなん。其のかたにわきまへて。妻子はなにとしても世を
わたれと思ひて。かくまかりなるに侍り。今はかしこくぞ。かくうきふしのありて。世をすててけ
る。さるべき知識にこそと。思ひ定めて嬉しく侍り。本鳥なむ切りたく侍れども。誰れそりてくる
べしともおぼへぬまゝに。よしく\むだにもすみなば。とてもかくても侍りなんと思ひて。已に七
ヶ[illegible]りをへて侍るとなん語る聞き侍りしに。余りに哀れに覚えて。さまもしらず。いほの前にふし
まろばれて侍りき。さらばかみそりて奉らんとわびしかば。それはよく侍りなんと聞えしかば。
かみそりて侍りき。げにありがたかりける心かな。人の習。我が身のひがみたるをばしらず。人の
とかく云ひ侍るには。心に怒を結びて。たち所にいたづらになしはつる物なるを。あだなる夢の中
の。しばしが[illegible]の世の中には。名をもうづめかしと思ひをとめて。末世をわきまへていとおしく悲
しき妻子をふり捨て。人も問ひこぬたかまの山の。みねの白雲に臥して。明暮弥陀の名号を唱えけ
んは。今一きは御心もいかに哀と見そなはし給ひけんな。所の有さまもいたくすみて覚え侍りし比

は、神無月の十日あまりの事に侍れば、月は陰する木々の中なれども、はれくもる光は一方ならで、もの哀れなる木の葉がくれに行く嵐の、かれ野の薄によはりて、そよめき渡る音を秋風のはげしくて涙にそむる紅葉の、もろく散る様なんどにも、無常思ひしられて哀れなるぞや。されば(八)恵浄三蔵は好みて所を求めよとの給ひ、智朗禅師は、心は所によりて、すむなんどこその給ふめれど、思ひ出されて哀れに侍る也。誠に此の男の発心、まめやかにやる方なく哀れに侍る。「あやしの身にて、何とて此の世は、かりそめのわざ、来世はながきすみかとは、思ひけるぞや。しかるべき宿世にたくはへける、善根の縁を得て、開けるにこそと、いみじく侍る深山おろしに夢さめて、(九)西にかたぶく月をば、心とこそ詠め侍りけめと、返々床しく思ひやられて侍り。

〔三〕相模国平の三郎の発心の事

中比相模国に土肥と云ふ所に平三郎国近といふ弓取侍りけり。いとけなかりける時、父は身まかりにけり。其の後は成人なるまで母のはぐくみにて、世をなんすぎ侍りけるなり。いみじく心猛くて、戦場の庭に、一陣を駆けずと云ふ事侍らざりき。しかある程に三十五と云ひける年、はからざるに母におくれ侍りぬ。既の別れに悲しみの涙に沈み侍りき。兄弟と云ふ者もなかりければ、父母の跡あとなく成りぬるに付けても、其のあと悲しく侍りければ、中陰になりて七日く孝事をなん、心に入れて訪ひ聞えける。かくて五旬も過ぎにければ、哀れはいとどうき身一つにつむ心地の覚えて侍りければ、先づ家の前に、五間四面の堂を(一〇)いみじく造営し、(一一)弥陀の三尊目出度くかざり奉りて、ありとある田畠、皆悉く*三昧つとむべき*布施に思ひ当てて、我が身はあさの衣のこき墨染にやつれて、いづちともなく出でにける。後にはつるに行くゑもしられず侍ると。伝へうけたまはるに、哀れさやる方なく覚えて侍り。誠に親子のなさけはわりなくて、幾程なき世の中にも、をくれ先き立つわざをふかく歎くめれど、日数むなしくうつれば、思はるる末も侍り、又歎きはやまざれども、うつりし人の後の世を、こまごまと訪ひなんどする人だにも、希にのみいまそかるめるに、思ひふかくて仏を造り、堂を立て、*財をさながら*三昧の布施にむくふるだにも、ありがたく覚へ侍るに、身をだになき物になして、かきけち失せにけん。心の中げにげに有がたくぞ侍る。凡そ慈母の恩の深き事をば、仏だにも一劫の間には、説き尽しがたしとこそおほせられたんめれば、つたなき我れに、いかでかそのきはまりをはかり侍るべき。始めて胎内にやどりて、十月身をくるしめ、百八十石の乳をすひて、朝夕膝の間をつつき、久しくひざの上に遊びて、百度母のえみを蒙れて、養ひ立てしあり様、有るは有るに付けてくるしみ、無きは無きに付けていとなみて、成人となるまで、能く哀れみをたれられ侍る恩、いか斗ぞや。はかりて云ふべきに非ず。しか

あれば。いかにも浄菩提の心をいたかばやと思ひぬれど。ふかく身にしむ心のなきままに。さてのみ日数もつみぬるぞかし。いきて此の世にながらへ給ふ。父母だにも孝行のおもひはおろかなり。況んやうつりし後は。只暫しの程の時にて。色の衣ぬぎかへぬれば。さてのみこそ侍る事なるを此の人（一二）の思ひ取りて。さまを替へ。住みなれし所を離れて。修行し給ひけん。貴さ。やるかたなく侍り。ことはりを弁へぬる人すら。か様の事はいまだ見へ侍らぬをいかにとして東夷のあらけなき心に。かくまで侍りけるぞや。げにむつまじかりける人にこそ。さてもいまは。何れの浄土にかいまそかるらんと返々床しく侍り。

〔四〕良観僧正発心の事

近比。[illegible]の中将[illegible]と云ふ人いまそかりけり。[illegible]おろし給ひて後は。今[illegible]の僧正良観となん聞へ給へりし。（二〇）[illegible]の大臣の。[illegible]事にすませひける年の。[illegible]月ばかりに。[illegible]の前にめづらかなるみどり子を[illegible]のきぬに押しつつみて。きぬにかく。

（二一）[illegible]まさる[illegible]なかりけりみどり子は。やらん方なくかなしけれ共

と書きて。捨てたる事侍りけるを。[illegible]し[illegible]して[illegible]れとおぼしけるにや。父母といはん[illegible]はかならず[illegible]ね来て。ひらへ（一三）[illegible]れむべしとて。[illegible]にてなんそだてさせ給ひて。中将まで[illegible]し給へるなるべし。かくて[illegible]と云ふ山里になん住み給ひける比。[illegible]にあさましくやつれたる僧の。ちかく家を出にけると見へて。月しろなどあざやかに見ゆめり。中将おりふし。[illegible]の[illegible]にいまそかりけるが見給ひて。いづくの者にかと尋ね給ふに。[illegible]か[illegible]し入るべき事の侍るなり。[illegible]しく此の丈に聞きて侍れとてなげ[illegible]て来りぬ。中将何ならんおもひ分けぬわざかなと。不[illegible]に[illegible]えて。[illegible]文を見給ふに。[illegible]はかたじけなくも。[illegible]の父にて侍るなり。平らかに身にとならせ給ひしかば。いかにも身にそへ奉らばやと思ひ侍りしかども。すべき方なく。まづしく侍りしかば。あはれとをのづから見そなはす人もやと思ひ給ひて。捨て奉りしに侍る。今又かく[illegible]り出でいまそかれば。かしこくと返々嬉しく侍る。かなしき中にもと思ひて。身にそへ奉つりしかば。目出度く果報の程は。あらはれざらましと覚え侍る。さても夫婦ともに[illegible]のうき世の中をすぎ侍りぬるに。此の[illegible]日[illegible]のさきに[illegible]れにをくれば。後世を訪らはんとて。かくまかり成りて。所も更に定めず。[illegible]の[illegible]とも。といいませかしと思ひてなん。申すに侍ると書きたり。見るにも心身にそはず。さればおはしつるは父にていまそかりけるにこそ。[illegible]のうせ給ふになん。家を出て[illegible]の行者と成り給ふにこそ。[illegible]しく覚え侍りければ。[illegible]子に[illegible]ひ給ふにも及ばずして。いづちともなく足にまかせておはしける[illegible]に。大和山城の[illegible]の。（一六）[illegible]さむみ衣かせ山とよみける。[illegible]の北のはたに。夜のほの〴〵とす

るになん。付き給ひにける。さて川舟の上にて。手自木像切りて水にながしつつ。興福寺の千部法師の。東北院へ立ち入り給ひて。かしらおろして。法名さづかり給ひて。ひろく国々修行して。父母の後世を訪ひて。法のしるし共あまた施して。目出度く皆来にてなんいまそかりければ。僧正まで成り給ひけるなるべし。此の事殊勝なる心にも。哀れさ身にしみてやるかたなく侍る。人の習ひが身世にありて。父母の後世を訪ひ功徳をも造らんなどこそ思ひ初めるに。更に行末いとどさかふべき栄花の梢の花を思ひ捨て。やすくもやつれ給へる。無縁の袂に道しばの露払ひつつ。たどりありき給ひけん心の中の貴さをば。筆で三世の仏達の。見すごさせ給ふべきと覚え侍る。むつまじく覚え給ひし。妻子にも又かくともいふ事なく。夕されの空に走り出で給ひて。夜もすがらいづちともなくおはしけん。げにくとかく云ふべきにあらず侍る。又父母の心操にして。情のふかさ昔より。今まであるべしとも覚えず。身に餘る物なしと書きて。すてぬる子の。かくさかへんには我れこそ父母なれと云ひて来寄ぬる人も有るべし。又ことの葉に付けて。ほのかにそれよとしらする縁も侍るべきに。露しらずして過しけん。有難くぞ覚え侍り。母の身まかりて。父は逆縁の菩門と成りて後。母の後世問ひ給へとて。文をなげ置きさりけん心の中。返々もゆかしく哀れに侍り。いたくよもくたれるしなの人には侍らじ。歌は読人不知とて新古今集にのれり。彼の歌を読くたびに此の歌の露に至りてすずろに涙のしどろなるに侍り。げに哀れなるわざかな。（新古今集の歌）何にたとへん世の中を。漕ぎ行く舟の跡のしら浪。秋の田をほのかに照す。よひのいなづまに事よせし。あめの下にはかなくあだなる物。身につまる物なしとて。藪かき分けて生めるみどり子を。空をあふぎて捨てけんはおろかなる心ちし覚え侍れども。しづかにおもへば後に問はざりけんに。心もいと澄みて覚え侍り。

〔五〕西住法師の事

過ぎにし比。紀伊国ゆらのみさきをすぎ侍りしに。なぎさ近く釣舟漕ぎ寄せて。四十にかたぶき。五十斗にみへ侍る男の舟の内になき居たる侍り。何なる事を歎ふらんと哀れに覚えて。浅く水におり立ち舳ばたに取りついて。いかに何をか歎くらんと云ふに。此の男泣く泣く聞ゆる様。是はつりする者に侍り。只今此の浦にて。殊に大きなる鯛のつられて侍りつるを殺さんとし侍りつるに。鯛よ左右の眼より紅の涙をながして歎くかたちのみへ侍りつれば。あまりに悲しみて。ゆるして本の所にはなたんとし侍りつる。此のつれの釣人刀にて目をつきて侍りつれば。くるめきまよゐつるが。餘に身にしみて。悲しく覚え侍るとて。舟よりとびおりて浜にあがりてねがはくはかしらおろしてえさせよと云ふを。いかゞとためらい侍りしかども。げに思ひとりて見へ侍りしかば。かみをそりて侍りき。さて我れにともなふべしとて。それより具足して。（一）西国修行まはりありきて。つゐに都

にのぼりて。「西山殺生人の庵りに引き付け。一心の因縁など語り奉つり侍りしかば。哀れなる事かな。我等は西方に帰るといへども。かれも釣り人。我れ等もつりうどなる哀れさよ。よし〳〵是れにおはせよとて。行すまして侍り。今に日出度き後世者にて。西山となん云ふめり。我の命を惜しむ事の。かはゆくも覚へず。生るる類をころすが。まことの罪ともしらざればこそ。四十あまりまで釣引き釣りし侍りけめと。いかなる縁の今更よりきておどろかぬ心をもほしけん。血のなみだをながすわざなどは。實に時にとりて。身にしむ程の事なれども。猶ちうき世をこりはてける心は。然ばかりかはいまそかるべきと。げにたゞ事とも覚えず。「佛菩薩のいさゝかのたよりにて。殺生を嫌はすべき人と。見そなはせさせ給ひて。（一八）化度とけしてつられましますにやとまで覚えて。其の事となく。なみだのこぼるるに侍り。「地に倒るる輩は。地に依りて立つと云ふ事あり。實なるかなやと覚えて侍り。」つり人となりてたゞれはてぬと見べし人の。釣りに依りて生死の苦域を立ち離れぬる。されば我れ等は何によりて倒るともなければ。又何のゆへに立つべしとも覚えず。あはれたうる所をしりて立ちなばやと覚えて侍り。殊々生ける身の。命を惜しむ事おしなべて皆等しかるべし。只常様つたなくして。悪業と成りぬれば後をいはぬにばかされて。思ふ心のうちをもしらずして。是れをころして我が身の世を過らん事。返々おろかに無慙なるべし。しかのみならず是を食にもちいる又放逸なり。まさしく生るる類なりしをと覚えたり。しかも生類のたぐひを。口にふれつらんには。是れを食すれば其の殺する罪。食する所も摂り錯りて。此の世はや過ぎ侍らん事のかなしさよ。只魚を多く食ひていたづらに過ぐるだにも。おそろしきにや。されば舎利弗は。一口二口との給ひ。目犍連尊者は。殺すくなくてあじ多し。いかにもつつしめと侍り。佛は一粒の米をはかるに。百のこうを。用ゐたりと侍り。さ様に多くの煩。積り重ぬる米を。日のうちにいくらばかりか食し侍らん。是れをくひ身を助けて。いくらばかりの善業をか修し見つると。返々あさましく覚え侍り。

〔六〕 [illegible]人の事

中比筑紫の横河と云ふ處に。[illegible]人と云ふ人いまそかりけり。智行ひとしく備はりて。いきとしいける類を。あはれみ給ふ事限なり。法華を本尊として。常には大悲の法門をなん。心にかけ給へり。いまだ此の入道人かざりおろし給はざりける前は。吉田中納言経光とぞ申しける。（一九）筑紫に成りて。筑紫へ下り給ひける時。都よりあさからず覚え給ひける。妻をなんいざなひていましけるを。いかが侍りけん。あらぬかたにうつりつつ。花の都人は。ふるめかしく成りて。うすき袂に秋風の吹きて。有るか無きかをも問ひ給はず成りぬるを。うしとおもふ思のはれもせぬつもりにや。此の北の方なん重く煩ひて。都へのぼるべき便りだにもなく。神仏はおもくみえける。とさまにして。我

にのぼりなんと思ひ侍りけれども。心に叶ふつぶねもなくて。海をわたり。山をこえんやもおぼえざりければ。・師のもとへかく。

とへかしな憂き所なき露の身は。しばしも苔の葉にやかかると

(二〇) と詠みてやりたるを見侍るに。日比の情今更身にそふ心地し給ひて。哀れにも侍るに。又人のはしり来なりて。すでにはかなくならせ給ひぬと云ふに。夢に夢みる心ちして。我が身にもあられ侍らぬままに手づから本鳥切りて。横川と云ふ所におはして。行ひすましていまぞかりけり。彼の所は前は野径。牆垣荒り破して破れ。虫の声は草の根ごとにしどろなり。後は山嵐より〳〵おとづれて。松の琴を調べ。右は海漫々としてきはもなし。左は清瀧河。岸高くして岩打つなみくだけつつ。ほのかに聞え侍り。かかる所に身一かくすべき庵引き結び。左のはたの月輪より。香の煙細くそびき空には紫雲の旗をまき。念仏の声閑かにして。西に聖衆の迎ひを待ちておはしましけるが。(二一)天承の比うせ給ひにけり。実にいみじく往生し給ひけるとなん。げに哀れにも貴くも覚えて侍り。誠に昔の芝蘭のちぎりこまやかに。偕老のむつびさこそわりなく侍りけめども。うるさき情の色にうつりて。秋風のふきかさぬる人の。身まかりけるに驚きて。さしも捨てがたき此の世を離れんと。思ひなり給へる心のうち。返々ありがたく侍り。誠にもいとおしき子もいまぞかりけん。又今なじみ

給ふ妻も。さこそ離れがたく侍るべきをふり捨て。わく方なく後の世の。かてをいとなみ給ふるせき心ばせなるべし。されば此のうせ給ひし北の方は。成範卿の御娘なり。何なる契にか此の中納言殿して。互の契不浅侍りければにや。はる〴〵筑紫までに下り給へり。しかあればおぼろげならでは。すさめ聞え給ふべくもあらざるを思ひ捨てたまふも。しかるべきうき世の中を離れ給ふべき。縁にてこそ侍りけめと覚えて。いとゞ哀れに侍り。此の歌は読人不知とて(二二)詞花集にいれり。さ様の宮などの。師にいざなひて西国へ下り給ふなど。載せ侍らん事の。さすがにおほえて。読人不知とは入れ給ふにこそ。就中其哀れに。定めなき世の中かなとよ。忝くもいすゞ川みなかみ清き流にていまそかれば。国母后にもあふがれて。三千宮女のかんざし。玉の冠のかざりあざやかにて。百敷九重の上下に。いつかれさせ給ふべき御事なりけるに。故中納言に見捨して。花の都を立ちわかれ。「八重のしほ路に日数へて。登るも下り下るも登る船のうちに。波になみしく袖の上。雲居になれにし面影の。いくよかさぬる月をみて。身をつくしする甲斐もなく。いつしか秋風の袂にかよひて。消えの露のしどろにて。おき所なく失せはてゝ。うらみしと思ふ心の。我が身はさすが捨てがたくて。とへかしと書き給ひし哀しさよ。さてもながらへはて給はざりける命ゆへに。あにはかりきや恋をすべりて。中納言に袖をかはすべしとは。かけても思ひきや。住みし都を離れて。辺土の旅

の下に朽ち給ふべしとは。盛衰はうき世の中。富もわらやも。はてしなしとは聞えども。哀れに悲しき事今更心にあらたなり。聞き所なしと歎き給ふまでは。此の世をさり給ふべしとこそ。覚えざりしか。出づる息引くいきを待たぬは。無常なりとしれども。かくまで遠やかなりとは人の思はざるにこそと。返々もはかなく侍り。哀れに無常の心に。いつもひし〳〵とぞ見て。我が身に思ひを不レ止。此の世をしたふ事のなき心のつきねかし。しかあらば吹きよき。吹きすぎする風に付けても。無常の思をこがし。（二三）南枝北枝の梅の開落異にしてうつり。田地に氷消えて春の水満し。新柳風にかみけづりて。鶯舌の囀ひげをあらふ。四季のかはりにも無常は心にぞ。深くしらるべきと覚えて侍り。すはやう寸でにうつりて。あん頭になりぬるは。羊の歩。我が身につもるをばしらずとおぼえて。身にかうおろかにも侍るかな。

〔七〕中納言顕基の事

むかし中納言顕基と申す人いまそかりけり。後冷泉院（二四）の御時。朝に仕へ給ひて。寵愛いやめづらかにして。多くの人を越えなんどして二しな（二五）の位にのぼり給へりけれど。心は林下のとほそをもとめて世をのがるる心深くなん。おはしけるなんめり。しかあるを思ひ煩ふる程の。未だ無きやり給はざりけるに。御門はかなく成らせ給ひしかば。中納言天台山に登りて。かしらおろして。大原と云ふ

所になん。行ひすましていまそかりけり。朝につかへし其のかみより。只明暮は哀れ罪なくして。配所の月を見ばやとて。涙をながし。古人（二六）いづれの世の人ぞや。姓と名をもしらず。竹々草のみ深く埋めてけしからず涙を流しけるとかや。目出度く行ひすまして。智行世に聞え給へりしかば。宇（二七）治の大臣殿あらまほしく思し食して。彼の大原に御幸して。中納言入道の庵に。一夜をあかさせ給ひて。後世の物語侍りけるに。此の世の事をば。かげふれ聞え給はで。後生の事のみにて侍りけるなり。暁になりて。今はとて出でさせ給へけるに。入道いはのほかにみをくり奉りて。子息にて侍る俊実は。不覚の者にて侍るとばかりぞ申されける。世を捨て給へども。恩愛の道のあはれさは俊実の事を見捨て給ふなと申されけるにこそ。されば宇治殿の御覚えれみにて。大納言まで心のまま授けられけりとうけ給はり侍りき。さて中納言は草の戸ざし閑かにして。云ひしらず目出度く往生をし給へりと。「道心集に載せられて侍りしを見侍りしに。其の事となくなみだのおちてあやしきまでに侍りき。発心のはじめことにすみて覚え侍り。忠臣二君に不レ仕と云ふ。世俗の風儀を守り髻をおろし。大原の奥に閑をしめて。行ひ給ひける。いとありがたくぞ侍り。所から殊にすみて覚え侍り。長山四方に廻りて。樵につま木こるおのの音の山びこにひとき。峰のよぶこ鳥のひねもすに鳴きわたる。秋の草門を閉ぢて。ねやの萱のしげりて。虫の声枕の下に聞えけん。さこそ心も澄

みていまぞかりけん。たゞ人はいかにも。このむ所をもとむべきなり。心は所によりてすむべきにや。唐の郎士の竹林寺。もしは[illegible]河。尼連禅河などの。すめるさまを聞くには。かしこにそゞろにすみたく。唐土の江州[illegible]山。雪山の[illegible]寺などの閑かなる様を聞くには。かしこにすむ身と。などかならざりけんと口惜しく覚え侍り。大原小野の里。吉野の奥のすまゐこそ。あらまほしく覚えて侍れ。所なくして。明石の月を見ばやとねがひ給ひけん。げにく哀れに侍り。元和十五年のむかし。思ひ出されて。心中そゞろにすみても侍る哉。[illegible]の[illegible]の性と名とをしらず。年のうつるごとに。秋の草のみ生じ。古き本堂朽ちて。傾き立てる様。思ひ入りて見侍ればすずろに哀れにも侍るかな。しばしは名をばらうづまねども。それさへすえ果てしなく訪ふ。きざみし本尊も跡形なく。同じ上に積み上げて。同じ所が下にうづみ重りて。やけば煙とのぼり。埋めば土と成るさま身にしみて哀れにも思ひ給ひけめと思はれて。今も涙のいたくそぼつるに侍る。大原の奥のいとすき。霜のゝすがの枕くれば。さもこそ玉の緒をよはみに。大事にすがりかたぶくらめとおぼへ侍り。

〔八〕 東大寺[illegible]の事

過ぎにし比。(二八) こしの方へ罷り侍りしに。[illegible]さか河を舟にてなんわたり侍りしに。[illegible]はたちの内に見ゆる僧の。あでやかなるがさしも寒き空に。ひとへなる白[illegible]一に。きぬ一重なる衣を着たる僧の。舟の中にて人目もつつましげなる侍り。いかなる人やらんと哀れに侍りしかども。とかく問かば。憚かりもぞ侍るべきと思ひて侍る程に。此の僧さしのかひをもとらで。水にまかせて舟をくだし侍りしかば。なにとなくかく。

見なれさほとらでぞくだすたかせ川 (二九)

と詠みて侍りしかば。此僧にありつる僧のかく。

月のひかりのさすにまかせて

と付けて侍りし哀さに。とりつゞきて。いかにいまだ無下にいとけなくをはするに。たゞひとり。いづちとてかくいまそかるらんと尋ね侍りしかば。さしていづくと所も定めず侍り。我はならの京東大寺に住み侍り。[illegible]と云ふに侍ると云ひて後は更にの給ふ事侍らざりき。さて越前のかたへこそ越えおはし給へりしか。左様の人のいかなる事にてか出で給ふらんといぶせく侍りしかば。又の年東大寺に詣で侍りし序。(三〇) [illegible]にかゝる事なん侍りしは。いかなる事にか侍りけんと。尋ねたてまつりしかば。さる事あり。さてあひたてまつり給ひけるにこそとて。頭しづくとなき涙し給へり。やヽしばらくありて涙のごひなどし給ひて。大[illegible]とて。[illegible]の[illegible]久我大臣の

侍子に侍り。年は未だいとけなくいまそかりしかども。いつしか世外の才智はからかにして。花鳥の情り給へりしが。此の三年のさき。神無月の比。俄かに失せ給へり。

此の世をば思ひはなれんとばかりに。思へば其のうちさそふ也と常におはしける。枕子に書き付けてなん出で給へり。其の後はふつと見へ給はず。今までも哀れなる事には。世のうちをそひてなど申して。喜び合ひ侍るなりと語り給ひしに。哀れさ身にしみてやるかたなくぞ侍りき。くれ竹のまだ二葉にて。よよを経るふしのび。あさき縁のいとけなさに。思ひ立ちて出で給ひけん。心の中返々貴くも侍り。なにとなく年もたけて。よろづ思ひ入る程の人だにも。思ひながら。なれぬるすみ家のはなれがたく。行くべきさきのいぶせさに。さてのみはせすぎていたづらと。年のみたけぬるは。人のならひなるぞかし。しかるを此の幼稚の。世を厭はなれんとおもふかねに。暁の鐘の打ちさそひけるに。今更もよほされて。時雨まよふ神無月。あらしはいとはげしく時雨は袖の柳うきに。はにふの小屋にだにも眠もやすめず。(三二)空にさえくらすこし暁のかたをさして家をかさねる都の上に。かれ野の原を寝覚として臥し給ひけめ。世を捨つるといひながら。返々もいと哀しく思ひやられて侍り。おろ〱の心にては思ひ立ち給はじ。世々をへたる五十年の。よき齢を。此の世のつとめにうちくらして。はや世を捨てる身の身にしみて。此の身にはさゆる嵐を。風はことともおぼえ給はざりけるにこそ。げにと閑かに思ひとけば。此の身を身とて。をしむべきには侍らざる。惜しむとも甲斐あらじ。限りある命のつきなん後は。いたづらにくちはてて。(二三)北邙山の煙とものぼり。若しは野けいの土ともなり。此彼の鳥に食せられて。心がかりこそ。仏前の菩薩にはとられ侍らめ。しかあれば此の身はただしばしがほどと。心をやどすうつは物となり。何とてか是に思をとどめ侍るべき。六道輪廻しなく〱なり。いくたびか鳥獣とも生り侍りけん。其の時は又。鳥の形をこそ愛しけめ。(二五)今又此の身をあいし侍りて。此の形をみて。にくからぬかたちとひとり思ひおれる。心のみ一時にして。又畜生にかへり。さてもやみもせぬいく生のかたちを請けて。愛着くるしみを請ひて。閻魔にしみひとり泣きおれらんは。いとはかなかるべし。「はや此の身を思ひ捨てて。我が身を惜しむ心を。はなれ侍らばやと思ひ侍れども。身の浮沈のあつくそびきて。(二六)真如の月あらはれがたきにや。すべて此の心の付き侍らぬぞとよ。いかなればいとけなくして。行く末はる〱とおひ出で。三千の世界に。いつきかしづかれ給ふべき人柄の。身をなき物にし給ひて。かきけちいまそかるらん。何に託るとしもなき老法師の。ただ心のままにあらせて。徒らしく此のをくらさんずらん。口惜しく覚え侍るぞや。

撰集抄巻第三　終

撰集抄第四　目録

西行記

〔一〕[illegible]大僧正の事　天台座主
〔二〕[illegible]大納言[illegible]事
〔三〕[illegible]の事
〔四〕大[illegible]三[illegible]見て[illegible]心の事
〔五〕[illegible]大[illegible]の事
〔六〕[illegible]の事
〔七〕[illegible]事
〔八〕中納言の[illegible]小倉山の麓に住む事
〔九〕[illegible]山の[illegible]大[illegible]へ不[illegible]事
〔十〕[illegible]の[illegible]を[illegible]たまふ事
〔十一〕[illegible]の事
〔十二〕近江国の[illegible]発心の事
〔十三〕江口の遊女の事
〔十四〕[illegible]并宇佐宮の事
〔十五〕[illegible]へ[illegible]の事　西行
〔十六〕[illegible]へ参る事并[illegible]にて人[illegible]事
〔十七〕[illegible]三[illegible]并[illegible]王[illegible]天の事
〔十八〕人々[illegible]亡の事
[illegible]　[illegible]　[illegible]三[illegible]　宇治の大[illegible]
大二[illegible]
〔十九〕[illegible]の事

撰集抄第四

〔一〕[illegible]大僧正の事　天台座主

以往[illegible]に。しばらく[illegible]し侍りし事有りしかば。其の[illegible]見ありき侍りしに。[illegible]の[illegible]と云ふ所侍り。所は[illegible]を[illegible]としてきはもなし。後は北山けんそにして。今にさかしき所侍り。なぎさにそひて。ひかたをまもりて。其の所にはいたり侍り。おぼろけにも。人のかよふ事にも侍らず。しかあれども。[illegible]と云ふ名の何となく。むつまじく覚えて侍りしかば。たどる〱[illegible]りて侍りしにあやしくあさましき庵のやぶれ[illegible]る侍り。めづらかにおぼえて見侍りしかば。庵の主は見へ給はで。[illegible]の[illegible]と[illegible]とばかり見え侍り。[illegible]なる板に。[illegible]大僧正[illegible]と[illegible]侍り。さては此所に住み給ふ世のおはしけるよと。哀れに覚くおぼえて。すずろに涙のおち侍りき。いまだ此所を出で給はざりければこそ。[illegible]をばのこしてをきていまぞかるらめと思ひ侍りしかば。其の日の暮くまで侍りしに。夕に成りて僧正。山の上よりいまそかり。山[illegible]の花をなん手折り給ひてくだり給へり。こはいかにとよ。何とて尋ねいたりたるぞや。都のかたに何はざの事の要か侍るら

ん。今は天命をはなれてかくて侍らんとこそ思ひとりたれと。の給ひ侍りしに[illegible]申すまでにもをよばず。[illegible]の[illegible]せきかねて侍り。其の夜は[illegible]の[illegible]に侍りて何となく[illegible]とも申し出でて。互に袖をしぼりて。さて有るべきにも侍らざりしかば。泣々別れ奉りき。公家にも用ゐられ寺にもおもんじ奉りて。よろづ[illegible]して。いまそかりしかば。さきにはいまそかりとも。大方にてこそいまそかるらめ。わきて身にしむまでは。後の世の事おぼし入り給はじと。此の日比は思ひけがしたてまつりけん事。浅増しきともおそろしきわざなるべし。げに何と有るやらん。高位に昇り給ふ人は。いかにも情のわりなく。道心などもいまするぞとよ。ゆたかなるべき人すら。加様にこそ浮世を遁れて。人もなぎさのほとりに行きて。立つ浪吹く風に付けて。無常をも観ぜさせ給へるに。何をするともなき。つたなき人の。いたづらと有るまゝに。其の事となき一鉢をかまへ。あるまじき事のみを思ひて。ますます我慢のきづなを。多く我が身に付けて。此の身をのみ愛するわざ。むうしと云ひても。誠あまりはおほかるべし。されば閑かに思ひめぐらし給へ。昔繁昌有りし人も。今は衰へ。昨日めでたかりし事も。今日はやつれ、あすか河(二)の淵は瀬になり。瀬は又淵になり。木草もおなじく。かれ野の原となり。山もかれ海もあせぬる世の中に。きはまりてあやうき身をもち。何のいさみがあればか。造作みよしと思はん。いとおしく悲しき妻子も。そひはつべきにあらずつるに。別れの期あるべし。たとひ百年が間。命を保ちて侍るとも。別れの悲しく。命のおしからん。おしなべていづれもひとしかるべし。さて心とかゝるうき世にとゞまりて。かなしみうつる事をなどうらしと思ふ事のなくて。昨日もすぎ今日もくれて侍らん。朝にもきえずして夕に及ぶまで命の長らへ侍るをば。げに不思議と思ふべきに。いつまでもあらんずるやうにのみ思ひて。後世のわざをば露ばかりも思はで。いかゞして。夕の煙を立て。命を繋ふるたよりのあらん。東西にはしり廻る事。げに思ひ入れて見侍れば。哀れにも侍るかな。

〔一二〕 播州阿闍梨[illegible]事

昔三井の寺僧にて。(一)播州大阿闍梨と云ふ人いまそかりけり。智行共に備はりて。月輪観をこらし給ひけるには。彼の庵の松の木の上に。明静なる月のあらはれ出で給ひて。まのあたりおがまれ給へりけるとかや。此の阿闍梨道心深くして。(二)昔大師の御法とき給へりける。(三)霊鷲の深山。(四)跋提河などの跡ゆかしく覚え給へりければ。日数へてわたらんずるいとなみ侍りけるには。我れもともなひ奉つらんと云ふ人。五十余人に及びけるが。播州明石の浦までは。余人に落ち失し給へり。筑紫にては皆帰ち給ひて。たゞ阿闍梨と心証公とばかり二人になり給へり。(五)宇佐の宮に詣でて。権現の御あはれを掛けさせ給へと祈り給ひけるに、神明中天竺の仏法は時なし。(六)震旦日本は此のふしど。白[illegible]

は草のみ茂れり。塔婆もはげしく。仏像も昔に似ず。仏法すべてかたなし。露ひとまれとぞ仏前侍りける。仏法の衰へにける事を悲しみて。霊鷲山も心なく共れより隠り給へりける。げに心憂き事かな。我が身のまいらぬまでも。昔仏法とかせ給ひし所々の仏跡も。盛んに侍りと聞く世ならばたのもしく侍るべきを。霊の御山もあせ。白鷺池も草しげり侍らん。いとゞ悲しく覚え侍り。昔玄奘三蔵の渡天し給ひて。あまねく百卅ヶ国を廻らせ給へりけるに。大乗仏法の国は。僅に十五ヶ国とこそうけ給はり侍れ。それだに今はうせにけん。哀さやるかたなく侍り。人の心の浮雲に迷しくかくれずる月とこそ。常在霊鷲山の心をば。歌にも読みたれ。げにかくはて給へるかとよ。今更かなしく侍り。されば日を経て仏法はかなくこそならめ。法性の月にほのめきて。僅にかゝげる時。いかにも生死の家を出るはかり事を。めぐらし給ふべきや侍らん。

〔三〕永朝大僧都遁世の事

昔山階寺にやむごとなき智者にて永朝大僧都と云ふ人侍りき。法門を明にせりとぞ。世をそむく心ふかくして。寺のまじはりうるさく覚えて。三輪の辺まで至り侍りけれども。本意ならず侍りて人にもしられ侍らず。かきけつがごとくして跡を晦くし侍りければ。弟子どもさはぎ悲ひて。あそこ爰。求め尋ねけれども。更にみえ侍らず。かくて月日を重ねければ。弟子共も云ひかひなく覚えて。ちりぐに成りぬ。此の僧都遠江国木曽と云ふ所に落ち留り給へり。或る時は山深く迷ひ入りてつねなき色を身に染め。或る時は里に出て。徒なるひなのすみかの戸ぼそに立ち寄りて。水をくみ。薪を取りて。與へなどぞせられける。いかなる由ある人やらんといへども。世間のかたには。もてはなれたるさまをぞふるまひ給へりける。玄賓の昔の跡に。露もかはる事侍らず。山田を守るわざはいかゞ侍りけん。つぶねとなりて人に随ひ。みなれ棹さして。人を渡すいとなみは。めづらかなる事にも侍らざりけるとかや。何わざに付けても。いかに心のすみていまそかりけん。世のまじらひのうるせかりければ。一乗菩提によりて跡をかくして。世の中のことくさをせしめて。いきとしいける類を哀れみ。慈悲し給ひけん。いとゞありがたく侍るめり。凡そ此の人の有様。物さはがしきをもわび給はず。人にまじれる事をも。止め給ふにはあらざりけるなめり。しかあれば何とて。つぶねともなるべき。只山深くこそ。おはすべけれ。心のすみなん後には。何すぢの人にまじはるとても。何か塵ばかりもけがるゝ心侍らん。まづしきを見ては歎き。とめるを見ては悦び。愛著の思ひだにも心にわすれぬる上は。其の外の事あに悩みべしや。此の僧都の難行苦行の有様。いかゞ侍りけんと。いと床しく覚ゆれども。其のおはれる所をしらず。「今は何の浄土にかいまそかるらん。誠にしのばしくこそ覚へ侍れ。

〔四〕大和三郎重宗[illegible]心の事

昔頼義が郎等に大和三郎重宗と云ふ者侍り。むらなき高の者にて侍りけり。朝夕に具して戦(一一)をせめける時多くの者を殺したりける罪を思ひて。常には心を澄して念仏をぞ申し侍りけり。かくて年月をすぐす程に可然宿善にや侍りけん。日比つれたりける女。さしもの事もなかりけるに。けあしく腹立ちて嫉妬のほのほおびただしくたきあげたりけるを見て。けうとく浅ましくて。何方ともなく紛れ出て手自ら髻切りて修行しありきて念仏し侍りけるなり。道心につよかりける心なればにや。道心よぎりなく見え侍りけるなり。あちこちさそらへ行きけるが。こし路の方に落ち留りて。人も問ひこぬ山中に。僅なる草の庵を結びて彼に跡をしめてけり。賤たるあさの衣のまどをなる(一三)外には。露ばかりも物も侍らざりけり。明暮の食事。人の哀れみにて。とかくしてぞ過しける。或る時人の食を持ちて行きたりければ。今日より五日はさしな入りたまひそ。ちとつゝましき事侍ると云ふ。さうなりと事うけして約束のまゝに。五日はさしも入り侍らず。かくて五日すぐるやおそきと六日の朝かの所に行きて見ければ。西にむかひておはりけり。そのすがたいきたる人のごとし。誠に勝れ有かりける事には侍らずや。道理をわきまへる人すら。此のかぜ(一四)ぎはさりやらぬわざなるを。思ひわりなき身にて。嫉妬を厭ひて。すみなれしさかひをすてゝ。山深く思ひ入りつらん心ばせ、いとゞたとへもなくぞ侍る。大方厭離穢土欣求浄土と説かれ侍れば。心だに澄みなば。何の所も浄土ぞかし。しかあれども。何の所も浄土にして。なしかはなれと。見だれやすき心の澄みがたきには。悪しき事。あしき友に合ひなんには。何とてか離れざるべき。我は不退と念じ侍れど。人の故なく腹立には。又我も腹立る事にこそ。然らば是をふり捨て。知らぬ所にも行くべきを。心よはさの故はこゝ化市と思はねど。我れときざせる思ひうせやらで。過へぬに。思とりけん心なれば。何とてかは。仏の御心にもそむき奉るべきと。むかしの跡を思ひやられば。唯今もさる心のつけかしと思はれて。恥しげにところせくまで侍れば。「たすけ[illegible]」[illegible]のちからやらんと。いとゞ貴く侍る。

〔五〕内記入道寂心の事

中比内記入道寂心(賀茂忠行の第二子、陰陽博士保憲の弟、大内記で池亭記の作者)と云ふ人いまそかりける。朝に仕へしそのかみより。心に慈悲深くていきとしいける類をば。哀れみ給へるわざ。父母の一子を思へるに過ぎたり。有る時は道よの食物をいとなみて。常にかはれける犬に給ひける程に。外より異犬の来て守りければ。又同様にして給ひけるに。此の犬どもの一つゐの餌を論じて。いかみけるを見給ひて。是を悲み給ひて。やらいしに仰せの如くおはしける。其の御心はやく〳〵改め給へねとて。さめ〳〵となき給ひけるを。(一五)[illegible]御らんじて。只人にてはおはせずとぞの給はせける。此の心ばせのおはしまし

ければ、つゐに出家して、往生の素懐をとげ給へり。哀、貴き心かな。何とてかすゞろに、[illegible]の大海の波へおはしけるやらん。何さま仏のいとをしく哀れなるは、[illegible]の妻子をあはれむなる心には大に異なるなり。内記入道の、妻の別を悲むは、[illegible]の大悲の誠けれは、心の底もすみ[illegible]て少もたかはず。菩薩の御心なるべし。世間の妻子をあはれむは、[illegible]なれば、心大に迷はされて、永く三途の苦果をきざすなるべし。哀れむらき事かな。同物をあはれみながら、[illegible]する事を所詮は本覚[illegible]、何をわけてか替しとみ、何を取りてかいとをしと思はん。いとほしにくしと思はれん物、本来なければ思ふ心も侍らじ。はやく[illegible]の思を捨てばやとし侍ると、ゆがみし心ためがたく、はやく大悲をおこさばやとおもひ侍れと、心のむら雲きへやらで、[illegible]の月あらはれずしてやみなんにや。一度発心して山深く尋ね入りて心澄まさんよりも、大悲のふかからんはまさりてぞ覚ゆる。

〔六〕[illegible]僧正[illegible]の事

中比比叡山[illegible]の[illegible]にて、[illegible]正と云ふ人なんおはしけり。[illegible]の人に勝れたるのみにあらず、大事の風情をきはめ侍る。[illegible]は身を[illegible]にひそめて、心を[illegible]にすましめ、[illegible]は花の下、月の前により居て、[illegible]を[illegible]にやはらげたまへり。[illegible]がね[illegible]の花のさきそめ、[illegible]の[illegible]の里なれしより人の前は、みな心もそらになるをおもひやりて、[illegible]めいましけむ。いとゞ[illegible]くぞ侍るべき。或る時[illegible]る友達の僧の来て、いかに此の[illegible]は、[illegible]の跡には侍らずやと、問ひたてまつり侍れば、なじかはしかあらん。[illegible]心ぞすみ侍らめ。[illegible]の風情をも詠みては、[illegible]が心に[illegible]すれば、[illegible]の前こゝに[illegible]かれぬ。もとより心の外に[illegible]なし。只心のいつはれるなり。おのが心をさはがして、なにと[illegible]の跡とはの給はするぞ。いとゞ無下に侍るといはれて、[illegible]してのきにけりとなん。只[illegible]の[illegible]に[illegible]りいらぬ心すら、[illegible]の[illegible]にたづさはる[illegible]は、心の[illegible]にて、[illegible]も共に[illegible]るゝに、[illegible]の[illegible]に思ひ入りて[illegible]めとられけん。[illegible]山[illegible]くぞ覚える。[illegible]は外になき[illegible]を、いつ[illegible]れやりて、[illegible]のけんけの出来て、[illegible]める月をみんずらんと、いとゞ心もとなくぞ覚え侍る。さても三十七[illegible]、[illegible]とかれたるを聞く時は、やがて[illegible]のうちをひらきて、[illegible]をおがまんと思ふ心のつき侍りしをはかなき凡夫の[illegible]、あに[illegible]を[illegible]し奉らんやと覚えて、[illegible]りて[illegible]の心をあざけりて、今日もすでに暮れぬ。

〔七〕[illegible]の[illegible]の事

中比[illegible]に、いづくの者と行末も知らぬ僧のつたなげなる侍り。富士の山の奥に、けしかる庵を結びてやすみぬる[illegible]どとはし侍りけるなめり。[illegible]は[illegible]をも[illegible]はず。[illegible]はこゝも[illegible]をもいはず[illegible]

にまとひそこはかゝなきすゞろ事打ち云ひて。狂人のごとし。しかあれどさすがなる心侍りて。思ひ解けぬ様なる事なん云ふ時も侍りけり。或時修行者。なすべき事侍りて京都に思ひ立ちて。なる(一九)みがたを過ぎられ侍りけるに。此の僧よりて物を乞ひけるを。いかさまにも。うちやりの乞食にしもは見へずとて。対面へる折節によびすへければ。言ばかりだにはゞかるけしきなく。座に付き侍りぬ。此の家のともの者も。其の里の旅もめづらかなるわざかなと思へり。やゝ物語きこへて後。さても実の発心。一言語らけたまはらんと聞えけるに。此の乞食うちわらひてかく。

なるこをばおのが野風にゆるがして。心とさはぐ村荻かな

と詠みて隠れさりぬ。跡あへなく覚えて。人をわかちて尋ね侍れど。いづ方へかいましにけん。跡だになしとぞ。げに村荻のおのが野風になるこをゆるがして。なる音にさはぐなる様に。心がとにかくに。思ひ付く物をわけ置きて。かへりて是にまよふに侍り。此の歌は唯識を思ひ入りてよめるなるべし。いとゞ貴く覚え侍る。さても此の歌のつるの(二〇)有様を不知。いかなる三山ふかくすみて。唯識の観をこらし給ふらん。かくれたる徳あれば。あらはれたる徳あり。徳をかくしかねて。又いづちとらしらぬ方に思ひ給ひにけるやらん。さも床敷かりける人成りけんかし。

〔八〕中納言の局小倉山の麓に住事

(二一)待賢門院に中納言の局と云ふ女房おはしましき。女院におくれまいらせられて後。さまをかへ(二二)小倉の山のふもとに。行ひすましておはし侍りきとうけたまはりしかば。長月の始めつかた。かの庵室にたどるたどるまかりにき。「草ふかくしげりあひて。行きかふ道も跡たえ。お花くず花露しげくて。軒もまがきも秋の月すみわたり。前は野辺。つまは山路なれば。虫の音物あはれに。あい鹿の涙に心すごし。前の上風松にかよひ。松の嵐ねやにおとづれて。心すごきすみかに侍り。さてかの局に対面申したりしに。初の程に。浮世を出で侍りし初めつかたは。女院の御事の。常には心に懸りて。実いかなる所にか。いまそかるらんと恋しく覚え。一族の人も恋しく覚へて侍りしかども。いまはふつに思ひわすれて。露ばかり歎く心の侍らぬなり。さすが行ふかひ侍ればや。恩愛の心に忘られぬるなるべし。おろかなる女の心だにもしかたり。年久しく世を背き。実の道に思ひ立ちて。月日重ね給ふ。そこの御心の中。いかにすみて侍らんとぞの給はせし。ありがたかりける心ばせかな。誠に恩愛心にわすれぬるは。則ち菩提(二三)なりと。昔の智者の詞なれば。いかにも是を忘ればやと思ひ侍れど。やゝ心と心に叶はでとめやらぬに。此の局のわすられけん。げに此の世一の智者にもよも侍らじ。二三四五の佛の御前にて。多くの智者をうへ給へるか。聊かの縁によりて。おひ出でぬるなるべし。我はつたなしといへども。世を背く事も。彼の局よりは遙のさきなり。又抔べて名利を

おもはず偏へに佛の御にこそ思ひ侍れども。はや我の思の心ばせにも。おとり侍りぬるはづかしさよと思ひて泣る袖すから。又案ずるやうは。はづかしと思ふこそ。名聞の離れぬなれと思ひよりぬ。思りて心を持ちたつれば。さては又いかゞせんと思ひかねて。小倉山を出で侍りぬ。其の後三とせ經て彼此の所にをもく煩ふよしうけたまはり侍りしかば。訪ひも聞えんとて罷りたりしかば。はやいき絶りにけり。西に向つて掌を合はせ。威儀を亂さずして終りにけり。名聞の心に離れたりと侍りしは實にて侍りけりと。思ひ定めて泣々歸り侍りにき。

〔九〕西山の僧都大寺殿へ不參の事

近比西山のふもとに。かたのごとくのいほり結びて。只獨居たる僧侍り。身にまとふ。あさの衣の外は本尊持經より外は。もたる物なければ。夢にも人の主にしられて。おかす事もなし。經文をしれるよしを示さゞればをのづから尋ねくるわざもなく。いづくの人としられねば。語らひ寄る事もなし。いかにしてかは此の命をもさゝへけんといとゞおぼつかなくぞ侍り。此の事世の中に。かゝる僧侍ると沙汰し侍りけるを。徳大寺の大臣の。いでやいかなる僧ぞ。めせとてめさるゝに。參る事をだにも申されざりければ。[illegible]あやなくおぼへて。此の由を申すにいかさまにも様あり。たゞめしてまいれとて。かさねて人を遣はされけるに。此のすみかをば引きたてゝ。跡かたなくぞ成りにける。さてもとの内をひらきて見れば。そばの柱にかく。

　過ぎ行きし方もくやしく跡の跡を。我が身とて何たどりけん

と書き付けて跡かたなく見へず。此の歌の心を。おろ〳〵心得るに。此の歌は此の心を。我が身とてたどりけんをくゆるなるべし。すべて何ももたらざるに。よしなきかりその身を助けて。我が身をこゝに置く故に。心にもあらぬ事を聞くことの。六借しさよとよめるにや。此の人はいかに心のすみていまそかりけんと。何もなくば。何とてか塵ばかりの執もとまるべき。山ふかくすみて心に執だにも侍らずば。なにとてかすまざるべき。心のすみゑぬは。妻子眷属のためなり。是をみては貪し。彼をみては嫉妬すれば。心やゝ亂れて。まことのさとりはをこらぬとかや。それに我が身の外には物をもたで。僧のすみかをさへ。くやしむ僧の心ばせ。げにさぞいさぎよかりけんと。げに〳〵淑山敷くぞ侍る。さても此の人は。よも文殊の心をも結びていませし。何の山林。いかなる所のほとりにやいまして。ほいのごとくおはしけんと。行きしかたいとゞ床しくぞ侍り。あはれちかきほどの事にて侍らば。さすが世の中は。天より外のしたはあらじなれば。尋ね尋ねて。いささかの緣をも結びなんとおぼへてこそ。

〔十〕[illegible]の[illegible]を[illegible]事

昔叡山に静観僧正の御弟子に。[illegible]阿闍梨[illegible]と云ふ人いまそかりける。智恵のさかしいみじく。又顕密の学問に侍り。住山の折節。多ふかく積りてあまた重ぬる[illegible]すら。[illegible]さむみ身にしみ。床に霜たたへてさむさ。たへがたかりけるに。いかに乞食どもの。かた[illegible]も無き者で。大にひえいねけん。さこそたへ難く侍るらめと。思ひて。慈悲を発して有りとある物をさながらひつさげて。ひとつつあたへんと思ひて。尋ねありかるゝ程に。[illegible]の小袖を四人に施すほどこして。我がきのまゝの。小袖一領一をきてかへられけるに。谷の方におめく声のきこえければ。何なるらんと哀れに覚えて声を尋ねており下り侍るに。うばら足にかゝり。おどろみをまとふ。かゝる所にはさて。何ものなれば有らむとおぼえて。いとゞ急ぎいで侍りける。からくしておりたれば。[illegible]のやれたるを。[illegible]に[illegible]ばかりて當てて。物いはずなきけり。阿闍梨手をとりて。いかにくとの給はするに。此の上の坊のきはにいねて侍りつるが。此の寒さに。あちこちねなをらんとし侍りつる程に。落ちて[illegible]よりちかきて血多くあへて痛く。いたき事なのめに侍らずと云ふ。げにもと哀れに覚えて。我が小袖をぬぎてきせければ。同じくは其の[illegible]をもきせ給へと云ふ。いとやすしとてきせられ侍り。我が身はさばかりの寒さに。ひたはだかにて。乞食の手を取りてぞおはしける。かくて夜半もあけんずれば。なだかなる有様。[illegible]明けぬさきに帰りなん。さて人をおこせんとの給ひけるに。此の乞食

いやくふつと思ひ侍らず。かへり給ひなば。我を[illegible]にし侍るべしといへば。さこそ心細く思ふらめと思ひて。[illegible]になきおはする程に。はや山の端しらみて寺々の鐘の声も聞へけり。此の乞食さらば我を負ひて。此の上へこし給へと云ひければ。かうごしておいこしぬ。坊におろし給へねと云ふを。いたむ所やあらんと。やおらおろして見返り給ひたれば。[illegible]の行ふるし奉りける。十一面観音に。我が小袖をきせ奉りてげり。こはいかにと思ふ程に。目もくれて手を合せ。涙をながして。[illegible]をいだき奉りてげり。所は山のふもとゝこそ思ひしに。我が住所にて侍りけり。やがて三井寺の[illegible]の坊にぞ置きたてまつりける。あはれ貴く侍りける事かな。[illegible]にておはしまさずは誰かはかくばかり慈悲ふかゝらん。慈悲は諸仏の根本[illegible]の種なり。若し此の心なくば。一紙の功徳更に立つべからず。[illegible]しぬれば。[illegible]いたづらにほどこすとは是なり。しかれば誰も此の心を。おこさばやとこそ思ひ侍れど。[illegible]の[illegible]ちに来るとき。杖をとり。はをくひしばる声もげに力なき事に侍り。しかるに此の[illegible]すずろに無縁の大悲の起りけん。殊に貴くぞ侍る。さればこそ観音の。其の[illegible]をかゞみおはしまして。[illegible]は重き衣を化し。終には本の[illegible]を顕し給ひけん。げに世の末には。有るべきとも覚えぬ事也

〔十二〕 [illegible]僧正の事

「其の比[illegible]とて、山階寺の[illegible]にて、年久しくなる人いまそかりける。[illegible]にたけて、徳に[illegible]をいとふ[illegible]深く、本寺を離れ、近江國、志賀の郡にたより、[illegible]き所にかたのごとくなる庵を結びて心を澄ましていまそかりけるなり。人の中にし侍れど、前は[illegible]、後は山[illegible]にて、[illegible]ちて[illegible]になかれ行くさまなんども、よにめづらかに侍るなりけり。其の近き[illegible]の人は、此の[illegible]をぞくみけりとやらん。[illegible]などの、水くむとて、何となきそぞろ歌をうたひ、[illegible]ともなき事をなんいひつゝくみ[illegible]る中に、或る[illegible]の[illegible]す。此の庵の内に貴げなる[illegible]のおはしけるぞと云ふ、すゞろ事な聞えそとて、其の後人多く[illegible]りて、見おがみ侍りければ、「我が本寺を離れ侍りし事は、[illegible]を[illegible]して心の[illegible]をすまさんとて離れしが、又爰にて[illegible]れけりと、本意なくて、いづちともなく、迷ひ行き出でて、[illegible]へにつたなきさまをしてぞ、さそらへあるかれける。宇津の山邊にふかくわけ入りて、[illegible]ひすましておはしけるとかや。時々里に出て、袂をひろげて物を乞うては、山中にいりくぞし給へりける。或る時人のあやしみて、山へ入り給ひけるを見隠れに見ければ、[illegible]にふかくわけ入りて、水のきよくながれたる河のはざまに、[illegible]に[illegible]ひてねぶるがごとく、合掌してぞ居られたりける。里に入り侍りける[illegible]、しかくと人々に語り侍りければ、[illegible]の[illegible]む者にこそ、しかあらば[illegible]をばいかゞし給ふべきとて、そのそのまるべき[illegible]に、[illegible]をつくりて、[illegible]のごとくの[illegible]に、[illegible]も[illegible]ひ[illegible]へんと[illegible]して、又彼を山に入れて、此の事かきくどきくわしく聞えれど、[illegible]もし給はず。やゝ久しく[illegible]へて、此の[illegible]りて、しかくといへば、さうなり、うるせき人まこそ侍らめ。[illegible]にも[illegible]ひつれて、かくといはんには、などかとて、あすたつれて行きたるに、見へ給はず。こはいかにとて、手をわかちて、山をふみあさり侍りけれど、つゐに見え給はず。かくて其の後[illegible]に[illegible]て[illegible]、其の里人[illegible]ずべき事侍りて、[illegible]の[illegible]を[illegible]ぎけるに、此の[illegible]に[illegible]りてひそめきあるかれけり。こはいかにと尋ね聞えければ、[illegible]をふりて、おしのまねをしてものを云ふ事なし。[illegible]て見付けて[illegible]れば、又[illegible]のかたへさそらへ行き給ひけるとなん。されば[illegible]は[illegible]れなる事かな。

むかしは山階寺の[illegible]として、三千の[illegible]にいつかれきといへども、今は[illegible]の[illegible]に交りて、其の[illegible]を[illegible]し給ふ事、百千萬の[illegible]を[illegible]し[illegible]づるもよしなし、心ひとつすまずば、いたづらにやはどこさん。「只[illegible]をさます心のみこそ[illegible]の[illegible]ならめ。[illegible]を[illegible]り[illegible]をたてんよりも、心を[illegible]にすまさんこそ。げにあらまほしく侍れ。[illegible]よりおこる[illegible]心なしかはさむる時あらんと、いとゞ貴くぞ侍る。一[illegible]と[illegible]くは、さりともと[illegible]もしく覺え侍る。さても此の[illegible]は、つたなげなる姿にやつれ、又大和國に[illegible]りて、「三輪のふもとに東に向ひて、南無[illegible]日大明神とて[illegible]るがごとくして、おはりをとり給へりと[illegible]には[illegible]せ侍り。[illegible]心のふかきと云ふには是なり。[illegible]心のまゝなりし中に侍らば、[illegible]ばかり[illegible]もなかりけれど、實の心のおこりて[illegible]かのさかひに[illegible]りて、或る時は人もなぎ

その[illegible]にしほたれ、或る時は山水をよく心をすまし、或は市に出でて[illegible]。おしのまねをし、或は[illegible]をすすめて、あまねくいきとしいけるたぐひを利せられけん。自利[illegible]の行、ことにやんごとなく覚え侍り。

（十二）[illegible]の[illegible]心の事

[illegible]近江國に[illegible]侍りき。[illegible]ゆたかにして、[illegible]には[illegible]のうまき味をととのへ、[illegible]には[illegible]のよき[illegible]をつくして、[illegible]てともしき事侍らざりき。しかあるに[illegible]の子をなん持ちけるが、[illegible]におかされて、[illegible]をつくし、[illegible]を[illegible]めしかども、[illegible]しるしもなくて、つゐにはかなくなりにき。父母かなしぶこと[illegible]に過ぎたり。さこそは侍りけめ。かくて五[illegible]くすぎて此の父おもふ事[illegible][illegible]なかりけるは生死かな。[illegible]の[illegible]さらに身をささゆる[illegible]に[illegible]侍らざりけり。しかじ[illegible]に入りなんと思ひて、[illegible]にいとまをこひ、やがて本[illegible]切りて、いづちともなく迷ひ出でにけり。[illegible]に入る時は、木の葉のめぐみ散るに付けて、[illegible]の[illegible]をなし、[illegible]のほとりをすぐる時は、生死の[illegible]の[illegible]を[illegible]へり。かくて[illegible]に、[illegible]を[illegible]れて、[illegible]の[illegible]しどと云ふ所にて、[illegible]ひ、[illegible]をあはせて往生し侍り。さもうらやましかりける心かな。[illegible]よりも、[illegible]の[illegible]をむさぼる心侍りとて、[illegible]りて[illegible]をあだとして、[illegible]を[illegible]る[illegible]とし侍りけん。[illegible]には[illegible]ずや。[illegible]と云ふ事は、[illegible]の法にもあらざれば、[illegible]かしらざる。[illegible]の[illegible]易き。[illegible]のあだなるとはしりあれど、おろかにして[illegible]をしらず。定めなき世とは思ひながら、[illegible]の[illegible]のふかくおこりて、[illegible]はざるに侍り。「これ[illegible]の[illegible]をきかん時は、くやしかるべき[illegible]を。はやく[illegible]も、うき世をいとふ[illegible]へねとなり。さても[illegible]のそのかみは、[illegible]に六[illegible]の[illegible]を[illegible]びて、月の[illegible]は[illegible]の[illegible]のほとりにたたずみて、しづめる月をみ、小野のしのはらに[illegible]りては、[illegible]のやどりの、しげき[illegible]を[illegible]め、花の[illegible]は[illegible]の[illegible]とともにそびきて、[illegible]し[illegible]し侍りき。かくても[illegible]かすみかをしめをきて、[illegible]子をあはれみて、すべて世のはかなき事をしらざりき。あにはかりきや、かかる[illegible]行の身となる事は。今は[illegible]の、[illegible]を[illegible]めても、[illegible]は只心にかへりて、[illegible]を[illegible]るたよりとも侍れば、[illegible]られしく侍り。

（十三）江口の遊女の事

「[illegible]二[illegible]月の比、[illegible]とともなひて、[illegible]へおもむきしに、さしていづくとしもなきままに、日のかたぶくにもいそがずして、江口[illegible]など云ふ遊女がすみ家見めぐれば、[illegible]は[illegible]の岸にさしはさみて、心は旅人の、しばしの[illegible]を[illegible]ふ[illegible]に、さもはかなきわざにて、さてもむなしく此の世をすぎりて、来世はいかならん、一[illegible]の遊女にて有るべき、[illegible]の侍りけるやらん、[illegible]のしば

しの御身をわたらんとて。御の大にいましめ給へる歎をするかな。我が身一の事は。せめていかがせん。多くの人をさへ引具ぜん事いとうたてかるべきには侍らずや。しかあれども。我の光明土の中に。多く往生をとげ。諸人の物の命を断つものの中にあつて。終にいみじき侍りしかば。さればいかなる事ぞや。前世の宿行によるべくは。なにとてか今生にかかるうたてき所行をすべきや。又此の世のつとめによるべくは。あにかれら往生をとげんや。是を以て明に思ふに。只心によるべきにや。諸の命をつがんとての。謀り事に侍れば。心にもあらず。是に更り。我れにともなへども是に心を染さず。我れに心をしめて。常に後の世の事を思はん人は。口に悪しき言葉をはき。手にわろき業振ひ侍れども。心うるはしく侍らんには。さうなりけるにや侍らん。我る事と打語りて。其の里を過ぎなんとするに。多を侍ちえず。むら時雨のはげしくて。人の門に立ちやすらひて。内を見入り侍るに。あるじの尼の。時雨のもりけるをわびて。板を一ひらさげて。あちこち走りありきしかば。何となくかく。

しづがふせやをふきぞわづらふ

とうちすさみたるに。此の尼さばかり物さはがしく。走りあわつるが。何とてか聞きけん。取りもなげすて

月はもり雨はたまれとおもふには

と付け侍りき。さも事に聞えて昵びこしがたかりしかば。我の庵に一夜とまりて。上句など侍りて。あかつきがたに此のつれたる。何かく。

心すまれぬ柴のいほかな

と付け侍りたるに。あるじ又。

露のみおもふかたとはいそがれて

と付け侍りし事の。げに涙をこがして覚え侍りき。六十餘州さそらへて。多くの人々見なれしかども。是程のものかくまでなさけは。えたる事は侍らざりき。真れおのこにしあらば。とかくこしらへていざなひつれて。うへをなぐさむる友にもしてなん。いとどなつかしくぞ侍りし。此のつれの歌は立ち出づる涙すがらも。さも聞しき。江口の尼かなとぞ申し侍りし。

〔十四〕 鷲峰并宇治谷の事

「鷲峰の跡は。是は山深く走り。前は海右は野。右は深谷なり。東の野の方に。清水きよく流れたり。是をみたらしと云ふ。社三所におはします。又すこし東の方に引きのきて。南北へ三十三町。東西へ二十五町の堂舎作り。しほのみつ時は我の鳥居の下まで海になる。[illegible]

時は。白すなご五十町ばかりなり。しかあれば[illegible]の[illegible]したる時まいれば。[illegible]にて[illegible]まで[illegible]るなり。けだかくいみじき事。たとへもなく侍り。[illegible]しいかなる[illegible]やらん。[illegible]の上に[illegible]の[illegible]を[illegible]けまいらせで。[illegible]より下にかけまいらするなり。[illegible]の[illegible]は[illegible]にて[illegible]すなれば。かくはならはせるやらん。大方は[illegible]は山上にあがり。[illegible]は平地にあり。[illegible]の三方晴れ[illegible]りて。[illegible]に心もすみ侍り。前にししをからざれば。[illegible]山には[illegible]を本に[illegible]ち。[illegible]なれば[illegible]の[illegible]に侍り。何心なき人も。此の御社にては。心のすむなるとぞ申し伝へて侍り。[illegible]の[illegible]の[illegible]と申すは。[illegible]の男山の[illegible]にたがはず。「[illegible]山西方に[illegible]りて。[illegible]心すごく。[illegible]のこゑ[illegible]に[illegible]しなる所なり。山のそびへるすがた。木の生ひたる[illegible]。[illegible]に[illegible]山かと[illegible]ふ。中にも[illegible]あり。みたらゐとは是ならん。何わざに付けても心すみぬべき御社なり。[illegible]上人にむかひて。[illegible]をあらはし。[illegible]大師に向ひて。[illegible]を[illegible]べさせましくけん。[illegible]出して。[illegible]いよく所せきてぞ侍り。かくて西の国は。[illegible]かみさきまで修行し侍りき。それより[illegible]りさまに。[illegible]と云ふ所を[illegible]侍りしに。[illegible]大十にたけたる僧の。かみはくびの[illegible]までおひさがり。きる物はかたのごとくきなし。[illegible]にもかけず[illegible]。やせおとろへて。かほよりはじめて足手まで。(三〇)どろかたげなるが[illegible](三一)らをすりてひをすまし。うそうちふきて。人に目も[illegible]けぬ僧一人侍り。ことざまありがたく覚えて。近く[illegible]寄りて。何わざをしたまふにかと。[illegible]侍りしかば。[illegible]するなりとの給はするを。それはしかなり。[illegible]いかに。[illegible]に[illegible]く侍り。心のはるけぬべからん事。一[illegible]の給はせよとせめしかば。[illegible]一心。生死[illegible]とて。其の後は又の給はする事もなくて。にげ去り給ふを。なを[illegible]しく侍る。と[illegible]をこぼしてもだへしかば。[illegible]とて。[illegible]に[illegible]さり給ひぬ。[illegible]く侍れ共かひなし。其の[illegible]人に。此の[illegible]の[illegible]を[illegible]しく[illegible]ね侍りしかば。[illegible]人の[illegible]りしは。いとき[illegible]もほしからず。[illegible]たるをも何とかし給ふらん。[illegible]なくうしなひ給ふ。[illegible]さらをすりて。[illegible]うた打ち[illegible]ひてなん。あちこち[illegible]ひありくに侍りと答へ侍り。げに[illegible]心ふかき人なめり。かほの[illegible]よりうちの心まですみてぞ覚え侍る。げに一心と知りなん後は。何とてか生死には(三二)[illegible]し侍るべきと。[illegible]く覚えて侍り。其の[illegible]にも。かかる[illegible]心ある[illegible]もいまそかりけり。

(十五) [illegible]の事

おなじ比。ならの京に[illegible]して。春日の御社に参り侍れば。春日野のけしき二葉の若菜。[illegible]しの[illegible]を見るところにふみけん。[illegible]のゆかりあれば。すみれつむなるをきき[illegible]。玉ざさの上には。[illegible]あられつもり。ひろは[illegible]もかた[illegible]の。松のみどりは[illegible]のために。千代の色をやこめつらん。立寄りとりてみんとすれば。[illegible]の下[illegible]に[illegible]つる[illegible]は[illegible]なり。お[illegible]くす[illegible]。[illegible]ちりて。山立ちの

ぼる月かげの。千里をかけて照すに。入道して〓〓お。十りさけみけんことの〓〓び出でて。〓〓に〓になん。〓くわけ入れば。〓〓〓くしげりて。穴の〓まれたる。穴の〓のちまたにこれをさせり。〓しき〓〓ならん。〓〓の〓をすぎぬれば。〓〓も〓く〓行きぬ。〓の〓〓三の〓。二〓の〓〓そばだてり。より〳〵〓〓にただすめば。〓〓〓〓分の〓すごく。しば〳〵〓〓にますらへば。〓〓〓〓の〓たえもせずぞ侍りし。〓き〓〓に〓べがたくぞ侍る。かくて〓〓の住み給ふ〓〓〓の〓に〓ねまかりて。何となく〓〓〓し侍りしかば。いかなる〓の〓〓たると〓ひ給ひしかば。〓〓〓〓〓に。かたのことく〓を〓び侍りしにかく。

〓〓に〓〓いとはん〓もがな。くやしく〓〓しむかし〓らん

〓〓〓の〓を〓〓侍りし時。

〓〓の〓の〓〓の〓は〓なれや。〓の〓れ〓に〓わたるらん

と〓ふて侍ると〓ししかば。其のむかしも人にすぐれて。〓ふ〓ひしかども。〓〓げに中〳〵しく〓み出で給ひけりと。〓く〓を〓り侍りき。かゝる〓の〓〓きのよるは。〓〓〓〓くもしげけれども。今は身の〓〓に〓入りぬる上は。かならずしも人のあさけりを。〓みるべきにあらざれば。〓りのまゝに〓〓の〓を〓すに〓り。かゝる〓〓〓の〓ならましかば。〓〓〓り。よろこぶ心も〓りなまし。今はすべて〓〓〓〓えず。ますか〓〓の〓にこそ侍らめと〓〓〓〓り。

〔十六〕〓〓〓の〓〓〓にて人〓〓る〓

〓しき比。〓〓の〓に住みて。月の〓〓には。〓〓〓〓の〓〓ともろともに。〓の上に〓〓〓〓侍りて。ながめ〳〵し侍りしに。此の〓〓になすべき〓の侍るとて。〓なくふり捨てのぼりしかば。何となくおなじくうき〓をいとひ。〓〓月の〓〓をもわきまへらん。

〓も〓しく〓えしかば。おもはざる外に。〓の人の〓を〓〓めて。人に侍りな〓〓。〓に〓〓人のおろおろ〓〓り侍りしかば。其のまゝにして。〓〓に出て。〓をあふ〓ねて〓りて侍れば。人の〓には〓〓りしかども。〓もあしくすべて心もなく侍りき。〓は〓れども。〓〓〓〓のごとし。げに〓人は心があればこそは。〓はとにもかくにもつかはるれ。た〓〓の〓〓べき。はかりことばかりをしたれば。ふきそんじたる〓のごとし。大かたは〓〓に侍るもふしぎなり。〓〓〓をば何とかすべき〓らんとすれば〓〓にやならん。心のなければ〓〓木とおなじかるべし。おもへば人の〓なり。しかしやぶれざらんにはとおもひて。〓〓〓の〓に。人もかよはぬ〓〓にをきぬ。もしをのづからも。人のみるよし侍らば。〓〓なりとやおもおそれん。さても此の〓〓〓〓〓に〓えて。〓〓にいでてかへり〓〓。〓しへさせ〓へりし。〓〓〓〓へまいり侍りしかば。〓〓の〓ふしにて侍りしかば。むな

しくまかり侍りて、伏見前中納言師仲卿の御もとに参りて、此のことを問ひ奉りしかば、何とし
けるぞと仰せられし時、其の事に侍り。広野に出て、人もみぬ所にて、死人の骨を取り集めて、頭よ
り手足の骨をたがへずつゞけ置きて、ひさうと云ふ薬を骨にぬり、(一五)いちごとはこべとの葉をもみ合
せて後、藤の若葉の糸などにて、骨をからげて、水にて度々洗ひ侍りて、頭とて髪の生ゆべき所には
西海枝の葉と、むくげの葉とを、はいにやきて付け侍りて、土の上にたゝみをしきて、彼の骨をふ
せて置きて、風もすかずしたゝめて、二七日をきて後に、其所に行きて、沈と香とをたきて、反魂
の秘術をおこなひ侍りきと申侍りしかば、大方はしかなり。反魂の術猶日浅く侍るにこそ。我は思
はざるに(一六)四条大納言の流を受けて、人を作り侍りき。今卿相にて侍ると、其れとあかしぬれば、作
りたる物も作られたる物も、とけうせければ、口より外には出ださぬなり。其れ程まで知られたらん
には、教へ申さん。香をばたかぬなり。其の故は香は魔縁をさけて聖衆を集むる徳侍り。しかるに
聖衆生死を深くいみ給ふ程に、心の出でくる事かたし。沈と乳とをたくべきにや侍らん。又反魂の
秘術を行ふ人も、七日物をばくふまじき也。しかうして造り給へ。すこしもあひたがはじとぞ仰
せられ侍りし。しかれども無益なりと思ひかへして、其の後は造らぬなり。又中にも(一七)土御門の右大臣の
造り給へるに、夢に翁来て、我が身は一切の死人を領せるものに侍り。主にもの給ひあはせて、

何に此の骨をば取り給ふにかとて、うらめる気色見えてければ、若し此の日記を置く物ならば、我
が子孫作りて、霊に取られなん、いとど由なしとて、やがてやかせ給ひにけり。聞くも不思議のわざ
と覚え侍り。よくよく心得べき事にや侍らん。但し知足院の二子は、天宝と云ふ鬼の、変化のはとり
にて、作り出だせる者と也。伝へたるなれ。

〔十七〕玄三蔵并[illegible]の事

むかし(一八)玄三蔵法をひろめ給はん為に、天竺へ渡り給ひて、遠く百万ヶ国に修行して、若く盛
りなる身を積み給ひけるに、荒涼の御身はひなしく骨のみのこり、白髪には霜たへて年ふかく、顔色
下殿の宇尊はかたぶきて、文字すりくち給はれて、其の跡見えざりければ、釈迦如来の御跡をこ
のぞ。はるばる渡りましませる甲斐もなく、もろこしにて聞く、思ひやりたりしには、御手とな
んの給ひて、是は釈迦如来の末になりぬる事をなげき、是は弥勒慈尊の古に、あはざる事をなかし
みて、天竺の袖をしぼりかね給ひにきと、ほの伝へ聞くに、涙と添えて、多くの涙をおとしき。
大国の御后を恨ぶたぐひは、此の国をこのむ事を友として、はなれん事をおもひて、七日をか
ぎる花の命、あへなき露にきそはるる命なんどをだにも、もだへこがるゝわざなるぞかし。それた
鶏跡をつたえんとて、千年の一劫を見、命を捨て敢へ給へるに、其の御心は誠にはげしくて、無下か

にてらせる月の影もなく。[illegible]は[illegible]さびて。すめる[illegible]もなく。[illegible]とかせおはしまし[illegible]も。[illegible]のすみかとなりし[illegible]。さこそ[illegible]しくおぼされけめ。[illegible]をしのぎ。[illegible]を[illegible]にせる。[illegible]人もいませねば。いよ〳〵むかしのみ[illegible]しく。[illegible]え給へりとなん。しかあれども[illegible]の[illegible]れ。又[illegible]を[illegible]へる[illegible]なれば。[illegible]々[illegible]しく侍り。[illegible]山と[illegible]かれて侍れば。[illegible]にかたじけなくぞ侍る。されば此の大和の[illegible]の[illegible]の太子。[illegible]の[illegible]王とていませしは。すべらきの[illegible]の[illegible]にておはせしが。[illegible]き事にあはせ給ひて[illegible]。[illegible]かざりおろさせ給ひて。[illegible]の[illegible]に入りて。[illegible]王となん申しければ。[illegible]行ならびなくて。三[illegible]をもてあそび給ふのみならず。[illegible]の[illegible]に[illegible]りては。[illegible]の[illegible]の[illegible]に[illegible]の[illegible]をすすぎ。[illegible]天[illegible]の[illegible]にやすみしては。[illegible]一心の[illegible]をひらき。[illegible]大[illegible]に[illegible]ひては。[illegible]をきはめ給へり。かかる[illegible]の人々も[illegible]あきたらずやおぼしめしけん。もろこしに[illegible]り給へりけるが。[illegible]には[illegible]もなしとして。天竺に[illegible]り給へり。もろこしの[illegible]。[illegible]の心ざしを[illegible]れみて。さま〳〵の[illegible]をあたへ給へりけるに。それよしなしとして[illegible]しまいらせて。[illegible]の[illegible]とて[illegible]三つとどめ給へりけるぞ。[illegible]もかなしく侍るめる。さても[illegible]は[illegible]すれど。[illegible]なひ給へる[illegible]王は見え給はねば。もろこしべいさしにも。[illegible]給へりける[illegible]に。[illegible]すきて[illegible]にて。[illegible]かれる[illegible]の[illegible]ひて。くる[illegible]らんとしけるに。[illegible]むにあらず。[illegible]は[illegible]のうつは[illegible]なり。あやまつ事なかれとて。[illegible]にてあはへりけれども。つゐに[illegible]なくくひ[illegible]ると。[illegible]になん[illegible]と侍りけるに。[illegible]を[illegible]めまいらせて。もの〻つかさ[illegible]しぼりにけり。此の[illegible]王もさすが。天竺をむにくく[illegible]ひ給ひけるなんめり。あにはかりきや。にしきのしとねを出て。かざりをおろすべしとは。かけても[illegible]はましや。[illegible]のおどろが下に。[illegible]をさらすべしとは。これ世の中の定なく。はかなきためしなるべし。しかるに[illegible]を[illegible]。[illegible]をおもへば[illegible]として。[illegible]にたがはぬ世なれば。[illegible]も[illegible]むなし。ひそかにゆびを[illegible]りて。古人をかぞふれば。[illegible]もさり[illegible]なるも[illegible]まらず。只[illegible]しき[illegible]をのみ。[illegible]千[illegible]の[illegible]れさよ。[illegible]々として。[illegible]の[illegible][illegible]の[illegible]いと[illegible]に。三の神山あり。不死の[illegible]くありとて。方士をして。[illegible]々に[illegible]を[illegible]りにつかはしし。[illegible]も[illegible]りになり。[illegible]王の入[illegible]の[illegible]にむち打ちて一[illegible]をかけりし。今何れの所にかある。今日くれ明日[illegible]ぎて。年月を[illegible]る[illegible]に。[illegible]に日にさらされし。[illegible]も朽ちらせて。たえせぬ名のみのこせり。

〔十八〕人々[illegible]亡の事。[illegible]。[illegible]。[illegible]三[illegible]。[illegible]大[illegible]。大二[illegible]

さても[illegible]年の。[illegible]月の中の十日の。しもつかたのころ。[illegible]。[illegible]のよし[illegible]えし[illegible]に。[illegible]に五日ばかり[illegible]ありて。十九日の夕。はかなくならせ給ひし。[illegible]しとも[illegible]すに及ばざり

しに。[illegible]の[illegible]失せさせ給ひしかば。[illegible]にかなけきをそへ。[illegible]ふにかなしみをかさねて。月[illegible]の。[illegible]の[illegible]なみだに[illegible]はれ。[illegible]にそはもて[illegible]せしたぐひ。[illegible]をとゝのへて[illegible]よ。しばしは[illegible]まらずとなん。世のもろしの[illegible]の[illegible]。[illegible]七月[illegible]ふけ人しづまりて。[illegible]に[illegible]りて。「天にかけらば。[illegible]の[illegible]たらん。地にすまば[illegible]の[illegible]とならんと。[illegible]り[illegible]ひしむつびだにも。[illegible]山かためにうばはれて。[illegible]にこそわかれ[illegible]ひしに。[illegible]はいかにと[illegible]りましくけるぞや。[illegible]の[illegible]まで。つゝがもましまさりし[illegible]の。[illegible]に[illegible]たえて。いまそかりける[illegible]。[illegible]に[illegible]し。[illegible]かくれませ[illegible]へる[illegible]。[illegible]につかせ給ひしかば。」一[illegible]は[illegible]に[illegible]く、一[illegible]の[illegible]にしほたれ。ひとりはすべらぎの[illegible]にいませかれば。ふたりは[illegible]の[illegible]にとられ[illegible]へり。一[illegible]り。[illegible]の[illegible]の[illegible]。なげきの中の[illegible]。いづれも[illegible]のためし。[illegible]をはりあり。[illegible]も[illegible]えあり。[illegible]あらたまりて。[illegible]らず。[illegible]にましくしかば。[illegible]はからひのえにていまそかりければ。上下[illegible]あへりし[illegible]に。[illegible]に犬とせをへて[illegible]のおはりの[illegible]。[illegible]にいまそかりけるが。つるに五月の上の[illegible]けりに。して[illegible]の[illegible]の[illegible]に。さそはれ[illegible]にけり。さものつかさの[illegible]。[illegible]上の[illegible]に。わかれ[illegible]りしにもかわらず。[illegible]のられふるわざは。[illegible]の[illegible]のなうしなき[illegible]りしにく。[illegible]まり[illegible]りも。[illegible]所そならとかや。[illegible]にましたるべく[illegible]の[illegible]

かし。[illegible]の上には[illegible]ならつつ[illegible]りし。ただ[illegible]をのみこそ[illegible]えしが。[illegible]をかはさぬ[illegible]の[illegible]しとねにちかうき[illegible]て。いまそかりし人々の[illegible]ゆらもおろかに[illegible]り。一天かきくれて[illegible]月の[illegible]をうしなへる[illegible]に[illegible]りけるとかや。[illegible]の[illegible]の[illegible]にきそはれ。[illegible]にしはれたるも。[illegible]ことに[illegible]れなり。[illegible]あまり。九[illegible]うちしめりを。[illegible]にましくしそのかみの[illegible]び。大[illegible]の[illegible]。まさに一[illegible]につきて。かなしく[illegible]のうしとらのすみ。[illegible]の[illegible]をくりのかりけるに。[illegible]のの[illegible]く。[illegible]わきかぬるまでに[illegible]きけるも。下[illegible]の山[illegible]の[illegible]ときけば。まそ[illegible]りつとやなきけん。[illegible]らはやめ[illegible]る[illegible]にしもや[illegible]らん。[illegible]から[illegible]の[illegible]も[illegible]くぞ[illegible]る。[illegible]の人[illegible]ふなればすでにむかしかたりにならせ給ひぬる[illegible]に。いつしか[illegible]しとや[illegible]わたるらん。しかあふらばたれもおなじ[illegible]なるべし。かくて[illegible]はくれ[illegible]の。[illegible]ぬる[illegible]々の[illegible]さ。[illegible]に[illegible]の[illegible]た平で。わづかへぬ[illegible]に。[illegible]の大[illegible]もゝせ給ひぬれば。[illegible]のまそりけるさよ。[illegible]かたみとのこらせ[illegible]へるに。[illegible]をたのむのぞにしみればかなけかざらん。[illegible]の[illegible]にうちそひぬるわざの。うたてきと[illegible]ひしに。[illegible]くる年の[illegible]大二[illegible]さへおはしまさずなりぬれば。三とせのなげきつきもせて。[illegible]三[illegible]の[illegible]三[illegible]の[illegible]にはいよく[illegible]れに[illegible]りも。あはれはかなき世の中かな。[illegible]か一人としても。此の世にとゞまりはてゝはある。(三八)[illegible]一[illegible]の[illegible]のごとし。(八六)[illegible]らんと[illegible]は

おしからで。さてもわかれん事ぞかなしきとよみて。住吉の明神に。祈りし命もとどまらず。いのられし子も、「百の命を十[illegible]し百年すぐる[illegible]なさ。只今の心地し侍り。百年を[illegible]んすら。その[illegible]あるべくはかなしむべし。いはんや老少不定のさかいをや。命たえむ事。今日にや有る。明日にやある[illegible]と云ふ事は。[illegible]に[illegible]にあらずや。[illegible]か[illegible]をしらざらん。もししるとならば。などか[illegible]のためにつとめざるべき。[illegible]の[illegible]をわきまへざらんは。おひてこれをいはず。知りてあにいたづらとしてすぐべきや。中にもいとけなき身は。行末をも[illegible]む力もありぬべし。[illegible]に[illegible]をいたとける人の。などか[illegible]えなん事をしらざる。いとけなからんすら。「明日をたのむべきにあらぬ世の中なり。[illegible]の[illegible]に[illegible]よをふ。[illegible]の日にあたるを見侍るに。かはらぬは人の身なり。それは[illegible]をまつ。[illegible]はしらず[illegible]にやきえん。さかへる[illegible]たのしみはてず。かならずおとろふる時あり。[illegible]が三[illegible]ふ[illegible]の[illegible]の年。なが月の。[illegible]にをかされてさりにき。又[illegible]山か[illegible]の[illegible]には。木末の[illegible]の。[illegible]にたぐふよりも。[illegible]くはやかりし。子のためにほろぼさる。[illegible]がも[illegible]。[illegible]とともにきえにき。[illegible]もし[illegible]をはばからば。天下を[illegible]の世にはとまりはて[illegible]ふべき。[illegible]に[illegible]れば。[illegible]いかでか。[illegible]のそきにかゝらん。[illegible]によるべくは。[illegible]を[illegible]りとまるべき。[illegible]を[illegible]ず。心をとめて。[illegible]に[illegible]の中を[illegible]ふに。[illegible]るものは[illegible]あり。生るゝものはかならず[illegible]すといへる事。まに

しみてぞ[illegible]る。それ[illegible]に[illegible]るといふ日より。[illegible]の[illegible]にうそふけば。いつしか[illegible]たなびき。[illegible]いまだ[illegible]なけれど。[illegible]先づ[illegible]て[illegible]となく。[illegible]もゆるくなるまゝに。木ゞつのぐみて[illegible]つぼめり。「一[illegible]一ふる[illegible]けしかば。[illegible]は[illegible]とて[illegible]〻[illegible]にして。[illegible]ふ[illegible]に。[illegible]より〳〵[illegible]づれて。[illegible]彼の[illegible]のひらけ。おらざるにかつちり。[illegible]はひとり[illegible]みどり。[illegible]をさかりに。[illegible]る[illegible]を[illegible]る[illegible]に。[illegible]は[illegible]に[illegible]たれ。[illegible]は[illegible]の[illegible]にちりて。行末なく[illegible]りはてぬ。「二月の比。[illegible]のわたりを[illegible]むれば。[illegible]くの[illegible]どもの[illegible]にうるをされて。おしなべてみどりにみゆる中に。入学をにぎると[illegible]ぞし[illegible]の[illegible]もふみ出て。ゆら〳〵と見ゆる[illegible]に。[illegible]く日を[illegible]て。立ちのび。くろみ[illegible]りて。[illegible]の[illegible]にかはりて見ゆ。[illegible]にもなりぬれば。「[illegible]花[illegible]に[illegible]をとめて[illegible]く[illegible]を待ちて。五月やみにも[illegible]なけかし、しののめの[illegible]にもをとづれよかしと。うつゝむもなく侍りし[illegible]に。[illegible]の[illegible]もうちたゆるまゝには。[illegible]の[illegible]花のはやくさきねかしと。人しれず侍りしかひに。草々さきみだれて[illegible]をおれるかと[illegible]えて。[illegible]に日を。[illegible]してばやとおもふ[illegible]に。六十[illegible]みれどもあかずと。心のそこを[illegible]べけん人の。[illegible]しさと[illegible]て侍れば。[illegible]に月日のつもりて。夜さむに[illegible]もすゝみにのぞみ。[illegible]さえて。[illegible]の[illegible]もなく。木々の紅[illegible]ちりはてて。[illegible]には[illegible]のふりかはり。[illegible]だに[illegible]え侍りしありさま。「[illegible]の[illegible]。[illegible]のかなしみに侍り。此の[illegible]を心にかけて。常に[illegible]の[illegible]を[illegible]へ奉り[illegible]は

ば。[illegible]の[illegible]は。よもとげはづし[illegible]らじ。[illegible]は[illegible]を[illegible]て。[illegible]めんこそ。いみじき[illegible]にて[illegible]るべけれども。それ[illegible]ふまじく[illegible]らば。心にこそよるべき[illegible]なれば。[illegible]をいとなむとも[illegible]をおこたりなく。[illegible]ひ出づる[illegible]にて[illegible]れかし。火宅の中に[illegible]して。今ははのはに[illegible]かれなん[illegible]を。わきまへざるかなしさよ。あはれ[illegible]の[illegible]には。[illegible]はおはしまさぬものなるをや。

（十九）[illegible]の事

[illegible]とて山[illegible]の[illegible]にて。年久しくつめる。[illegible]の人いまそかりけり。いとけなかりける。そのかみ[illegible]月の比。木々の[illegible]の。[illegible]にさそはれて[illegible]につもり。[illegible]かきくらし。あられまじりて。この[illegible]の上におつとみれば。かつ[illegible]へ[illegible]くを見るに。先の世の[illegible]や。たよりを[illegible]て[illegible]けし。[illegible]に[illegible]をさとりて。おさおさしき心に。[illegible]をうるほすまでに[illegible]こぼれて。[illegible]の[illegible]にまふでて。[illegible]を[illegible]になしてを[illegible]へと。[illegible]に[illegible]えければ。今更あやしく[illegible]えて。くわしくおもよ[illegible]ぬるに。世の[illegible]の心にしみて。よろづ[illegible]れになん[illegible]るは。[illegible]の[illegible]に[illegible]ひて。かしらおろし[illegible]りて。[illegible]をもとり[illegible]々の人をも。[illegible]らむとおもふに[illegible]と云ふに。[illegible]に[illegible]えて。十三と[illegible]ひける年の比。[illegible]の[illegible]。[illegible]の[illegible]に入りて[illegible]りけり。一と[illegible]ては十を知り。十を[illegible]ては百をさとるのみならず。[illegible]うへをしのびねよりも[illegible]て。[illegible]の[illegible]に[illegible]ひては[illegible]すから。[illegible]十[illegible]のひもをとき。[illegible]に[illegible]をあつめ。[illegible]をもとめて。[illegible]をこたらざれば。[illegible]なく一[illegible]して。[illegible]久しうし[illegible]へりけり。まても此の[illegible]く[illegible]しける時。[illegible]に[illegible]なひて。[illegible]へまいり[illegible]へりけるに。[illegible]の三[illegible]のすそにて。[illegible]を[illegible]く[illegible]へりけれ共。[illegible]になかれて[illegible]の上に。[illegible]の千[illegible]の[illegible]く[illegible]れていまそかりけるを。まのあたりおがみ[illegible]ひけるとなん。[illegible]の[illegible]は。さる[illegible]にて[illegible]み[illegible]へる[illegible]を[illegible]になん。其の比[illegible]し[illegible]りけるとぞ。さても此の人[illegible]むのはじめ。[illegible]に[illegible]りがたくまれなるためしなるべし。我のはかなくあだにて。[illegible]に[illegible]月にうそぶきしたぐひ。[illegible]は[illegible]の[illegible]にかくれ。[illegible]に[illegible]をなづさへし人。夕には[illegible]の[illegible]にまよひてはそゐ。うき[illegible]中とはしりぬれども。[illegible]く[illegible]の[illegible]にあひて。[illegible]のつなにひかれて。[illegible]の[illegible]ぞろに[illegible]をかされ。[illegible]の[illegible]くたたみて[illegible]しけるは。人の心ぞかし。さるに此の[illegible]の。[illegible]一[illegible]あまりにして。「[illegible]にたぐふ木の[illegible]。とらんとすればきゆる[illegible]をみて。[illegible]に[illegible]の[illegible]を[illegible]りて。不[illegible]の[illegible]をおとされけんは。おろおろの[illegible]には[illegible]るべしと[illegible]えず。[illegible]れに[illegible]かりける[illegible]かな。いかなれば人は[illegible]を[illegible]るぞ。いかなれば[illegible]はむなしく[illegible]ひぬらん。いとけなきすら此の[illegible]を[illegible]るに。など年のみ[illegible]みて。かうべは[illegible]。[illegible]は[illegible]にまがふまでになりぬれども。[illegible]にしみ[illegible]のこけるるまで。おぼえざらんと。口[illegible]しといへども。一つ[illegible]べる[illegible]あり。[illegible]の[illegible]は。人に[illegible]させ

りて[illegible]も[illegible]ひおとされじと侍りしかは。九重三伏のあつきにも。あせをのごひて終日に。禁中にかしこまるを本とし。文多[illegible]の跡にも。[illegible]をともとして[illegible]に[illegible]しても。[illegible]の[illegible]いきざしを守りて[illegible]もそむきたてまつらじとふるまひ侍りき。情ある色の女にあひなれては。[illegible]うく吹きて。[illegible]にわかるるよこ雲の空を恋しみ。面かげも契りしもわすれずながら。うつつもおぼえねば。[illegible]かとわきかねても。[illegible]にとはまし草の原。色かはる露をば。袖にをきまよひても。[illegible]がれはてし。[illegible]のうさなんどをかなしみ。或時は月にうそぶき。或時は花になれて。月日のいたづらに[illegible]れるをも知らずして[illegible]きしに。おもはざるに[illegible]の末の年より。[illegible]心にしみて。[illegible]の[illegible]よしなくて[illegible]子をふり捨て出家侍りしかば。[illegible]は[illegible]の[illegible]門となり。[illegible]を[illegible]びし女は。かざりおろして[illegible]の[illegible]所とかやに住み侍り。[illegible]はゆかりにつきて。[illegible]にとどまりきとうけたまはりぬ。[illegible]子三所に[illegible]れてむつごとのふるわざも侍らず。さても[illegible]に[illegible]へ。[illegible]に[illegible]くふと。云ふならはせるにや。あまのぬれ衣[illegible]えて。又[illegible]によりきて。住みなれし所を見るに。[illegible]くづれて。門のかたぶきたりしを。見しに何となく涙におぼえて。立入りみれば。ありしにもあらず荒れはてて。人のかよふ[illegible]もなし。[illegible]の[illegible]の[illegible]。[illegible]に[illegible]り侍る。ふく[illegible]なければまばらにて。[illegible]も月もたまらじな。心のままに[illegible]れる。[illegible]の[illegible]に[illegible]の[illegible]わたり。ここをねやとこそしもべけれと[illegible]ひ侍る所までも。さながら虫のすみかとなりて。床に[illegible]白く侍りしかば。[illegible]りて又[illegible]にもかくて。すまばやと[illegible]え侍り。[illegible]は[illegible]のごとしと云ふ文あり。此のすみかのあれたる[illegible]。[illegible]が[illegible]の[illegible]ひ知られて。いとど袖をしぼりて[illegible]り侍りき。

撰集抄 第四 終

撰集抄 第五 目録

（一）西住上人之事
（二）西住上人発心之事
（三）[illegible]之事
（四）ならびに盛衰の事
（五）西円の御山閑居之事
（六）上東門院之事
（七）坊上人之並付歌之女之事
（八）将門并に仲武歌事
（九）狂言綺語之三位事

撰集抄第五

（一）西住上人之事

過ぬる八月のはじめつかた。西山の西住上人と伴ひて。江口のわたりを過侍りしに。折ふし日のうらゝかにて。風もたち侍らねば。海上なみにうかびて。木のはのごとくにみゆ。いかなる漁者侍くの魚をつるらん。あらむざんや。此の舟にのりて。彼のうをのために念誦して。後世とはんといへば。誠にしかるべしとて。とをあさはるかにかにあゆみよりて。舟にのせ給へといふに。これは釣する舟にて外へ行くべきにあらず。乗り給ひて何の用か侍らんといふ。あながちにいひてのり侍りを。彼魚のために。ひそかに念誦して後世をとぶらひ侍りき。ここかしこの浦によりて釣するを御覧ありしかば何となく

（二）ただは入いかなる江にかくちはてんと行もすまみ侍るを。此の西住上人つけむとて。つら／＼つきてうち／＼ゆきけるに。つりする舟のことの外に中たけたるがとりあへす

あふことなふに身をしづめつつ

と作けたるにめづらかにおぼえて。身にかしこくぞしひて問ひ侍りて。かかる事を聞きぬる事しをよとおもふ事たとへんかたなし。此の後も今はひたすらつりをやめて。家業に心を入れ侍り。其の仰おもしろさに又問ひよりしかば。

浦のうち舟のしたにぞおゐにける

といひたるに。又うちあむじて。

あまのしわざもいとまなの世や

と詠じ侍りき。たがひに興じける程に。日も西の山のはにかたぶきぬれば。翁士のとまやにこぎもどして。今はいづちへも行くべきよし。翁に暇をこひ侍りしかば。日もくれぬと。あながちに留めしかば。彼のおきなの住家にやどりて。むかし今の物がたりし侍りき。翁のいふやう我は此の浦の中納言とかや申し侍りける人の末に侍りけり。父にて有りし人は。東山の麓に住みて侍りけるが。世の中しわびて。此の島に落ち来りて。海人のははに。我をうませて侍りけるが。我れ三つとも申しけるとし。父母ともにはかなくなり侍りき。其の後は祖母のうばなりし人に。預かかりて侍りしが。十二といふに又かれにもをくれて侍りしかば。何とて今日まで世の中をふべきともおぼえて侍りしかど。釣をひきて命をつぐに侍る。うき世の中のすみうさに。髪おろして。いかならん所にも侍らばやと思へども。さすがに思ひ捨てえで。ただ舟一つを助けんとて。おほくの物の命をたつ事の心うさ。今ももとどりきらんと思ひ侍る事は。一日にかならず二三度は思ひ出でて。涙のこぼるるなり。其の折しも父の具そくの中に。何となき歌ども書きおき侍るを見て。心をなぐさむるに侍る。親子と云ふものなくて。すぐに五十年あまりのとしをおくり侍りき。昔のありさまを思ひ出するに誠に浦山しくはんべる。我もともなひたてまつらんとて。やがて手づからもとどりきりて。我が年来のすみかをば。日比したしかりける人になんとらせて。いざなひつれて行法と名を付けて。むらなき修行者にて侍りき。其の後都に上りて。西山のふもとに庵をむすびて行ひ侍りけり。西行上人と申す侍りしは。此の人の事にてはんべりき。ゆゆしく行なりて。上人とあふがれ給へり。実にそのしなをいはば。くだれる人に侍らねども。翁士のとまやに生れて。いねもせで。うしをくみてこれをやき。みるめをかりて身をたすけ。釣を引きて命をいきて。五旬のよはひをへにける人の。俄にほつしんし侍る。いと有りがたき事には侍らずや。年へて都に上り侍りしつひでに。彼の庵にたづねゆきて侍れば。山かげの清水きよくながれて。前は野のはるばるもあるに。四壁も侍らで軒は野干ふしどをしめ。松柏にはふくろうなける所に。むしの音を友とし。嵐をしたしみ契りはんべ

り。手うつくしくむすんで。定印の膝にしづまりたまへり。見るにたつとく侍り。彼のひじりの申されしはそれの御前に。かゝる身となり。今世後世こころのままに。しおほせ侍ればかへすがへすもうれしく侍り。此の言葉をばいかでか感じ侍らざらんなれば。急ぎ往生し侍りてとこそ思へとの給はせし。此の聖もいとけなかりけるより。往生を心にかけ給へりとぞうけたまはる。弟子にて有りける僧の。何事か後世のためにはよく侍ると。とひたてまつりけるに。心をのどめて無常を観ぜよとこそのたまはせつれ。

〔二〕西住上人往生の事

西住上人わづらひの事侍ると聞えしかば。今は限りの対面もあらまほしく覚えて。西山の奥より都に上りて彼の庵に尋ね行きて見侍れば。ことの外におとろへて。はかばかしく物もいひやらず。我をうち見てうれしきとて。涙ぐみし事の。あはれに覚え侍りて。すずろになみだを流し侍りき。年頃のつれづれをば。我こそなぐさめ申すべけれ。そこのひとり残り給ひて。いかにおはしなげかんとて。袖をしぼり侍れば。ただあはれ身にあまりて。其の夜は留りて果なく。彼のわざなんど聞えしかば。さりともやがて。事はされじとこそ思ひ侍りしに。其のあかつき西にむかひて念仏して。眠りをとり侍りき。今のわかれは。実にかなしく侍れども。一期浄土の所願も。さりともと心をやすくはんべりて。なみだをおさへて。野辺の送りして。なくなくけふりとなし。骨をばひろひとりて。高野にと心ざし侍りき。其のいとなみし侍りし折ふし。(六)[illegible]かならずまいるべきよし仰せられ侍りしかば。西住上人の事も申さまほしくて。参りてかくと申すに。なみだにくれ給ひて。此の春東山の花見に。ともなひ給へりしことの。最後のたひめんにありけるぞやとて。

(七)なれなれて見しは名残の春ぞともなど白河の花の下かげ

とうちすさみ給へるに。実にあはれに覚え侍りき。帰るみちすがら。夜更けくて。[illegible]の袖ころも。色かはるまで侍りき。出家遁世のそのかみより。(八)[illegible]のいままで。ふかく契りをむすんで。何の所へもいざなひつれ侍りしに。おくれしかば。実にいきて有るべくも覚え侍らず。草木を見るに付けてもかきくらさるるままには。帰るさの月のひかりもおぼろに見えて。いとど心もはれやらぬに。[illegible]しのの[illegible]にゆるくとぞり。軒の露もろくて。物かなしき折節。はつかりがねの雲井に。ほのかになきわたるをきくに。行き合ひにあらざれど。はらわたをたち。千鳥にあらざれども。心をいたましめ侍りき。かくて西山へかへりて。夢に見るやうありし。「上人来りて我は(九)極楽の外院に生れぬとて夢さめぬ。かく聞えしのちは。極楽の外院にあらざる事のうらめしきよと。思ふかたも侍れども外院も又貴くぞ侍る。「もし昔のごとく往生にて共にみやづかへせしかば。あに外院に往生を

とげましや。今生は貧びん(一〇)をかき。後世をたゞしくして。都の栖まなじりにかゝり。山中へ分入し。ゆゆしく侍るに。年かたぶきて本鳥を切り。あさの衣にやつれるは。おこがましきににたりといへども。實の心とは時にや侍るらん。「此の世ははかなくあだなるさかひなり。それにしばしのほどをへんとて名利にほだされて。永劫の間三途のちまたにしづみ侍らんには。かへすぐ口惜しき事にはあらずや。恵みをかけし主君もたすけ給はず。あはれみはごくみし妻子けんぞくも。中有の旅にはともなひやはし侍る。ただ獨かなしみひとりまよへるは。(一一)來世にある人の後の世に侍り。いはんや妻子をふり捨て面白きところぐをもおがみ。山々寺々をも修行し侍るは。中々にたのもしくぞ侍るべき。「もとより世になければ惜みもなし。惜みなければ恨みもなし。おそろしき主君も侍らねば。(一三)[illegible]をも[illegible]らず。いとをしき妻子もたざれば。煩惱のおこり侍らず。財寶を身にそへねば。野山にふしても盗人のおそれ侍らず。又かかる世すて人に。何の敵かはんべらん。後生の勤行は又申すに及ばず。

〔三〕富家入道殿春日の御社の事

鳥羽の院の御くらゐのころ。(一四)富家入道殿と申す人いまそかりけり。(一五)京極大殿の御むまご。後二條殿の御子にておはしましき。殿下の御父として。天下のことわざを執行はせ給ひしかば。百寮おもくし奉りし事は。さらに筆にも述ぶべくも侍らざりき。しかはあれ共月日むなしく送りきて。御ぐしには霜をいただき。御顔には波のおきて見えさせ給ひしかば。御出家の御こころざしありて。神にいとも申さんと思し召し侍りければ。(一六)春日の御社に御まいり侍りけるに。十二のおさなき児わらは。にはかに声けだかく。らうたきすがたになりて。

[illegible]昔不[illegible]此内[illegible]有[illegible]有心[illegible]必[illegible]陀[illegible]内[illegible]生[illegible]。

あなおもしろや。といふに(一七)殿下たゞごとならずおぼしめして。かしこまり給へるに。此童のいふやう。我はこれ(一八)春日の第三の神なり。此の度の見参は。殊にうれしく侍り。其の故は世のつねなき事をおぼしめして。にはかにかざりおろさんとし給へる嬉しさに。随喜のなみだの。ところせくをもしらせ奉らんとて化現し侍り。「あひかまへてわすれず後世を心にかけたまへ。それぞ我なられしと思ひ侍るべき。我も二人の男子をもち給へり。二人ながら(一九)氏の長者につらなり給ふべし。嫡子は世のまつりごとすなほにて。容顔うつくしく才藝たくみにましましく侍れば。世によき人と申し侍るべし。」しかはあれど道心のおはせねば。我が心にはいたくもかなはず。御身の御事は。まつたく[illegible]を[illegible]として。[illegible]をはかりとをしにて。人の[illegible]をはかり給へる事。たなごころをさすがごとし。されば末代には有りがたきほどの人にておはすべけれども。「[illegible]にもおろそかたし

て。[illegible]をなやまし給ふべき人なれば。[illegible]ともなはずと[illegible]ありて。おほやけ[illegible]へかと[illegible]へさせたまはるに。かたじけなく[illegible]給る。[illegible]をもつておもふに。[illegible]あるものをば大きによろこばせ給ふなり。[illegible]に一[illegible]をば[illegible]は[illegible]が子よりも。いとおしくかなしく[illegible]しけるに。火宅の中に[illegible][illegible]してほのほにこがれなんとするを。[illegible]くるしく[illegible]しく[illegible]しめされけるに。いささかも心をおこして。世の[illegible]をもしり。火宅をのがるるなかだちともし侍りけるは。まことに[illegible]しくも[illegible]しめさるらめ。我が身にかへて。いとふしく覚え侍らんひとり子の。火の中に[illegible]せ入りて。[illegible]にむせびゐたらんは。[illegible]か[illegible]をなげかざらん。又火の中をはしり出て。よき[illegible]へゆかん子を見て。[illegible]あによろこばざるべきや。[illegible]の[illegible]らをおぼさるる[illegible]。[illegible]にすこしもたがふまじき[illegible]に侍り。あはれ心うきわざかな。三世の[illegible]の。さばかりちからを入れて。すくひたてんとせさせ給へるに。まけじとすべりて。心うきめを見る事よ。そもそも[illegible]に[illegible]し給へる文は。[illegible]とかやの文にて侍るなり。[illegible]をば[illegible]にては。いかでかしり侍るべきなれば。しばらくさし[illegible]きぬ。これをばいはず。ただなにとなく。[illegible]とよみつゞけたるに。心もすずろにすみわたり。なみだもいたくそぼち侍る。よくたつとき[illegible]にて。かかるおろかなる心をも。もよをすらむ。此の文の[illegible]は[illegible]心をも心とて。(三〇)なとめそといへることとやらん。[illegible]の[illegible]なりとぞ[illegible]る。

〔四〕[illegible]の事

「むかし[illegible]に(三一)[illegible](三二)とて。ならびなき[illegible]のいまそかりける。[illegible]たけ。[illegible]つもりて。[illegible]のしるしどもを。[illegible]し給へる人なり。或る年の[illegible]月のころ。(三三)[illegible]のやしろにまふでておはしける[illegible]に。いかにも心のすみておぼえ給へりければ。[illegible]に[illegible]し侍りけるに。[illegible]にわかに降りとをり。あらしはげしくて。月の[illegible]もなくなりぬ。しかあれども[illegible]のすみの[illegible]人は。月[illegible]まつらん[illegible]と見え侍り。かれ[illegible]の[illegible]の[illegible]。[illegible]のやどりしげかるらんとおぼえて。何となくあはれなるにつけても。世の[illegible]なき[illegible]の[illegible]はれて。かなしみ給ひけるに。[illegible]戸のうちより。げにけだかき[illegible]こゑにて。

「つねなき[illegible]にはこころとどむな

と。きこえければ。[illegible]とりあへ給はで。

月[illegible]のなさけもはてはあらばこそ

と。つけ[illegible]され侍りければ。[illegible]おそろしくうごきて。あらおもしろやとある。[illegible]こゑをまのあたり。[illegible]に[illegible]へると。つたへうけ給はるぞかたじけなく侍り。これは[illegible]のきとれる[illegible]の

そこをのべ給ひければ。許もしきりにめでさせ給ふにこそ。実これこそうるはしき[illegible]にてはあらめ。月花の興のありはてば。此の世に心をも留めなまし。

〔五〕[illegible]門の[illegible]の事

(三〇)[illegible]のすゑの八月のころ。[illegible]のわたりを過ぎ侍りしに。花ことに面白く。むしの声ごゑになきわたりて。行き過ぎがたく侍りて。[illegible]に[illegible]し侍るに。玉鉾のゆきかふみちのほかに。少し草かたぶくばかりに見ゆる跡あり。いかなる跡にかあらんと。床しく覚えて。尋ねていたり侍るに。すすき、かるかや、はぎ、女郎花を手折りて。庵むすんで住みたる僧あり。年四十あまり五そじにもやなりぬらんと見えたり。前にけしかる硯箱ばかりぞ侍りける。実にたつとげなる人に侍り。庵の内を見入り侍れば。手折りて庵につくれる草々に。紙にて札を付けたり。すすきの戸には。

露しげる秋の野風のいかならんよなよなむしのこゑのさむけさ

又かるかやの戸には。

山風の音れぬとおもへばかるかやのした葉く露もまたきいろかな

又ふじばかまのふすまには。

野のぬきあたにおるてふ錦あきかぜまたで露にのさまし

又萩の戸には。

夕さればまがきの萩に吹く風の。目に見ぬあきをしるなみだ哉

又女郎花のさけるには。

女郎花うへしまがきの秋の色はなほしろたえの[illegible]ぞかはらぬ。

又[illegible]のさけるには。

[illegible]の花うつろふ[illegible]の[illegible]に。下葉もまたで[illegible]はちりつつ。

といづれも札を付け置きて[illegible]し給へり。ことにやさしくたつとく覚えて。何わざの人ぞいづくより爰へは来り給ふにやといふに。此の所よりとばかりこだへて。其の外は何事をとひしかども。つゐに答ふるものたまはざりき。さる程に日もかたぶけば。名残はつきせねども。なくなくわかれてかへりしが。其の面影をもせまほしくて。あさの衣をぬきて彼の庵におきて出で侍りき。かくて此の方へあゆみ出でたれば。まことにけはしき山あり。大きよく[illegible]れて[illegible]の有さま見るめめづらかに。[illegible]に[illegible]くとも[illegible]にはにせじと。心とまるほどなる所なり。「此の木上をたづねゆけば。一町あまり来ぬらんとおもふ所に。木の葉をさしおほひて大十あまりにたけたる僧いまそかりけり。爰にも又かかる人やおはしけりとおもふに。むねさはぎて。傍によりてみれば。うるはしく[illegible]して。ねぶるやうにて。

いまだ生き給へる人なり。木の[illegible]に[illegible]にて礼を付け[illegible]を[illegible]へり。

むらさきの雲たつ時にしあらざれば。澄める月をぞいつまでも見る

と。いふ歌の礼なり。あはれにかなしく侍りて。上の雲の[illegible]行にこそと思ひて。然ず行きてしかく

と云ふに。いとあはれにこそとて。[illegible]よせて[illegible]にかくなむ。

紫ひつる心のやみを晴しこし。月もあやなく雲かくれけり

と書きをはりて涙をもよほしながら。ねぶれるやうにして終られぬ。あさましく悲しくて。猶にとり付きておめけどもかひぞ侍らぬ。又山寺に住み給へる人は。いかがおはすると思ひて。なくなくはしり行きて見れば。はや首は前にかたぶき給へり。まて有るべきに侍らねば。[illegible]となし奉らんと思ひて。火打ちて既にやかんとし侍りし時に。餘りにかなしうありしかば。[illegible]の友ともし侍らまほしくて。なみだをのごひて。おろおろと彼の姿を絵にとどめとりて。彼に[illegible]となし奉りて。又野寺の聖の方へ行きてみれば。かれも首はかたぶき給ひしかば。おなじくかたちを写し留めて。おなじ火にてたきあげて。其の夜は野寺にてよもすがら念誦して。一佛浄土へと乞ひ願ひ侍りて。明けぬれば帰りの絵どもとつて。なくなく帰り侍りき。あはれたつとかりける事かな。生死心にまかせ給へりける有りがたく侍る。たゞ人ならぬ権者なんどにておはしけるにこそ。歌さへ末世には有るべしとも覚えぬ程に侍り。所から[illegible]に心もすむべきありさまに侍る。人里も侍らず。又もちたくはゆる物も見えず。何としてしばしの露の命をもささへ給へりけるぞや。我が世を捨てて深く山々をへまはりしに。貴き人々あまた見しかども。かかる人にいまだあはず侍りき。[illegible]にもあひ。けぶりとなしたてまつり。骨をひろひて高野にもよぢ上り。彼の聖たちの絵の姿をもとり留め。骨をも納し侍れば。さだめて彼の二人のちからにて。我も浄土へみちびかれ奉らんと覚えて頼もしく侍る。詠み置き給へる歌。書き給へる文字。世のすゑにはたぐひ侍らじかし。

〔六〕[illegible]之事

むかしもろこしに。[illegible]山の[illegible]師と云ふ人ありけり。[illegible]の弟子なり。其の[illegible]行いみじき人にて。其のあたりの[illegible]。もてなし給ふ事なのめならず。ある時に[illegible]の[illegible]に。[illegible]と云ふ人侍り。子を五人持ちけるを。弟子には我れ跡をゆづらん。一人をば[illegible]のもとにつかはして。[illegible]になして我の[illegible]にせんとて。二郎なりけるをつかはしてけり。かくて百余日ばかりありて。[illegible]のもとより。[illegible]に使をたてていふやうは。我れにたびたりし人は。経文に心を入れ侍らざりしかば。とくいましめし程に。此のあかつきすでにはかなくなりぬ。[illegible]なげき給ふべからずと。いひおこしたり。父母聞きてあさましなどといふもおろかなり。[illegible]にくからふたがりて。とく返事する

にも及ばず。誠にかなしげなるありさまにて侍り。なくなくちからなきよしを返事してけり。日比[illegible]むなしくふれども、[illegible]はるるまもなく侍り。さりとも又、日比おもひし本意のすゑなくて、有るべきにあらずとて、父母また三郎の十三になるを、[illegible]又心に入れよとて、かみかきなでて[illegible]のおほきのみのみならず。さきの子にもこりず。[illegible]の世のつとてまた[illegible]の家にやりける。父母の心たとへなく侍る。かくて五月ばかりありて、又いひつかはすやうは、此の[illegible]の人は、さりともと[illegible]へるに、よにも心ざまよからざりしかば、またなん[illegible]又せがむとて、打ころしぬと告げり。ただ[illegible]とも[illegible]えず。[illegible]かとぞ[illegible]へる。誠にかなしかるべし。いまだ二人にだにも及ばぬものを、[illegible]に身をひかでやりつる事。[illegible]更くいかなしめる[illegible]なり。父母共におきあがりて云ふやう。さて有るべきにてもなし。さらば四郎をやらんとて、よびよせたり。とし八つにぞなりけん。めのといふやうは、ただ[illegible]が命をうしなひてのち、いづちへもやらせ給へと。なきこがれけれどもかいなし。つゐに[illegible]の[illegible]にあひそへて又やりぬ。やりてのちは又いつか、うちころされぬときかんと、父母うつつ心なく、あけくれに門をあらくもたたけば、今すでにと告ぐるにやと、心を消して[illegible]しほどに、十三にてかざりおろすよしつげたり。[illegible]て父母、まことうれしく侍りけめ。さて[illegible]になりて、[illegible]せんとて、そこくの父母のもとに[illegible]りけるに、[illegible]て、[illegible][illegible]をしりぬらん。いかにしてかの[illegible]をば、たすかるべきといふに、此の僧の云ふやう、[illegible]をぜさせ給ふべし。[illegible]まぼろしの世の中と、おぼせといふ時、父たちまち[illegible]心して[illegible]し侍り。子の僧に[illegible]をうけにけり。[illegible]は三十[illegible]目[illegible]てのちに、かざりおろしてけり。此の僧は[illegible][illegible]なり。[illegible]は[illegible]の[illegible]に生れ、父母は[illegible]の[illegible]をとげたりと。[illegible]の[illegible]にのせたり。[illegible]を見しに、此所に[illegible]つてただ[illegible]をおとしき。二人の子にもこりもせで、三人までやりける心のたけさは、はかりても云ふべきにもあらず。[illegible]には[illegible]ものうしとていさめ[illegible]もあるべからず。又[illegible]さるる上に、かさねてやるべしとも[illegible]えず。もし千[illegible]が一つも、いたみなき子の死にたらば、[illegible]にぞ[illegible]の心をばむすばまし。あはれ有りがたかりける父母の心かな。これほどの心[illegible]のあらん人、[illegible]もなじかは、[illegible]に生まれでもはんべるべき。かへすがへすもゆゆしき心なりけんかし。

〔七〕性空上人之事

むかし[illegible]といふ山中に性空上人と云ふ人いまそかりける。（三）本院の左[illegible]時平の孫、[illegible]大[illegible]の[illegible]に、竹太小三郎と云ふ男にてなんおはしけり。其の大[illegible]の[illegible]もとに、むかしより侍つて。[illegible]たき[illegible]侍り。[illegible]に[illegible]の[illegible]に入れて[illegible]かれ侍る。[illegible]を[illegible]はる[illegible]に、此の[illegible]をば見るに侍る。さ

れば。おぼろけにては見る事も候らず。しかあるに此の大職冠にあがり給ひて。此の玉を拝み給ひて。格子ごしに置き給ひてけり。其の仲太此の玉の見たく覚えて。格子の[illegible]十に[illegible]り給へりけるを。すかしこしらえて。忍びて此の玉をあけて見るほどに。あし音のあららかに聞えければ。心騒ひしてしたためおかんとするほどに。取りはづして落してあへなく二つに打ちわりぬ。仲太いかがせんとあきれはてて。さはぎけるに。此の宝珠のたまふやう。いたくな歎きひそ。われわりたりといはん。我れしたりと聞き給はば。そのづから思ひゆるし給ふこともあらんと宣へば。仲太手を摺りたのみ参らするとてのき侍りぬ。」さる程に大職冠。此の玉をしたため置かんとて見給ふに。正に二つにわれたり。浅ましなんどいふもおろかに覚え給ひて。色かわりたるにやと。目にはらだちなげき給へるに。此の宝珠なみだぐみて。我れ誤りてさぶらふと聞えたまふに。大職冠大にしかりて。此の玉は大職冠の住吉に詣で給へりけるに。大明神示現ありていはく。我れ此所に跡を垂めて。年を経り月を重ぬれども。はかなくしき人。誰も見え来り給はざるに。汝しくもとぶらひたまへり。此の志には此の玉をあたふるなり。是はこれ我が形見をうつす玉に侍り。身にとり秘むる事あらん時。祈りふべしと託宣ありて。大職冠の左の袂に。此の玉ありけるをとりて。懐の中に入れて置かれけるなり。かかる玉をわる事なれば。ただ有るべきにもなしとて。宝珠をころされたり。其の仲太あさま

しく悲しうかぎりなければ。せめて宝珠の菩提をもとひ奉らん。かつうは我が身の咎をも。たすからんと思ひて。やがてかざりおろして。法名を[illegible]とぞ申し侍りける。常は世の[illegible]を[illegible]じて[illegible]をながし。六根を清めて法花経を読誦せり。[illegible]山に庵をむすびて。どくじゆのこうつもりて。此の身ながら。大菩薩を行ひ給ひにけり。されば彼の宝珠の[illegible]は。よもさはりあらじと思ひ侍り。「[illegible]心の時より入[illegible]の今まで。をこたりなく行ひ給へば。今は彼の宝珠は。[illegible]山居士にもや生れていまそかるらん。「又此の宝珠の。人のなんにあたるべき事をわび給ひて。我れとかはりて命を失ひ給へる事。たとへんかたなき心にぞ侍るべき。中にも十の人の。いとけなきには此の事げにと思はんやは。あはれ。ながらへ給はしかば。いかなる人にかひいで給ふべきと。かへすぐも悲しく侍る。偖も此の二人は。法花[illegible]の功によつて。両身にまのあたり。大菩薩の[illegible]を得たりといへども。生身の菩薩の相を拝見し奉らぬ事。うらみの中の恨みに侍りとて。七日断食していまそかりけるに。七日のあかつきのうつつに。天童現じていはく。汝の天女が菩薩を拝め。それぞ我の化身なるとしめして失ひ給ひぬ。ふしぎと思ひおどろきて。[illegible]へいたり給ひなんとす。此処にては天女を見んといわん事。あしかりなんとて。白きぬき給ひて。[illegible]じさしたる僧五人ぐして。其の菩薩が所にいたりつき給ひて。[illegible]をとり給ふに菩薩であひ。やがて[illegible]をすすめ

禁制れり。しゐ中すとて舞をまひ。うたひけり。此所のみたらしの池に龍の首つれて。とかずふればならびゐたる天女ども。同じ心にして。さまら数たつやれこまつ。ともけはやしけり。されば是は生身の菩薩にこそと思ひ給ひて。目をふさぎ心をしづめて。観念をしたまふ時に。普賢菩薩の生身の菩薩。白象に乗り給ひて。眉間白毫の大光には常住法身の月。ひかりほがらかなりと。うたはせ給へり。又目をあきて是を見給へば。遊女の長者なり。うたふ詞も。さまら数たつといふなり。又目をふさぎ心を観念にすませば。普賢又生身の菩薩にてましましけり。上人随喜の涙をしくいまして。暇を申して出で給ふほどに。十町ばかり去り給ひてのち。此の長者は俄に身まかりにけり。此の長者遊女として。年をおくりしかども。誰かこれを生身の菩薩とは。思ひ侍りし。ただなべての女とこそ思ひけめ。貴のぼまつにておはしましける事。貴々殊勝くぞ侍る。都てかかる三世の諸仏菩薩かたちをかくしてうら救ひ給へども。おろかなる眼に。是あつくして。只ある月のあらはれぬに侍る。悲しきかなや。菩薩にむかひながら。遊女と見る事を。悲しきかな。浮き心なるやうの有るにがら。さまら数の言葉と思ふ事を。普賢又此の長者の。やがてはなくなり給へる事。なかるやうの有るにや。まことの菩薩はれぬとて。いまぞかりけるやらん。又普賢人に謂まれ給ひぬれば。是中有にていまぞおりけん。此の菩薩は普賢にのせて侍り。ことの見ずごしがたき事のせ侍り。菩提をするにはあ

らず。さればさとりのまへには。一切の衆生の音。みな妙なる御法に侍る。此の遊女の歌の法文なるにて。ひしと我に思ひさだめて侍り。あはれいまさかのさとりをひらきて見ばや。いかに此の世に。思ひをとどめいれらん人の。おろかに覚えん。世に思ひは何むる。火宅としらざるほどの事なり。火宅とししりなんに。何としてかしばしも留らんと思ふ事侍らん。御法に心をとめておもふに。見ずしらざる所はしばらく是を置き。日本一州の分に。あらゆる人いくばくかある。其の中に誰かひとりとして。此の世にながらへのこる。八十の御齢はたもつものまれなり。そもそも死して又何のところへか行く。又何れの所にか留りはてん。生じてはしやうじ。生の始をしらず。死しては死し。死のをはりをしらず。三途つみのすみかにあらず。廻りめぐる所。暫しばしのほどのやどりなり。衆生の上下し。草の葉に留るににたり。何を定むる所としてか。心にも思ひをとどめん。此の身のかたち。又天人ある事侍らず。人生るれば人身なり。鳥の身をうけぬれば。則ち鳥のかたちなり。されば。此の身もはてしなければ。思ひを是にも留むべからず。たまゆきて留りはつべきは。仏果えんまんのくらひうけて。菩提をあらためざるは仏身なり。しかあるに留りはて。うけはつべきをば。ねがふ心なくて此のかりなるやどりの中の。はかなき身におもひをのこさん事。返々もおろかに侍り。

〔八〕建礼門院の侍武蔵野にて読法花事

さいつころ東国修行の時。むさしのをすぎ侍りしに。四方の草のみしげりて人もすまず。秋花色色にさきみだれて。さながらもの錦をひろげたらん心ちのし侍りて。むさし野は行けども秋のはてぞなき。いかなる風かすゑにふくらんと。はるはる思ひやり侍り。かくてやうやう分け入りて見れば。花をたおりて[illegible]るせる僧あり。「年は五十ばかりにやならんと見ゆるほどなるが。花のつくえに法花経ならべて。入[illegible]山[illegible]と。たらとき声してよめりけり。何すぢの人ならんと。床しく覚え侍りて。近く寄り差しくたづぬるに。建礼門院に侍りて侍りしが。女院におくれ奉りし時。世のさだめなくはかなさの思ひしられて。手づからもとどりを切りて。住みなれし都をばはなれ侍りき。」されども何のつとめをすべしとも思ひ定め侍らず。たどりありき侍りし程に。一乗妙典にすぎて。目出たき御法なしと聞かれ侍えし事。法花経の中に。十方仏土中唯有一乗法無二亦無三と説かれて。後世のつとめとはし侍らんと思ひて。おこたらずよみ奉るになん侍り。「此の野中にすみて。すでにおほくの年をおくりぬれど。仏法のちからにや。虎狼にもあやまたれず。又くい物などは時々ゆゆしき人の恵みて。[illegible]のごとくに白き物を一つたびぬれば。くはざるさきに腹のはしくもなく侍るなんといへり。すでに

仙人になりにけるにや。天竺童子以仙仕の御文。ことに有りがたくぞ侍る。盛衰無常なんどは。世間のものかならず耳にあづかる事に侍る。此の事も世間におはしけり。しかはあれども。百年のかずつもりて。既に骨となれり。誰れ一つよろこべる事は。かくのごとくにいみじき人々あまた見侍りぬれば。さすがに無常転変のちからもむなしからじと覚え侍り。世につかへましかば。「雲に[illegible]を見あげて。色なる袂に心うつして。煙のけぶりは富士の高嶺にまがひ。「恋の涙は[illegible]がたのはやき瀬によそへて日数はつもるとも。思ひははるるすゑなくて。むなしく此の世はくれぬべかりし身の。はかなき世ぞと思ひなして。かく沙門のたぐいとなり侍りて。秋夜の月を眺み長夜の睡りをまちて。すこしの善根をもし侍りぬと。思ひしおりは。法界の衆生にさながらおよぼして。一つはちすの上に廻向するに侍る。[illegible]我らは無上菩提のそのかみ。[illegible]の[illegible]なんどにて。仏をむすび奉りけるにや。すゞろに阿弥陀仏の御もしく貴とく覚え侍る。なげきの森かなしびの門ほそにもかこつかたとては。此の仏の御名を唱へ奉り。「諸菩薩衆のたぐひ極楽浄土のすみか。[illegible]さえて。[illegible]ひとりすさまじきやからまで。たゞ頼む力とては。此の阿弥陀仏のみなり。されば凡夫のえんのふかくいまぞかりける事は。これにてしり侍りぬべし。ことに有がたくぞ覚え侍る。

〔九〕新院之三位殿心の事

さいつころ。かしらおろして侍りし比。[illegible]もせまはじくて。三[illegible]の[illegible]人[illegible]の[illegible]にまかりたりしに。折ふし[illegible]人たかはれ侍りしかば。待ちたてまつらんと思ひて。東むかひなる[illegible]の内に。うちやすみて侍るにあてやかなる声を。わざとやつせるとみへ侍りて。月しろなど[illegible]かにて。[illegible]く[illegible]を出でたる人と見え侍るが。衣には月もかけで。[illegible]の[illegible]をながめて。ことさまのゆふにおぼえしほどに。[illegible]の衣の袖に[illegible]かかりしを。又つくづくとまもり侍りしほどから。たゞのものとは見えず。

[illegible]をだにいまはかたみの[illegible]ころも

と申て侍りしかば。此人とりあへず。

あだにも袖をふくあらしかな

とつけて侍りき。あまりにおもしろく覚え侍りしかば。[illegible]と申すにか。又[illegible]のむかしの[illegible]も。[illegible]かまほしく侍るとかたらひしかば。[illegible]は[illegible]にちかくめしつかはれ侍りて。かたぢけなくも[illegible]の月の[illegible]をもながめ。[illegible]山の[illegible]をも年をへて見侍り。わづかに位三品にいたりて侍りしほどに。はからざるに[illegible]。ほのぼのとありし[illegible]にて。はかなくならせ給ひしかば。世の[illegible]の[illegible]ひしられて。[illegible]ばかりのぐそくをも身にそへず。年ごろの[illegible]のおはしまし侍りけるを。とりてまかり出て侍り。されども[illegible]するつとめも侍らずとのたまはせし。[illegible]くにもすゞろに[illegible]のせきあへず侍りき。朝に生れ夕にしする。はかなき世とはたれおもへるぞかし。然るにけふは友にまじはりて。ひかげのかたぶくをもしらず。明日は世をわたりて[illegible]の[illegible]の音にも[illegible]きおどろかず。鳥部山のけぶりとのぼるをもしらざらんに。此の三位の[illegible]に[illegible]のこころにしられ侍りて。浮世をのがれていまそかりける。かへすがへす有りがたく侍り。男ずや[illegible]をこそはかなき[illegible]とはいふめるに。今[illegible]のまのおさがほの花におくれぬる事を。[illegible]の上にかける[illegible]。[illegible]になびけるは。[illegible]やさきだちて[illegible]れんとする。[illegible]やさきに消えむとする。ともにあだなる身なり。人もまたしかなり。[illegible]の[illegible]に花を[illegible]ずるやから。花やさきに人やさきに。いづれかさきたらんとせる。秋の夜の月をながむる人。月やさきに雲がくれせん。我や山にかくれなん。実に[illegible]まを[illegible]すいなづまの。[illegible]なき[illegible]の身をもちて。我が身の上をほめ。人の上をいひて。ひつじのあゆみのちかづきぬることをも。しらざる事のいと[illegible]には侍らずや。あはれ[illegible]を[illegible]を。しるまでの心は侍らずとも。[illegible]を常に心に、わすれぬほどの心ざしの。[illegible]のつげ給はりて。わが身をさしはなちて[illegible]ひを[illegible]めて。秋の世のつととしはんべらばや。[illegible]の大師の[illegible]に曰く。[illegible]る[illegible]も[illegible]にまじはれば。ためざるに[illegible]にならるといへり。[illegible]なるかなや。しかあれば。げにげにかゝらん人にそひて。常に世のはかなき事をも。聞き侍る[illegible]ならば。我が心をためんとにはあらずとも。自然に直にして[illegible]をもさとるべし。

撰集抄第五終

撰集抄第六目録

〔一〕[illegible]之[illegible]事
〔二〕[illegible]之事
〔三〕[illegible]之事
〔四〕[illegible]事
〔五〕[illegible]事
〔六〕[illegible]事
〔七〕[illegible]事
〔八〕[illegible]之事

西行記

撰集抄第六

（一）[illegible]之孝子の事

むかしもろこしに孝子といへる人侍りき。かれは我が朝の大夫の史なんどやうの、人にぞ侍りける。[illegible]の時代に仕へて公事をおこなふほどに。冬の日くれ易くて。白陽にしの山にかたぶき。金[illegible]のみねに出づるほどに。公事はてければ。我が家になすべきわざ侍りて。夜の更けぬるをかへり見ず。僕人一人をなんぐして。はるかの野にぞ[illegible]えられける。いたく夜更けぬれば。人をとがむる里の犬も侍るべからず。只そこはかとなく。荒野のうへに白骨すさろにつもる。木枝にむすばぬ旅の枕を。嵐まぞくぐる音ばかり。心すごくぞ聞えける。人里もはるかにさりぬ。心をなぐさむる一声のかゝ見も。うちたえ聞えねば。いとゞおぼつかなくぞ侍りける。かくて遥行くほどに。かすかに火の見えければ。うれしく覚えて。駒をはやめて近くならん事を急ぐ。かう/＼して尋ねつきて見れば。四方あばれて内も更に外なるに。古にけだかくらうたきにようばうの琴ひきかけて。琴を弾きはんべり。これは誰ならんと見る目めづらかに覚えて。いそぎ門を叩きて。誰ならんといふに。

此の女房とばかりありて。ふつにおもひよらずと。もてはなちつるを。[illegible]あながちに云ひければ。とばかりうちためらひて。さらば此へとて入れたり。あらはにてはさるあばれて見えけれど。内にてはまるやうな[illegible]に。[illegible]に火かきたてて琴をたれたり。やや[illegible]みれば。いよ/＼[illegible]まうて侍りける。琴の音つねよりおもしろく。むらすみわたりてぞ侍りける。[illegible]もかかる[illegible]には。何とてすみおはします。いとゞおぼつかなくなんといへば。此の三年とのところに住み侍るなりとこたふ。かくて有明の月もかげうすくなり。鶏もやうやくしらみわたりて。野寺のかねもほのかに[illegible]の下にをちき。八声の鳥もかすかに聞きわたれば。此の女房ちと臥刀を見まはしたれば。茫々たる野のすゝき一むらしげれる中に。死骨の中にぞねたりける。あさましさかぎりなくて。[illegible]おきつつ駒にとりのり。ふちをあげて里に行きつきて。此の野の中しかじかの所にはいかなる者か侍る。かかる事侍ると問ひければ。里のものども。おなじことばにいひけるは。しかあるらん。此の里に孝子といふ人。みめうつくしきむすめ侍り。常には琴をなん弾き侍りしが。父母にさきだつて身まかりしかば。かの野のほとりにすてをきて侍るが。今まで其の骨。夜るは女房に変じて琴をなん弾くなりとこたへけりと。かたりつたへて侍り。いとふしぎにぞ侍る。実はされば いかなる事やらんと。おもしろう思ふに。つきにし名残にもあれば。死して後も猶かの野に心のかよひきて。わがは

ねをもとめて。[illegible]をおひきせて。[illegible]を射けるにや。しか〳〵と聞きては何となく。おそろしくおぼえけれども。又[illegible]なるかたも侍るべし。されば何事も心にいだく物をば。思ふまじき事にや侍るらん。

（二）[illegible]之事

中比。[illegible]。にし山の花見んとて。さるべきすき人ども誘ひつれて。（七）大井川の千本のさくらながむとて。川のほとりにて。木の間にたゞよふ花の波におぼれ。もくづにまじるわざをなんなげひて。心をいたましめ。心なき風を恨みなんどして。日をくらし詠め給へりけり。いかだにのり。（八）むかひのはたにこぎよせて。おの〳〵おりたち給によら侍にくだりて。あそびなんどし給ひけるに。ある木のもとに。よはひ六そじばかりなるが。かたびら一つをなんきたる僧の[illegible]する侍り。人々見付けてむらがりよりて何事をし給ふ人ぞ。いづくのたれがしといへる人になんど。たづねられけるに。[illegible]ばかりのいらへもせず。やゝほどへて。先づ人々は何とてこれには来り給ふにかといふに。[illegible]こたへられけるやうは。我は花を見に来れりとのたまはれば。此の僧[illegible]もしかなりといふ。かく思ひ入りたる人なからんと見えければ。法文の心のはるけぬべき。の給せはよと。あながちにせめられて。[illegible]（九）[illegible]といふ。文をぞ書し侍りける。さればこそとよ。たゞ

人にはおはせざりけるにとて。かさねて此の文の心なんど。とひあはれければ。実に日比のやみも晴るるばかりいひければ。おの〳〵やがてもとどりおろし。同行とやならましと。おぼゆるほどにぞ侍りける。さても此のひじり。此の山にこもりゐて。語り人にもけがされず。さとり給はんはさる事に侍れども。自利利他平等なるこそ。菩薩の行には侍れば。京ざまに出給ひて。人をも教化したまへかしと。おの〳〵すすめ給へども。露ばかりだにも。さもとおぼしたる心見え侍らねば。此のひじりの[illegible]のおしきままに。各々もやどへ帰り給ふ事も侍らで。さかしき山に草衣をかたしきて。よもすがら法文をぞとはれける。夜あけてのち今はさのみあるべきわざならねば。此のひじりにもなく〳〵わかれて。又まいらんなんどちぎりて[illegible]かく。

（一〇）なきてぞかへる春のあけぼの

とのたまひたるに。此の僧やがて。

またもこん秋をたのむの雁だにも

と付けたるに。いよ〳〵思ひましてかへりき。其の後たづね行きたりけるには見え侍らずとなん。実にあはれなる事かな。山ふかくすみて[illegible]一の悟りひらきて。いまぞかりけん心のうち。[illegible]のながれはにごるとも。此の人の心のそこは。露ばかりもにごらじとおぼへて[illegible]しくぞ侍る。凡

讃歎なり。此はやがて本なれば。経の文をむすび。経のたきぎを取り。手をうちあしをはたらかすも仏法にこそ。なにはの事か。のりならぬなんども。さとらぬ人のまへには。此[illegible]に随喜して[illegible]不軽大士とかはれり。外の縁のひらけん。まづすぐもたつとくぞおぼゆる。[illegible]も又此の[illegible]の。此の[illegible]の[illegible]をおしみて。まかしき山野の行あひに。[illegible]ねを枕にし。苔の衣をかさねて。夜をあかされけんも。をとらずたつとくぞ侍る。[illegible]よもむかしからじ。あはれ此の世にはかゝる人々は。よもおはせじ物を。

〔三〕 [illegible]大谷[illegible]の事

「むかし[illegible]のくにに。大谷といふ野の中に。かたのごとくの庵むすびておれる僧一人侍りき。時々[illegible]に出て食をこふて。命をつぐ人につかはれて。身をたすかるはかりことをなしつつ。世をわたり侍りけるとかや。[illegible]の里に。[illegible]むちをびただしく。はやりて[illegible]しづ心なく病みをりけり。其の中にするかたもなく貧しきものの夫を十でになる[illegible]に見なして[illegible]なりけるもの。又かの[illegible]をつぎてやみふせりけり。すまざらんすゝ命もつぎがたきに。まして[illegible]まくらも[illegible]えねば。いのちもたえぬべくると。里のもののさたしはんべりけるを。此の僧はのきまて[illegible]人にもしられず。かの所にゆきて見れば。穴もとるますやみくるひて。[illegible]をはらざりけるを。とかくこしらへしづめて。[illegible]おぼゆると見ゆる時は。念仏をすすめけり。かくてやうやくむちもよげに見ゆる時は。えもいはぬ[illegible]などして。すすめて命をつぎけり。此やみける女は。もたる物も侍らねば。此の僧の里に[illegible]りて[illegible]をこひて。とかくいとなみて人にもしられずして。命をささへけり。しかあるのみならず。[illegible]は教化して。念仏を申させけるとかや。此のひじりの有さま。よろづにつゐて。あはれび深くて。くるしびのおほき有さまのるひを見ては。なみだをながされければ。目はいつもなきはれ。袂はひるまもなかりけるとかや。かくてさすらへおはしけるが。[illegible]し[illegible]気のころ。かの庵にて三月二十五日のあかつきに終りをとげ給へり。[illegible]そらに聞え。いきすう[illegible]にみちて往生したまへりと。[illegible]にはのせてはんべり。此の人の有さま[illegible]にのせたりしを。[illegible]見せしになみだをながしき。[illegible]の[illegible]の上にては。ねぶりをしのぎて[illegible]をわすれ。大衆の[illegible]の中には。[illegible]のちかひ。とこしなへなりと侍るこそ。有り難くたつとく覚えて。かなはざらんまでも。此の如く心を[illegible]さばやと。思ひて侍りしか。

〔四〕 仲算大徳[illegible]の事

むかし山階寺に[illegible]といふ所に。仲算大徳とていみじき智者いまそかりけり。[illegible]の[illegible]の弟子にておはしけるなり。水のながれより出来給へる化人とぞ申しつたへて侍る。かの人いま

だ都にて空晴僧都の室におはしけるとき。空也上人彼大徳の事尋ね奉らんとて。空晴のもとにゐましてけり。折ふし僧都他行のひまにて。此の仲算大徳の室にておはするばかりを留めおきにけり。僧都はものへ出給ふよしを空也上人に聞え給ふに。彼此の児のただひとりある事をあはれびて。内に入れてあの囲碁ばんとりていませよ。いご打ちて見せ奉らんとのたまはせければ。仲算いごばんを取りあげんとし給ふに。更にあがらざりけるを。上人見給ひて。「さらば此の念珠を盤の上におき給へとあれば。ひじりののたまはするままに。もて行きてばんの上に置き給ひたれば。念珠のいごばんのあしをうちまきて。ひじりの前に持ちて来りにけりと。申しつたへて侍り。僧正の前におもしろき事こそなかりけれとぞ覚え侍る。彼の空也上人は醍醐第五の皇子とも申し。又往生伝には化人としるせり。かやうにさとりをひらき給ふ人のまへには。「つえ念珠までも。其の徳をあらはす事ふしぎにしも侍らじかし。延喜の御代のすえつかたのころ。此の仲算大徳同じ友あまたいざなひて。あづまのかたへ修行し給ひけるに。天下日でり。すべてたえせぬ。し水なども。みなひかはきて。うゑつかるるものおほく侍り。しかはあれども。仏ぼさつの御たすけにや侍りけん。近江国にある山中に。し水の有りけるをはるかの遠き所よりも。あつまりくみけるなり。ある女の水をいただき行きけるを。仲算大徳つかれ侍り。ちとのどうるほさんとあるに。此の女いふやうたつとけなるひじりの水をもわかし出しのみ給へかし。我々はるばるの所より。からくして汲みたる水を。こい給ふべきことはりなしとこたへければ。此の大徳。さうなり。さらば水をわかしてのみなんとて。山の岸にはしりよりて。「杖をぬひて山のはなを。掘り給ひたりければ。実にすずしく清き水の。たきのごとくにてながれ出侍るに。閼伽井のしみづといふはこれなり。其の里のものども。目もめづらかに覚えて。ことものめならず。其の後はいかなる日でりにもたえずぞ侍るとかや。又四五日へて。浄蔵貴所の過ぎられけるが。此のし水の事を聞き給ひて。我もさらば結縁せんとて。又其のそばをほられたりければ。さきのよりはすくなけれども。清水ながれわきけり。小閼伽井と云ふはこれに侍る。あはれ日出度いまそかりける人々かな。たゞし此の仲算大徳は権者にて。千手観音とあらはれて。瀧につたひてのぼり給ひしのちは。又も見へ給はずと。記にはちうせり。久遠正覚の如来にて。いまそかりければ。かやうのふしぎもげんじ給ふ。かならずしもおどろきさはぐべきにしも侍らず。浄蔵は善宰相の。まさしき八男ぞかし。それに八坂の塔のゆがめるを。いのりなをし。父の宰相を此の土の縁つきてさり給ひしに。一条のはしもとに行きあひて。しばらく。念誦して蘇生し奉られけるこそ。誠へ聞くも有りがたく侍りし。其の一条のはしをば。もどり橋といへるは宰相の。よみがへり給へるゆへに名付けて侍る。源氏の宇治の巻に。ゆくはかへるはしなりと

申したるは。実なりとて[illegible]は申されしか。宇治のはしといへるあやまれる事にや侍らん。

（五）[illegible]

「むかし叡山に寂心の弟子といふ。やんごとなき人おはしけり。常に[illegible]を修して。或は[illegible]に一室をことごとく。水になし給ふわざをなんし給ひける。

あるとき内記入道[illegible]（三〇）わらじやうのざうだんせまほしくて。寂心の弟子の室におわして。常にすみ給ふ所をあけて見給ふに。水たたへて弟子も見え給はねば。いかさまにもやうある事と。おぼして出でられける時。あたりに枕のありけるを。水の中へ投入れて帰られにけり。かくて次の日。又内記入道のおはし侍りけるに。[illegible]して申されけるは。それがしがむねに。そこのまくらを投げ入れ給ひて。よにむつかしく侍るに。取りて給はせなんやと聞えければ。入道もゆゆしき人にていまそかりければ。きのふの事よと心得て。左右におよび侍らずと。こたへられたれば。うれしく侍るとて。しばらく戸をとぢておはしけるほどに。寂心の弟子のすがらくゝと水になりて。一室みな水をたたへて。波はげしく侍れど。内記入道は。いささかもぬれ給はず侍りし。其の水に枕のうきたりけるをとりて。障子よりそとへなげ出し給ひてけり。かくてしばらく侍りて。[illegible]給ひてけり。いとふしぎに侍る。心に寂心深くて。[illegible]入道おこたり侍らねば。火生三昧に入る時は。身よりほむらを出し。水観にぢうする時には。水をわかすならひに侍るすべて上代末代によるべからず。[illegible]の末下にもおよるまじき事に侍る。たゞ寂心のみこそかくのごとくのふしぎを現する人にては侍れ。[illegible]もかくは聞へども。今のおぜずはなれがたく。末代の大つねになれたり。あはれいつ世の心の澄り侍らんずるやらん。

（六）[illegible]上に死す

「淀を伏に下[illegible]とね川のほとりに。いづくの者ともしらず。かたのごとくの庵むすんで。あかしくらせる僧一人はんべり。よろづ[illegible]にて[illegible]ばかりもけがれたる心なし。行すみなく心ままにうはにて。[illegible]を立つるわざいまだ見えざれば。里の人もあはれにたうとがりて。人は[illegible]とぞ名に付けてよびあいける。かくて二とせばかりへて五月のころ。とね川おびたゞしく出でて家ひしもかけぬ家の具足ともおほくながれうせ。命をうしなふともがら。かぞへつくすべくもなし。此の里の人々。都も此の[illegible]は一定ながれうせぬらん。あはれゆゝしかりし。[illegible]者にてありし人をなんど。おのおのしのびあひたれど侍る。かいるまじき事なればたれたれも。ねぞのみなきて有けるに。年来[illegible]にだんなとたのみたりしおとこ。あまりの事の有りさまのおぼつかなさに。跡をなりとも見んとて。人々三人とりくみて。およぎ渡り見ければ。庵は皆ながれて此の[illegible]の上に[illegible]して目をふさ

ぎてゐたり。ふしぎともいふにおろかに侍る。いそぎおよぎよりて。（三四）いざさせ給へと云ひければ。はるかに物ものたまはず。やゝまたせて。今しばらくありて。手づからまいらん。おの〳〵あやまちもぞし給ふな。いそぎて帰り給へとておはするを。猶あさましく袖を引きて。ゆかむとすれども。猶はたらきも給はず。水の上に臥給ひたれども。き給へる衣いさゝかもぬれざりけりと。かくいへども聞き入れ給はねば。此のおのこ三人は。くたびれもぞするとて。つゐにむなしく帰りにけり。其の後はるかに。月たけてのちぞつき給へりける。人々かゝる所にておはしける船をとて。おがみければ。なじかはと。のたまひてけれども。人々聞きつたへて走りあつまりておがみければ。ある夜の夜半ばかりに。うせ給ひにけりとなん。里の者なげきかなしびて。たづねもとむれども。さらに見え給はずとぞ。あまりにこひしたひて。年来見なれ奉つる仏師をよびて其の姿をつくりて。彼の庵の跡にもとのやうなる庵を立て。うせ給ひし日なればとて。月の十八日ごとに。一里の人々よりあつまつて。（三五）南無無相房といふ御名をとなへてえんをむすびけるとぞ。此の事げにたゞごとゝも覚えず。聖者なんどの化して。衆生をすくひ給ひけるやらんとこそ覚え侍れ。うせ給へる日十八日に侍れば。非花臺の中に。八日十八日を結縁の日とせんと。あらび給ひけると。とかれたるに相あたりて。ことにいみじくおぼゆる。大水のゆきたる日は八日とすらん。何ともあれ。其の里の人は往生たのもしくぞ侍るめる。おなじ水に流れ死にけん人までも。かへす〳〵むつまじく侍り。かの御かげは。まのあたり。おがみたてまつりにき。

（七）覚鑁上人入定之中に顕不動尊事

近きころ高野の御山に。（三六）覚鑁上人とて。やんごとなきひじりおはしけり。顕密乗のさとりをきはめて一印頓成の春の花はにほひを。密實のかすみの衣にうつし。即心念仏の秋の月はひかりを無相の心の内にてらして。弘法大師のむかしの跡をおふて傳法院といふ所をたて。（三七）龍花三會のあかつきを待ちて入定し給へりとかや。時の人あさみあへるわざ。餘にもすぎたり。（三八）聞後のつたなきのほるもくだるもたかせ舟に。みなれ棹さしわびても。かの傳法院へまふで東夜のけはしき台嶺山に。駒をはやめ。とをきをしのぎても。参りあつまりて。たかきいやしき市をなして。道も更にさりあへず。さうなりさこそ侍りけめ。事もけたたましき程なり。かかるままに本寺の衆徒あつまりて。おの〳〵きするやう。我朝六十餘州には。大師の外たれの人か定にいれるはある。中には我下りて我が山に。いかなる行徳ある者なりとも。いかでか大師の御まねをしては侍るべき。いざや傳法院へよせて彼の覚鑁が入定さまさんと議して。俄によせにけり。かくばんの門徒ふせぐべきちからなくてちり〳〵になり侍りぬ。本寺の衆入定のところにみだれ入りて見るに。不動の尊二躰おはしま

しけり。一[illegible]は[illegible]の日ごろの[illegible]の不[illegible]にておはします。今一[illegible]は。[illegible]の化したるとおぼゆ。[illegible]しいづれと見わきがたし。いかゞすべきとためらひけるに。或る[illegible]の一[illegible]の不[illegible]をさぐり[illegible]りければ。すこしあたたかにおはしければ。これこそ[illegible]よとて太刀にて[illegible]りけれども。[illegible]すれざりけるを。なじかはとていたくきるほどに。[illegible]定さめて。つねにきられ給へり。かゝりければ人々も。行[illegible]へはね入りて[illegible]りにけり。其の[illegible]は。こは心にもまかせぬわざかな。[illegible]れ此の山にすましよて[illegible]来といふ所に庵をむすびておはしけるが。七十二と云ひける三月十二日なん。「[illegible]の[illegible]をとげ給へり。[illegible]に[illegible]え地に花ふりて。げに(二九)寸ひありて。[illegible]りをとり給へるとなん。[illegible]もかき[illegible]給へることばの中に[illegible]三[illegible]の[illegible]。[illegible]を[illegible]し[illegible]を打ちたりしともがらをも。[illegible]くてそばめかれかれに[illegible]ふ事なし。[illegible]じく[illegible]せんとこそ。[illegible]を[illegible]給ひけれ。此のことば[illegible]に[illegible]にしみて。たつとくぞ侍る。[illegible]はみなたれ〳〵も[illegible]まねをせよとこそ[illegible]しめし侍れど。人ありてつたなきままにこそうちかなはである事なれ。しかる上は此の[illegible]人の。大[illegible]のまねして[illegible]にいらるゝは。たれ〳〵もよろこぶべきに。是をそばめけんも。[illegible]すゞ〳〵おそろしくぞ侍る。此の[illegible]はたゞ人にはいませざりけるとや。白河院の主者の[illegible]をおがみまいらせんとて。七日[illegible]いのり侍りけるに。七日にあたる夜の[illegible]に。明日の[illegible]時に[illegible]の[illegible]とて[illegible]のまいり侍らんを。おがませましませ。それぞ実の[illegible]

[illegible]の阿[illegible]陀にて。いませんずると[illegible]して。[illegible]さめさせ給ひにけり。かくて御心もとなく。いかなる[illegible]か[illegible]らんずらんとまたせおわしますに。此の[illegible]人。[illegible]に[illegible]こんりうの事を申さんとてまいり給へりけるを。[illegible]へめさせ給ひたりければ。[illegible]より[illegible]して。[illegible]には見えさせ給ひければ。[illegible]ふしぎに[illegible]えて。やがて五ヶ[illegible]を[illegible]はせけると申し[illegible]へて侍り。[illegible]のすがたを凡夫に化[illegible]しましく〳〵て。[illegible]らごとをのまう〳〵の。[illegible]のために[illegible]を[illegible]びて。[illegible]へ[illegible]ひを[illegible]ふ事申し出むこともをろかなれども。この事を[illegible]くにすゞろになみだもれ出て。[illegible]をしぼりかねき。されば。[illegible]王の[illegible]。かの[illegible]に生れて。ふかく[illegible]をむすびけるやらん。すずろにたのもしくおぼへて[illegible]ある[illegible]も。此の[illegible]をとなへ。[illegible]のさむく。かてのともしきにもかこつかたとは。[illegible][illegible]を申せば[illegible]いよ〳〵[illegible]くぞ[illegible]え侍る。

（八）[illegible]と武士に[illegible]の[illegible]の事

むかし[illegible]に。一[illegible]といふ武士の本へ。つたなげなる[illegible]の入りきて。[illegible]づかへたてまつらんといひければ。それはいづくの[illegible]ぞと云ふに。[illegible]の[illegible]の[illegible]にて侍る。[illegible]ごろ[illegible]にて[illegible]ものにあひかかりてなんすぐ侍りつるが。(三〇)はかなく見なしてのちは。何にかかりて命をつぐべしともなきままに。[illegible]なんし侍るといふを。[illegible]しあはれみておきにけり。[illegible]は。一日に一[illegible]ばかり

たゞ一度、午の中ばかりにくひける外は。すべてなにもくはず。人のあはれびて。よきものなんどをすゝむれども。かつてくはずぞ有りける。誦経をもいはで心よくつかはれければ。あるじも又なきものに思へり。たれ〳〵もいとをしみ。なかしき心侍りあて情をかけゝり。一年あまり此所にありけるが。いなかなりける事のいりけるにや。かきけすごとくにうせ侍りぬ。あるじを初めてありとある人。さもおもはしかりつる物をとて。泣きかなしびけれども更にかひなし。猶かのすみつる所をあけてみれば。壁にめでたき手跡にて。日につきをし侍る。何事ぞと見れば。いく歳かの日。四業障をはらふおもひをなして。釈迦三尊を拝すなり。又其の日は戌のなかばより寅の半まで座禅しぬ。次の日は不動呪。ある時は聖観音を念ずなんといふ。一筋に仏道つとめの日記にて侍りける。是を見るに目かきくらさるゝ心ちして。なみだをながさぬ人は侍らざりけり。誰といふ智者の物をかくして。つぶねとなられけるやらん侍あはれ玄賓僧都にやいまぞかるらんと。むかしのあとゆかしくぞ侍る。物をおほくくい物はぬさへ。よく思ひ入らるゝふしの侍りけりと。心の中すみてたつとくぞ侍る。はかりなき劫より出でくる。物をするわざもなくてくひつゝ。是に観していとひなるゝ心のらんは。宿報ふかゝるべし。猶も此の人何の所にか心をすましておはすらん。ころほひは玄賓にあひたれど。さだめてその人とさだむる事をえず。あはれ床しかりける心かな。

撰集抄第六 終

撰集抄第七　目録

〔一〕山[illegible]の僧三世不可[illegible]の事
〔二〕[illegible]事
〔三〕大[illegible]之[illegible]事
〔四〕[illegible]大[illegible]之[illegible]事
〔五〕[illegible]山伏の笈の中入[illegible]事
〔六〕山[illegible]児[illegible]事
〔七〕小[illegible]詩作事
〔八〕[illegible]詩作事
〔九〕[illegible]事
〔十〕大[illegible]之事
〔十一〕[illegible]大臣[illegible]事
〔十二〕[illegible]天[illegible]詩歌ニ有[illegible]事

撰集抄第七

〔一〕山[illegible]の僧三世不可[illegible]の事

長承の末の年。出家の思ひとげて。貴き所々をも拝し。面白き所をも見まほしく覚えて。（三）吉野山に上りて、三年をおくり侍りき。山の有さま花の色。木々の[illegible]ところの[illegible]なる事。都にて思ひやりしには猶まさりて面白く侍りき。ならのはまではこちたき。深山の嵐を花のすみかによはり。[illegible]は雪に咲きかはり。行きまめづらかに侍り。上下の[illegible]・[illegible]の[illegible]ありさま。心なからんすら見すごしがたく侍るべし。されば此所は心もとまりて。覚え侍りしまゝに。三年をすぐし侍りき。ある年の三月のころ[illegible]の前に。山ざくらのさきみだれて。よにおもしろくながめわたりて侍るに。年も五十にたけたる僧の実につたなげなるが。かた〳〵のたもとに花をつゝめりけるが。此の花のしたによりきて。うらやすみてゐたり。あらさんのものや。[illegible]なんども侍らねど。世のすぎがたさに。人の門にたゞずみて。袖をひろぐるわざをし侍りしにこそとうち思ひて。何となくからかに[illegible]して侍るに。此の僧の立ち出でて。[illegible]りなんとするを。[illegible]ばさつは。いきとしいけるたぐひを。

あはれみ給へば。あれをとても身すごすべきにあらず。そのうへおなじ修行をそなふる人なり。すこしもそばむる心侍らじと思ひなして。しばらく花ながめ給へといひたるに。此の僧うれしくのたまはせ侍るとて。

　さかぬまもさてこそすぎれ山ざくら。さのみや花のかげに宿らん

とこそ詠み侍れと。うちに答へたる嬉しさに。たゞ人にはおはせざりけりと思ひて。

　さかぬまは花をのみまつ旅人の。さけばなどてかながめざるらん

と返し侍りしかば。此の人心よせげに思ひて。我も此の山のおくに。世をのがれ侍るものなり。おはして住家も見給へかしとありしかば。「いざなひつれて見にまかりたれば。さくらの四五本しげれる下に。松の葉をもちて上をふき。そばにもたてまはして有たる蓬の外は。露ちたる物も侍らず。人里はるかに思ひすませる所ならんと見えて。いと物淋しくあらまほしきすみかに侍り。誠も何としてか後世のやみははるけぬべきと。たづね侍りしかば。三世不可得の理とこそ。思ひて侍れとぞこたへられ侍りし。たゞ打やりのこつじきとこそ思ひ侍りつるに。かゝる道心者にていましかりける事よと有りがたくおぼえて。此の庵にすまんほどはと。ちぎりてかへり侍りき。ことさら道心者とぞ見え侍りし。山ふかくすみて。三世不可得のさとりをひらきて。おはしけん心の中。たとへなくぞ侍る。

〔二〕宗順阿闍梨[illegible]事

むかし比叡の山に。宗順といふ人侍りき。（一）[illegible]の普賢にまふでゝおはしける夜の夢に。「普賢のやとおほせのありければ。宗順るなりをかしこまりたるに。汝木寺に籠りなん時に。つりがね鐘のためにおちて。おほくの坊どもを打ちやぶりて。人の命をおほくうしなふべし。汝もかれがために。命をほろぼすべしといへども。汝にこゝろざし深きによりて。今度の命にはかはるべしと。仰せらると見て夢さめ侍りぬ。されば何事のありて。さばかりつよくつりたる鐘の落つべきやと思ひつゝ。叡山にのぼり侍りぬ。去る程に二三日へて。（二）水木寺の鐘とて。末の世まで聞ゆる鐘に。つり緒に落ちて人の家十四五ばかり打ちひさがれて。命をうしなふ人數あまた侍り。此の宗順坊も打ちひさがれたる内にてなん侍る。僧の事なれば。誰も何とてか逃るべきなれば。おほく死に侍りしに。此の宗順阿闍梨ふし床につとめて侍りけるが。家のひさげたる時に。此の本尊の普賢の懺悔。宗順の上におほひて。ことなるあやまち露ばかりなかりけり。いとふしぎにぞ侍る。前夢にて見し夢に違はざりけり。「普賢の御方便ことにあらたにぞ侍る。さても此寺の鐘。本尊のくわんせんにちからをあはせ給ひて。宗順阿闍梨が命をたすけ給ふなるべし。それより此の鐘をば。[illegible]の

くわんをんになぞらへ奉りて。持仏堂をば長谷とぞ申し伝へてはんべる。「大仏の御所」と申し出るも。中々おろかに侍れど。これはいとふしにぞ覚え侍りける。

（三）　大智明神之御事

伯耆国に大山といふ所に。大智の明神と申す神おはします。利益のあらたなる事。実に春の日の山の端に出づるがごとくに侍り。御本地は地蔵菩薩にておはしますとぞ。むかし依道といひける弓取。野に出て鹿を狩りけるほどに。例よりも鹿おほくて。思ひの外に射とゞめにけり。其の鹿どもを取らんとすれば。我が持仏堂に千体の地蔵をすへたてまつりける五寸の御胸に矢を射立て。鹿と見つるは地蔵にぞおはしける。其の時依道あさましくかなしく覚へて。地蔵に取りつき奉りこなきおめきけれども。さらにかひなし。やがて手づからもとどり切りて。我が家を堂につくつて。永く殺生を断り侍りにき。去る程に。称徳天皇の御時。社にはいはひ奉れといふ託宣侍りて。やがて家をやしろになして。大智明神とぞ申し侍る。利益あらたなれば。彼の所の砂だにも。人にはさかのぼりて山に下りてまいり。下向の期を示す。かの所の俗は。明神の御方にむかひて皆なびきける。御殿の霊をあらはし侍るとかや。むなき草木砂までも帰依し奉るわざ。実にありがたくぞ侍る。此の地蔵菩薩の御事は昔盲目女と申し侍りし時。御戸に祈念のために。両眼の大願を発しおほくの誓願を立て修しあがりまし〳〵て。今は無縁のぼさつとはなり給へり。さればむかしの因位の行をいはんには。何の仏、何の菩薩か、此の菩薩には及び給ふべき。されば経の中に。久修練行大願大悲代受苦菩薩と侍る。しかあればこそ。「此の本師釈迦如来忉利天のふもとにて。（五）二仏中間の衆生は。こと〳〵く地蔵化導し給へと仰せられけめ。菩薩もかひ〳〵しう請け取りまし〳〵侍り。然ばもつうじ。菩薩の御心も神かなひ侍るなるべし。中にも今の。大智人の殺生やめんために。鹿の姿に現じて射られ。後に本体をあらはして罪業の我らをして。結縁の信心をもよほさしめ給へる事。かへす〳〵たつとくぞ侍る。

（四）　厳島大明神之御事

（六）治承のころ。安芸国かしまの明神に参り侍れば。御社は海なかひに侍り。前は海うしろは山にて。やしろいらかをならべ（七）廻廊軒をきしれり。潮だにさせば。廻廊の打板まで海になり。潮だにもひかば（八）まなごにて二三里に及べり。「南は海にてきはもなく侍れば。空はみなれざはさす舟を見。夜は波にやどかる月を見き。北は山にて侍れば。峰の梢におちなくほとゝぎすのはつね。いちはやく聞え。草むらに露をそゆる夜るの鹿。あかつきさけぶ猿の声。みやまおろし松の風。よに物あはれに心すごく侍り。誠に霊地なれば。いろ〳〵の花は。にしきをおほへるにたり。其も何よりおもしろく

侍りしは。[illegible]の上のきくらの。七日をかぎるわかれをつけて。[illegible]をきかりと[illegible]りて侍りし。[illegible]ふし[illegible]ちて。花のあそこに一むらこゝに一むら。なぎさ〳〵入江入江にゆられありき侍りし。かねて[illegible]の内にて入[illegible]山[illegible]と。[illegible]きこゑにてよみ侍りしが。やがて[illegible]みさして。[illegible]しく[illegible]ひしにかんながの[illegible]うちて。[illegible]のすゑを。[illegible]きかばやと[illegible]侍りて。[illegible]の事なんど侍りしにこそ。[illegible]もおはしましけるとは[illegible]ゆべし。其の中に[illegible]れ[illegible]りぬる[illegible]に[illegible]をまもらんとて。三[illegible]山に[illegible]りぬれど。[illegible]所をも[illegible]てず常に守るとぞ。[illegible]たくせんは侍りし。[illegible]も[illegible]のみつ時は。おほくのうろくづ[illegible]にしたがつて。[illegible]てんまで[illegible]り。しほの[illegible]ときは。はるかに[illegible]れば。日に二度まいり下向にたり。されば[illegible]なしからで。定めて耳[illegible]にあづからんとあはれに侍る。又はるかに[illegible]に引きのけて。[illegible]侍り。いさかはと申しけんぞくの[illegible]にしおはしますなり。天下をもらさず。はごくまんとちかひ[illegible]へり。[illegible]千[illegible]にとぶ。[illegible]をはなれば。[illegible]にかける。いまだ天の外にあらざれば。何の[illegible]かりやくにもる丶[illegible]侍らん。かくのごとくにおぼして。[illegible]らをすくはん。かれをたすけんと[illegible]したる。[illegible]おほくましませども。[illegible]ら[illegible]の[illegible]あつくおほふて。心のはれぬほどに。[illegible]も[illegible]にところのましまさぬに侍り。[illegible]れ[illegible]下なりける心かな。[illegible]は[illegible]のある[illegible]を。さてゆるして。むかしの五かいを行ふなく。なしはてん事の心うさよ。いかにせん〳〵。

〔五〕[illegible]山伏[illegible]の中へ入[illegible]る事

おなじころ。こしの方へ[illegible]行し侍りしに。[illegible]のしらねには雪つもり。[illegible]のだけにはけぶりのみ。心ぼそく立のぼるありさま。[illegible]のほやの[illegible]に[illegible]ちりて。下[illegible]は色の[illegible]のおも。[illegible]ひまし行くまの丶わたり[illegible]のまろぶばし。つら丶むすばぬ[illegible]川の水。ながれ行きぬるはてをしらする人もなく。さがしき山路。[illegible]の[illegible]木。しげきがもと。木曾のかけはしふみ見しは。[illegible]れて此の世のおもひでにし。死して[illegible]の。かこつけとせんとまで[illegible]へ侍りき。〔二〕あづまこそおもしろき所と[illegible]きし[illegible]ひ侍りしに。[illegible]のかずにもあらざりけり。[illegible]をつくるには。むさし野のしげれる中に入りしよりも。ならむらさける[illegible]の花。中々心をいたましめき。山路に入りぬれば。うつの山。つたのほそみちよりもすみ[illegible]りてぞ[illegible]えし。〔三〕[illegible]の[illegible]には。[illegible]はらふべきかげもなしとかや。しなのなる〔四〕ほやの[illegible]。[illegible]もあらばと[illegible]めけんいと丶[illegible]ひあはせて。[illegible]もすゞろにおち侍りき。かくて[illegible]く[illegible]行くに。かこの[illegible]りに。今すこしゆきつかで。山のきはに[illegible]一人。おとこ一人侍り。此の男あきれたるやうに侍ることの。見すごしがたさに。何に[illegible]にかと[illegible]ふに。たゞとばかりうちいひて。[illegible]る事も侍らざりしを。なじかは何事なりともくるしく侍るべき。[illegible]てうしろめたなき事は。ふつに侍るまじきぞと。あながちに[illegible]えしかば。此の[illegible]のいふやう。其の事に侍る。[illegible]れ[illegible]を[illegible]かけて

斗藪の行する身に侍り。此の骸はいづれの人にかいますらん。たゞ骸のほどしばらく。行きつれ侍りつるばかりなり。しかあるほどに。此の人におもきかたきの侍りて。行くさきにも待つなり。すでに刀杖のつくるなれば。遁るとてもたすかるべきならねば。共に侍りつる男どもゝ。命にまさる事なしとて。あそこ爰に落ちちりて。たゞ一人せんかたもなくておはしつるが。いとをしくてえなん過ぎやり侍らず。いかゞしてこの骸の助かり給ふべきわざをせんと思へども。かなはで日かげもかたぶけば。羊のあゆみのちかづく心ちして。そばにていと悲しく侍るとて。なみだもせきあへねば。此の男も今日一日の。旅の宿ばかりのなじみに。これ程まで思ひ給ふらん事の忘れがたさ。いかなる世にか報じまいらせんとて泣くめり。ことさまあはれなるまゝに。我も袖をしぼりて。さこゆる事もなく。三人なきゐたり。さても有るべき事ならねば。此の山ぶしの笈の中に。此の人をかくし入れて。ふたりうちともないて敵を待ち侍るに。太刀はき弓矢持ちたるおのこ共。十余人あつまりて行きつるかたに。しかじかの男や侍りつるとたづね侍りしに。此の山伏いさゝかもさはがずさる人はんべりき。此のわたりをせんとありつるが。敵の待つとかや。つぐる人侍りとて。又脇道へとてこそおもむき侍りしかといふ事を聞きて。こは打ちにがしけるぞや。又いざおはんとて。馬にのりふちをうつて。はせ過ぎにけり。扨かれはからくして命をたすかりて。本国につき侍り

ぬ。扨此の山伏をさま／＼に留めしかど。さらに聞き入れず過ぎ去り侍りぬ。我らも去りがたく留め侍りつれども。我らたすける人すらとまらぬをやと思ひしかば。もてはなれ難渋して過し侍りき。あはれたうとかりける山伏のこゝろかな。年来したがへる奴僕すら。はなれ行くに。つゞきもなき人の。そゞろになげひて。我が笈にかくし置きて。敵の前をすぎけんこゝろ。返す／＼ありかたくぞ侍る。たゞ敵のほとりに行きあひ侍るには。他人のつての情はするとも。誰かかくばかりに侍るべき。観世音菩薩の大悲は。かくや深くおはしましけん。人のなげきを我がなげきとし。他のよろこびを自のよろこびと思へるこそは實の慈悲には侍るなれ。自利利他心平等なる如来供養と侍れば。たれ／＼も此のこゝろをまもり給へとなり。

〔六〕山野の尼乞食遁世の事

「近きころ伊賀の国にある山中に独の庵むすむで。尼のやせをとろへて。かほより初めて。手あし實にきたなき尼の。なみだをながして念仏するはんべり。深く思ひ入らん人とは見ゆれども。あまりにかほよりはじめて。きたなくおはするはいかに。さまでは。あらじやと人々いひければ。さらなり。さぞきたなくおぼすらん。されど思ひ給ふは女身なれば。さまもただらかならば。すゞろなる事いひて。ほいならぬ事も侍るべし。さればわざと身をやつすに侍る。常になみだのこぼるる事